

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIV

(伊集院IC～市来IC)

やなぎ はら
柳原遺跡

(日置郡伊集院町)

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）の建設に伴って、平成10年度に実施した日置郡伊集院町に所在する柳原遺跡の発掘調査の記録です。

柳原遺跡は、縄文時代、古墳時代、古代、中世、近世の複合遺跡です。古代の遺構である焼土を伴った土坑群とともに大きな須恵器の甕、赤色や黒色の土器、墨書土器や刻書土器などが発見されました。また、珍しいものとして中世の耳皿や三足坏、多くの青磁や白磁も出土しました。これらの遺構や遺物は、柳原遺跡を知る大きな手掛かりです。

本報告書が県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに文化財の啓発・普及の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力いただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所、伊集院町教育委員会ならびに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

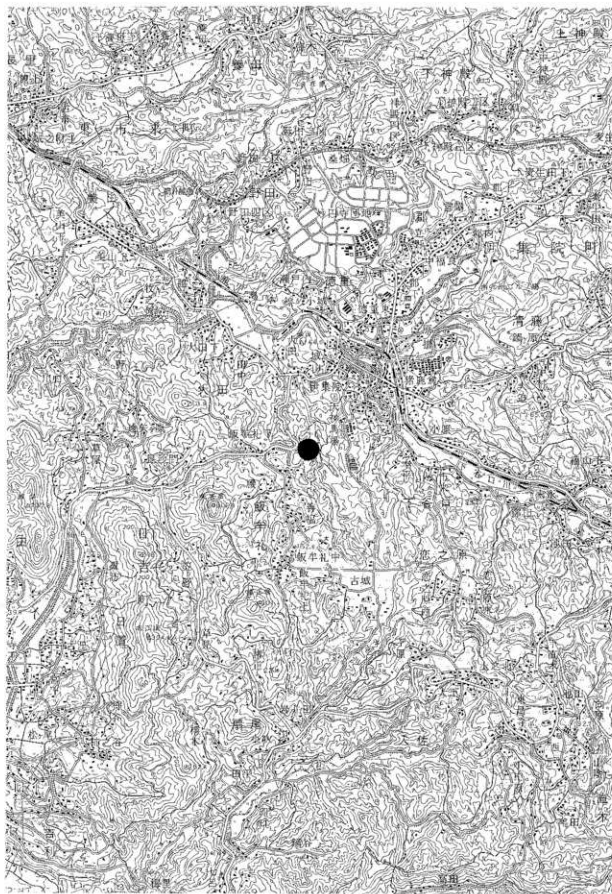
平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 木原俊孝

報 告 書 抄 録

ふりがな	やなぎはらいせき							
書名	柳原遺跡							
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XIV							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	94							
編著者名	最上 優子							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1 Tel 0995-48-5811							
発行年月日	平成17年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇. 〇〇	東経 〇. 〇〇	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
やなぎはらいせき 柳原遺跡	かごしまけん ひろさかぐん 鹿児島県日置郡 伊集院町下谷口 あびの中を流る 字柳原	463639	30-69	31° 36' 52"	13° 23' 39"	確認調査 19971106 ～ 19971112 本調査 19980707 ～ 19981031	8,000㎡	南九州西 回り自動 車道鹿児 島道路建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
柳原遺跡	散布地	縄文時代 早期 晩期 古墳 古代 中世 近世 時期不詳	集石4基 土坑23基 (焼土跡7か所を含む) 溝状遺構 軽石集積、土坑、溝状 遺構	前平式土器・塞ノ神式土 器石鏃・石匙・石皿・磨 石・蔽石・剥片・細片 黒川式土器 成川式土器 土師器・須恵器・墨書土 器・刻書土器 土師器・陶器・磁器・土 製品・石製品 陶器・石製品・古銭 鉄製品				



第1図 柳原遺跡位置図

例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院 I C～市来 I C）建設に伴う柳原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県日置郡伊集院町下谷口字柳原に所在する。
- 3 発掘調査は建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現 国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査事業は平成10年7月7日から平成10年10月31日まで実施し、整理作業及び報告書作成は鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成16年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・表・挿図・図版の遺物番号は一致する。遺構番号も通し番号とする。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書に記載したレベル数値は建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所が提示した工事計画図面に基づく。すべて海拔高である。
- 8 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
- 9 発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は調査担当者が行った。
- 10 本書に掲載した出土遺物の写真撮影は横手浩二郎、吉岡康弘が行った。
- 11 挿図の遺構図については繁昌正幸の協力を得て作成し、本書の執筆・編集は最上優子が担当した。
- 12 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。

目 次

序 文	
報告書抄録	
例 言	
第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の概要	1
第Ⅱ章 発掘調査の経過	6
第1節 調査の経緯	6
第2節 調査の組織	6
第3節 調査の経過（日誌抄）	7
第Ⅲ章 遺跡の位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	10
第Ⅳ章 発掘調査の成果	13
第1節 発掘調査の方法	13
第2節 遺跡の層序	17
第3節 縄文時代の調査	23
第4節 弥生時代の調査	35
第5節 古墳時代の調査	35
第6節 古代の調査	37
第7節 中世の調査	67
第8節 近世の調査	93
第9節 その他の調査	99
第Ⅴ章 調査のまとめ	103
写真図版	105
あとがき	

挿 図 目 次

第1図	柳原遺跡位置図	第37図	黒色土器	52
第2図	南九州西回り自動車道調査遺跡位置図	第38図	赤色土器	54
第3図	周辺遺跡位置図	第39図	須恵質土師器	55
第4図	確認調査トレンチ配置図	第40図	須恵器①	57
第5図	柳原遺跡周辺地形図	第41図	須恵器②	58
第6図	柳原遺跡グリッド配置図	第42図	須恵器③	59
第7図	遺構配置図	第43図	須恵器④	60
第8図	基本土層図	第44図	須恵器⑤	61
第9図	土層断面図①	第45図	須恵器⑥	62
第10図	土層断面図②	第46図	古代 特殊遺物	64
第11図	土層断面図③	第47図	溝状遺構 1・3	68
第12図	土層断面図④	第48図	溝状遺構 2上	69
第13図	土層断面図⑤	第49図	溝状遺構 2下	70
第14図	縄文時代の遺構配置図	第50図	溝状遺構 4・5	71
第15図	集石遺構及び出土遺物	第51図	溝状遺構 6及び出土遺物	72
第16図	集石遺構・1号土坑	第52図	中世 土師器①	74
第17図	縄文土器集中区	第53図	中世 土師器②	76
第18図	縄文土器出土状況図	第54図	瓦質土器・陶器	79
第19図	縄文土器	第55図	青磁①	81
第20図	縄文石器集中区	第56図	青磁②	83
第21図	縄文石器出土状況図	第57図	青磁③	84
第22図	縄文石器①	第58図	青磁④	85
第23図	縄文石器②	第59図	青磁⑤	86
第24図	縄文石器③	第60図	白磁①	88
第25図	弥生～古墳時代の土器	第61図	白磁②	89
第26図	調査区東遺構配置図	第62図	青花	90
第27図	土坑①	第63図	土製品・石製品・古銭	92
第28図	土坑②	第64図	近世遺構	93
第29図	土坑③	第65図	溝状遺構 7・8	94
第30図	土坑④及び出土遺物	第66図	溝状遺構 9	95
第31図	土坑⑤	第67図	近世 土師器・陶器	97
第32図	土坑⑥及び土坑内出土遺物	第68図	土製品・石製品・古銭	98
第33図	土坑内出土遺物	第69図	時期不詳遺物 石製品	99
第34図	古代 土師器①	第70図	時期不詳遺物 金属器①	100
第35図	古代 土師器②	第71図	時期不詳遺物 金属器②	101
第36図	古代 土師器③	第72図	遺跡周辺残存範囲図	104

表 目 次

第1表	南九州西回り自動車道鹿児島道路(伊集院C～市末IC)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表	4	第11表	古代遺物観察表①	65
第2表	周辺遺跡一覧表	12	第12表	古代遺物観察表②	66
第3表	縄文土器観察表	28	第13表	土師器観察表	77
第4表	縄文石器観察表	34	第14表	瓦質土器観察表	78
第5表	弥生～古墳時代遺物観察表	36	第15表	陶器観察表	78
第6表	古代遺構計測表	47	第16表	青磁観察表①	86
第7表	遺構内出土遺物観察表	47	第17表	青磁観察表②	87
第8表	黒色土器観察表	52	第18表	白磁・青花観察表	91
第9表	赤色土器観察表	54	第19表	土製品・石製品・古銭観察表	92
第10表	須恵質土師器観察表	55	第20表	近世遺物観察表	98
			第21表	時期不詳遺物観察表	101

図 版 目 次

図版1	調査前風景・調査区の土層	105	図版11	縄文石器②	115
図版2	2号集石・3号集石・4号集石	106	図版12	古代の出土遺物①	116
図版3	軽石集積・石皿・作業風景	107	図版13	古代の出土遺物②	117
図版4	1号土坑・1号土坑ビット断ち切り 1号土坑底面・1号土坑底面ビット断面	108	図版14	古代の出土遺物③	118
図版5	焼土域・焼土域断面・23号土坑・16号土坑	109	図版15	古代の出土遺物④	119
図版6	土坑完掘・遺物出土状況	110	図版16	中世の出土遺物①	120
図版7	溝状遺構1 検出状況・溝状遺構1完掘状況	111	図版17	中世の出土遺物②	121
図版8	溝状遺構2 検出状況・溝状遺構2断面	112	図版18	中世の出土遺物③	122
図版9	縄文・弥生・古墳時代の出土遺物	113	図版19	近世の出土遺物	123
図版10	縄文石器①	114	図版20	時期不詳遺物・古銭	124

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月から国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度から文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財分布調査を実施したところ、当事業区内には、27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

第2節 遺跡の概要

- 1 一ノ谷……伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90～95mの丘陵端部に位置し、調査面積は1,250㎡である。中世から近世の古道・五輪塔及び染付や近世から近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットや青磁・染付・土師器・薩摩焼などが発見された。
- 2 永迫平……伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150mの小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の2か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には9軒の住居跡をはじめ、3基の連穴土坑と9基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫A……伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110mのやせ根根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代から中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……伊集院町下谷口の標高約90～100mの山間の谷間、傾斜地及び周辺やや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は8,000㎡である。縄文時代の集石4基や石匙・石鏃、古代の土坑・焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。
（本報告書）
- 5 上山路山……伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と、谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,000㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早期・後

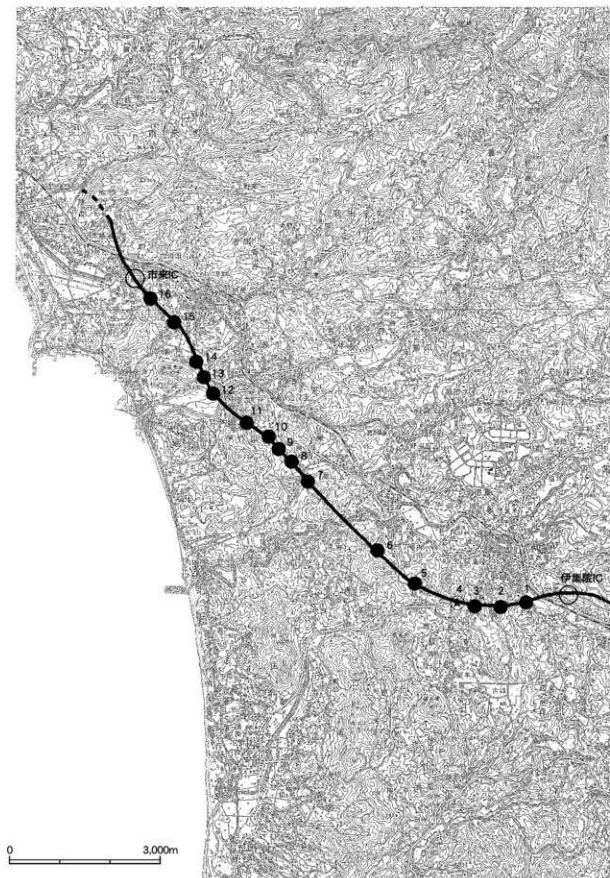
- 期)、弥生から古墳時代の遺物が発見された。主になるのは縄文時代早期で、遺構は道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。
- 6 大田城跡…伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。
 - 7 堂平窯跡…東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼窯跡である。調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・摺鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
 - 8 池之頭…東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式・黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。
 - 9 雪山…東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体となるのは近世から近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・物原？・土坑等や薩摩焼（茶家・土瓶・搦鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）、窯道具が発見された。
 - 10 猿引…東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石、細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
 - 11 犬ヶ原…東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は、2,000㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（鞆羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。
 - 12 向椿城跡…東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ形石器、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世から近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡など中世山城関連の遺構が発見された。
 - 13 堂園平…東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約50mの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭

器・ナイフ形石器・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石4基・吉田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

- 14 今里……東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積14,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原……市来町大里字上ノ原前から東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50mの台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第1地点から第5地点までであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化、縄文時代（早期から晩期）、弥生時代の住居跡・壺棺、古墳時代の住居跡、古代から中世、近世の街道跡など多時期に渡り、多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原……市来町大里字上ノ原の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し、三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で、縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式、轟式土器と石斧・石鎌・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴式住居跡1基と土坑、成川式土器が、古代から中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

※ 刊行報告書

「一ノ谷遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書80	2001.3
「池之頭遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書82	2002.3
「今里遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書83	2002.9
「市ノ原遺跡（第1地点）」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書89	2003.3
「犬ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書90	2003.3
「上ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書92	2003.3
「下永迫A遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書97	2004.3
「永迫平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書98	2005.3
「柳原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書94 （本報告書）	2005.3
「大田城跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書95	2005.3



第2図 南九州西回り自動車道調査遺跡位置図

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査の経緯

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月から国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度から文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財分布調査を実施したところ、当事業区内には、27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化財課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

柳原遺跡については、平成9年11月に確認調査を行った。この調査結果を受けて、平成10年7月7日から平成10年10月31日まで同遺跡の本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図った。調査対象面積は8,000㎡である。なお、整理作業及び報告書作成は15・16年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

第2節 調査の組織

発掘調査（平成10年度）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 吉永 和人
	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
	〃	主任文化財兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	調査課長補佐	新東 晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一
調査担当者	〃	文化財主事	繁昌 正幸
	〃	文化財研究員	中原 一成
	〃	文化財調査員	川口 雅之
	〃	文化財調査員	大窪 祥晃
調査事務担当者	〃	主 査	政倉 孝弘
	〃	主 事	溜池 佳子

報告書作成（平成16年度）

作成主体者	鹿児島県教育委員会				
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	木原 俊孝	
作成企画者	〃	次	長	賞雅 彰	
	〃			主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
	〃			調査課長補佐	立神 次郎
主任文化財	〃			主事兼第三調査係長	牛ノ瀬 修
作成担当者	〃			文化財主事	最上 優子
作成事務担当者	〃			総務係長	平野 浩二
	〃			主事	脇田 清幸
報告書作成検討委員会	平成16年12月27日	所長ほか	10名		
報告書作成指導委員会	平成16年12月20日	調査課長ほか	4名		
企画担当者		東 和幸・石丸 良輔			

第3節 調査の経過（日誌抄）

1 平成10年度の発掘調査

調査の経過を日誌抄により略述する。

7月7日～7月10日

用具搬入。周辺整備（草・竹刈り）、通用路整備。プレハブ・テント設置。ベルトコンベア・発電機設置。ユンボによる整地・廃土処置。グリッド杭打ち。レベル移動。I・II層掘り下げ。I層遺物一括取り上げ。

7月13日～7月23日

グリッド杭打ち、レベル移動。F～H-2～5区I層掘り下げ、I層遺物グリッド一括取り上げ、遺物平板実測、遺物取り上げ。遺物出土状況写真撮影。礫集中箇所検出。土層確認トレンチ設定、掘り下げ。雨対策。K～M-4～7区表土下掃除、掘り下げ開始。遺物平板実測、取り上げ。焼土検出、清掃、写真撮影。北部・北西部・東部地形平板実測。G～J-5～7区I・II層掘り下げ、遺物平板実測、取り上げ。

8月3日～8月11日

J～L-4～7区の遺構写真撮影。遺物平板実測、遺物取り上げ。トレンチ掘り下げ。G・H-3・4区遺構配置図平板実測。F-3区軽石集積検出、写真撮影、実測。K・L-4～7区焼土遺構検出、写真撮影、半裁、実測、遺構内遺物取り上げ、掘り下げ、清掃、完掘状況写真撮影。E～H-3～5区のI・II層掘り下げ、遺構検出。G・H-2・3区で浅い溝状遺構検出、写真撮影、実測。西側斜面平板実測。シラス面検出。E-3区軽石集積検出、写真撮影、実測。長崎純心大学芸員1名実習（8月4日～11日）

8月17日～8月27日

B～D-4～7区の重機による表土剥ぎ。トレンチ掘り下げ。E～H-3～5区のI・II層掘り下げ。遺構検出、遺構実測。シラス面検出、清掃写真撮影。土層断面北壁写真撮影、実測。通

路確保のため重機による掘り下げ。

9月1日～9月11日

B～D-4～7区の重機による表土剥ぎ。ベルトコンベアー設置。ベルト設定後、グリッド杭打ち。通路整備。調査区平板実測。I・II層掘り下げ。柱穴・土坑検出、写真撮影、実測。I層下面で古道跡検出、写真撮影、実測。

9月14日～9月30日

B～D-4～7区のIII層掘り下げ。ベルト土層断面実測、ベルト崩し。遺物出土状況写真撮影、平板実測、遺物取り上げ。III層上面遺構検出、遺構実測。H～J-6～8区II層掘り下げ、III層上面検出。H-6区東西方向に浅い溝状遺構検出、実測。I-5・6区東西方向に同様の浅い溝状遺構を検出。遺物出土状況写真撮影、平板実測、遺物取り上げ。西側土層断面実測、ベルト崩し。コンタ図作成。

10月1日～10月9日

B～D-4～7区のIII・IV層掘り下げ。遺構検出、掘り下げ、実測。IV層上面で集石検出、写真撮影、実測。G～L-8～12区重機による表土剥ぎ後、I・II層掘り下げ。グリッド杭打ち。調査区域図作成。畑畝跡検出。

鹿児島大学 本田道解先生・渡辺先生現地指導（10月6日）

10月12日～10月23日

B～D-4～7区のIII・IV層掘り下げ。遺物平板実測、遺物取り上げ。トレンチ断面実測。集石遺構・陥とし穴遺構検出、写真撮影、実測。G～L-8～12区のII・III層掘り下げ。グリッド杭打ち。安全対策。溝状遺構検出、掘り下げ、実測。コンタ図作成。

10月27日～10月31日

図面等整理。使用用具等撤出。プレハブ周辺等清掃。発掘調査終了。

2 報告書作成

整理作業及び報告書作成は平成16年4月から平成17年3月にかけて県立埋蔵文化財センターにて行った。大まかな整理作業及び報告書作成業務の経過は下記のとおりである。

- 4月 図面整理。遺物水洗。注記。
- 5月 遺物接合、遺物選別、遺物実測。石器実測委託。
- 6月 遺物接合、遺物選別、遺物実測。
- 7月 遺物実測
- 8月 遺物実測
- 9月 遺物復元。遺物実測、トレース。
- 10月 遺物復元。遺物実測、拓本、トレース、仮レイアウト。地形図、遺構トレース。
- 11月 遺物トレース、仮レイアウト、文章作成。観察表作成。遺物写真撮影。
- 12月 レイアウト、文章作成。観察表作成。起案。入札。文章校正。
- 1月 遺物・図面整理及び収納。
- 2月 遺物・図面整理及び収納。

第三章 遺跡の位置及び環境

第1節 地理的環境

柳原遺跡は、鹿児島県日置郡伊集院町下谷口字柳原に所在する。

伊集院町は、薩摩半島の中で幅が最も狭く標高の低い地峡部を占め、北は郡山町・東市来町、東は鹿児島市、南は松元町・日吉町、西は日吉町・東市来町に接し、海に面していない内陸の町である。日置郡のほぼ中央に位置することから当郡の中心地として発達してきた。東西約21.5km、南北28km、面積55.91km²で、人口23,961人（平成12年10月1日 国勢調査人口）の規模である。大正11年（1922年）4月、中伊集院村が村勢の発展に伴って町制を施行し、伊集院町として発足した。その後、昭和31年（1956年）9月、下伊集院村の一部と合併して現在にいたっている。

本町の北部には町内の最高峰である重平山（標高523.1m）があり、東市来町及び郡山町との境をなしている。また、南西部には矢筈岳（302.9m）や諸正岳（301.4m）がある。これらを除くと、大部分は海拔150m前後の火山灰台地である。これは、本県を広く覆う始良カルデラを形成した入戸火砕流に由来するシラス台地である。平地は、この火山灰台地が神之川とその支流である永松川・下谷口川・野田川等によって形成された狭い谷底平野にあるのみで、小規模な盆地状の地形となっている。河川の流域には集落が点在しており、平地部の東側は本町の行政・商業の中心となっている。

柳原遺跡は、市街地の南西約1kmの下谷口にあり、標高約90～100mの山間の谷間で、傾斜地周辺のやや小高いテラス状の尾根を含む地域にある。調査開始時は、市街地の近くでありながら木や竹がうっそうと茂る昼でもなお暗い場所であった。

第2節 歴史的環境

伊集院町の考古学的調査の歴史は比較的新しく、近年の大型の公共事業に伴う発掘調査が行われる以前は、下谷口の川畑で縄文土器が、また、寺脇の桶牟礼神社などで弥生土器が採集されるといような状況であった。しかし、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）や、九州新幹線鹿児島ルート（新八代～西鹿児島間）などの建設に伴う調査が行われたことから多数の遺跡が確認され、調査の結果、旧石器時代をはじめとする各時代の遺構・遺物の発見が相次いだ。主要な遺跡を時代順に若干紹介したい。

旧石器時代

伊集院町で最も古い時期の遺跡としては、ナイフ形石器や三稜尖頭器などナイフ形石器文化期の遺物が出土した下谷口の永迫平遺跡や大田の大田城跡、竹之山の瀬戸頭A～C遺跡等がある。旧石器時代の終わり頃の細石器文化期には、隣接する松元町の仁田尾に遺物の分布が広範囲に見られる九州でも最大級の遺跡が存在するが、本町でも瀬戸頭A・B遺跡や竹之山B遺跡・松ヶ迫遺跡などの遺跡で同時期の石器が出土しているほか、竹之山B遺跡では落とし穴も発見されている。

縄文時代

恋之原の稲荷原遺跡は標高約160mの台地の縁辺部に位置している。遺物は早期の土器が主体と

なっており、石鏃・磨製石斧・磨石・石皿などの石器も出土している。また、早期初頭の最古段階のものとして、岩本式土器に赤色顔料が塗彩された土器が3点出土しており、全国的にも注目される。下谷口の下永迫平遺跡では、国分市上野原遺跡とほぼ同時期と考えられる早期前半の遺構・遺物が発見されている。遺構としては、竪穴住居跡9基・集石遺構(炉跡)12基・連穴土坑3基・方形土坑95基・土坑392基・道跡3条などが検出されており、遺物としては、前平式土器のほかに塞ノ神式土器、石鏃・打製石斧・磨石・蔽石・石皿などが出土している。大田の上山路山遺跡で主体をなしているのは、早期前葉の赤彩土器片5点を含む岩本式土器や前平式土器・吉田式土器などであり、集石遺構3基や道跡が確認されている。

弥生～古墳時代

一般に弥生時代の「むら」は稲作に適した沖積地を望む台地上に営まれることが多く、丘陵上にあるのは小規模な集落である。南九州はシラス台地が多く、稲作に適さない地域が多かったことから生産性が低かったと考えられ、弥生文化は縄文文化ほどには発達していない。

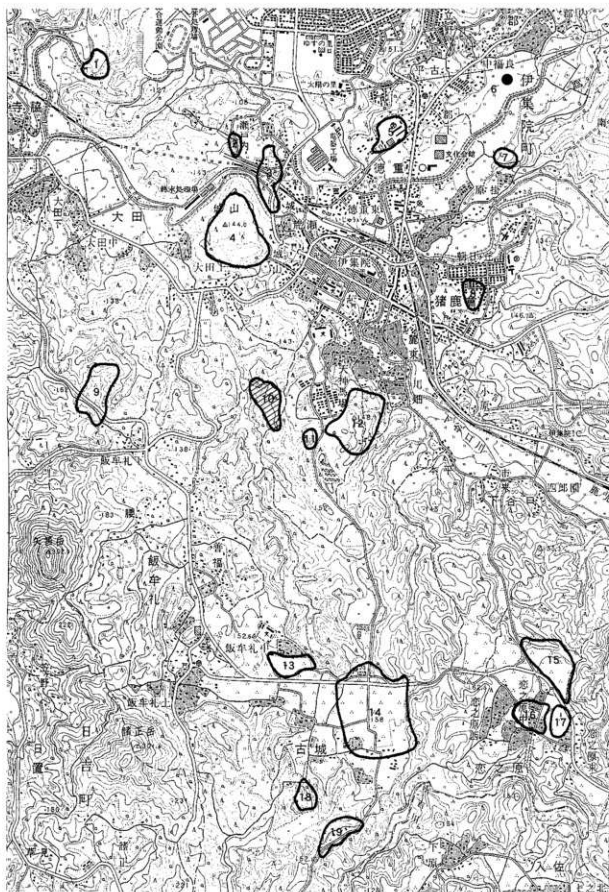
伊集院町周辺ではこの時代の遺跡が少ないが、その中には東市来町の市ノ原遺跡がある。この遺跡からは前期末から中期中葉頃にかけての竪穴住居跡5基、貝殻が廃棄された土坑1基などが検出されている。住居跡内出土の土器の中には須玖式の壺形や甕形土器、黒髪式の甕形土器など西北九州に分布の中心をもつ土器の流入が見られる。そのほかに石皿、磨石、磨製・打製石鏃、軽石製品が出土している。

古墳時代の遺跡として郡に所在する石坂遺跡が挙げられる。この遺跡からは竪穴住居跡の中央部からほぼ完形に近い成川式土器が出土している。上神殿の六反田遺跡では、土師器の甕・壺・高杯などが出土している。また、7世紀頃の竪穴住居跡が1基検出されており、古墳時代の住生活がかがえ知る貴重な発見である。

古代～中世

古代の遺跡では、郡に所在する西原遺跡から、「原」と墨書された土師器碗や「吉」と書かれた内赤土師器の碗などが出土している。石坂遺跡では、9世紀代のものとされる越州窯青磁が出土し、古代の井戸が検出された。また、郡の山ノ脇遺跡では、土師器の碗や黒色土器、須恵器などが多数出土している。下谷口の下永迫A遺跡は、柳原遺跡と隣接した傾斜地に位置する。遺構として、古代の土坑と集石が各1基ずつ検出され、土師器や須恵器、砥石などが出土した。墨書土器は25点あり、判読できた文字としては「十」が4点、「万」が3点、「在」が1点あった。この遺跡からは、本遺跡と同様、黒色土器や赤色土器が多く出土したことが特徴となっている。

中世には、本町は交通の要衝として重要性を増したものと考えられ、「院」や官倉が置かれたり、島津氏の治めるところとなった。山城が多く築かれ、中でも島津貴久が守護職となる前に居城としていた伊集院城(一字治城)跡は有名である。標高約70mのシラス台地の尾根の先端部に位置し、周囲が約2.3km、面積約30万㎡の広大な山城で、貴久がザビエルと会った城として有名である。この山城は大きく4つの郭群からなり、郭間には数多くの空堀が掘られていた。また隅には土塁が構築され、井戸が掘られる例も多数発見されている。周辺には、他にも内城・大内城・神殿城などの山城がある。



第3図 周辺遺跡位置図

第2表 周辺遺跡一覧表

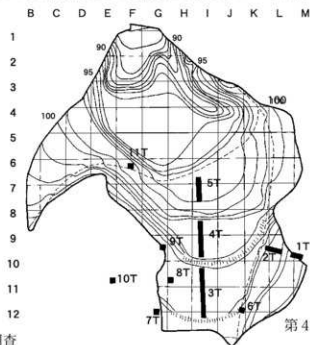
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	寺脇	伊集院町寺脇橋牟礼	台地(河岸段丘)	縄文・弥生	貝殻条痕文・弥生土器	
2	大内山城跡	伊集院町小城	山地	中世	中世城館跡	別称「小城」
3	小城跡	伊集院町徳重字小城	台地	中世	中世城館跡	
4	一字治城跡	伊集院町大田	丘陵	鎌倉初期	中世城館跡(溝・青磁・白磁・土師器等)	伊集院郡司紀四郎時清がここに館を構えたのが始まり別称「伊集院城」
5	郡	伊集院町郡	沖積地	縄文・古墳	石器・壺形土器・坏	
6	後宮田	伊集院町麦生田字後宮田	台地	奈良～平安	土師器片	昭和63年度分布調査
7	黒木田	伊集院町郡字黒木田	台地	奈良～平安	土師器片	平成元年度発掘調査
8	猪鹿倉	伊集院町猪鹿倉	平地	縄文	磨製石斧	昭和58年5月発掘調査
9	上山路山	伊集院町大田 上山路山	台地	縄文早期	土器片	平成9年度発掘調査
10	柳原	伊集院町下谷口柳原	傾斜地	古代～近代	土坑・溝・土師器・須恵器	平成10年度発掘調査 本報告
11	下永迫A	伊集院町下谷口下永迫	谷地	古代～中世	土師器	平成10年度発掘調査 平成15年度報告書刊行
12	永迫平	伊集院町下谷口永迫平	台地	縄文早期	住居跡・土器片・石器	平成8～10年度発掘調査 平成16年度報告書刊行予定
13	中島塚	伊集院町飯牟礼 中島塚	台地	縄文早期 中世	土器片・土師器	
14	七反畠	伊集院町古城 七反畠	台地	古墳		平成10年度農政分布調査
15	上稲荷原	伊集院町恋之原上稲荷原	台地	古墳・古代		平成7年度農政分布調査
16	稲荷原	伊集院町恋之原稲荷原	台地	縄文早期	土器片・石器	平成8年度発掘調査
17	恋之原	伊集院町恋之原	台地	縄文後期	壺形土器	
18	内城跡	伊集院町古城	山地	弘安年間	中世城館跡	別称「平城」
19	堂ノ迫	伊集院町古城 堂ノ迫		中世		平成10年度農政分布調査

第IV章 発掘調査の成果

第1節 発掘調査の方法

平成9年度 確認調査

平成3年6月に実施した分布調査の結果を受けて、11月6日・11日・12日の3日間、確認調査を行った。調査した総面積は116㎡である。地形は北へ開口する谷状を呈しているため、この谷と平行するように19m×2mの長いトレンチ（3T）と13m×2mのトレンチ（4T）、9m×2mのトレンチ（5T）を設定し、これに直交する7m×2mのトレンチ（2T・1T）を2か所設けた。さらに枝状に分かれる谷にも1m×1mのトレンチを6か所（6～11T）設定した。遺跡は傾斜地を造成した棚田状の耕作地にあるため、一部分に遺物包含層が欠失した箇所もみられたが、表土の堆積が厚いため全体的に残存状況は良好であった。調査によって土師器や荒平窯系の須恵器、龍泉窯系の青磁など古代から中世にかけての遺物が多量に出土したため、約8500㎡を対象として本調査を実施することとなった。確認調査では遺物出土状況やトレンチ断面の写真撮影や実測等を行い、終了した。



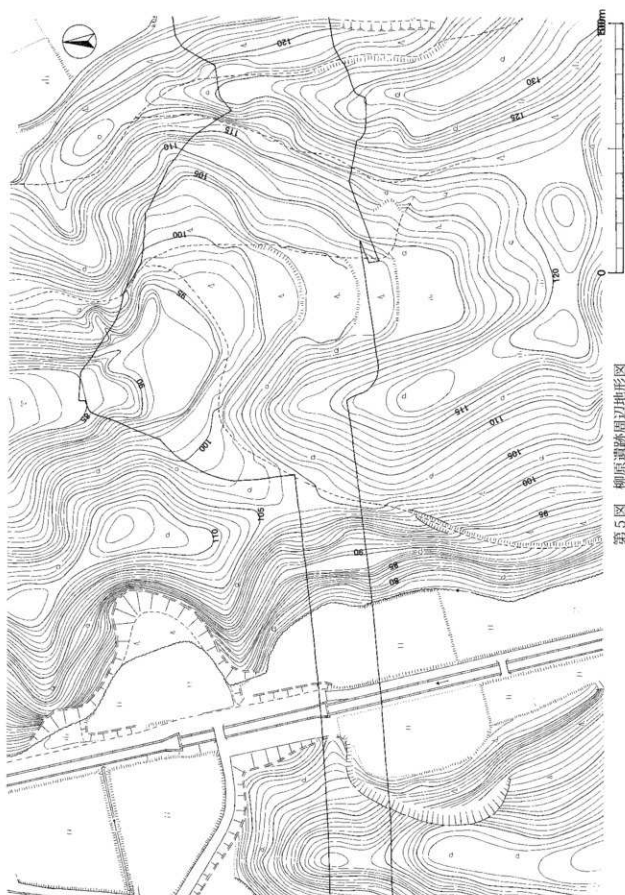
第4図 確認調査トレンチ配置図

平成10年度 本調査

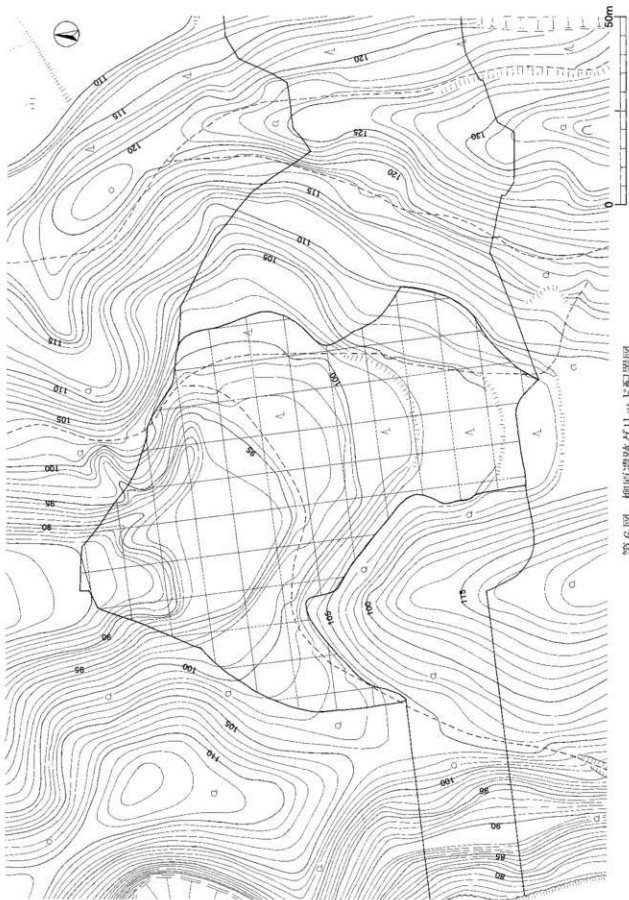
平成9年度に実施した確認調査を受け、7月から10月にかけて本調査を行った。

調査にあたり道路建設用センター杭のうち、No. 490とNo. 495とを結ぶラインを基準とし、西から東へA・B・C・・・列、北から南へ1・2・3・・・列として10m×10mのグリッドを設定した。

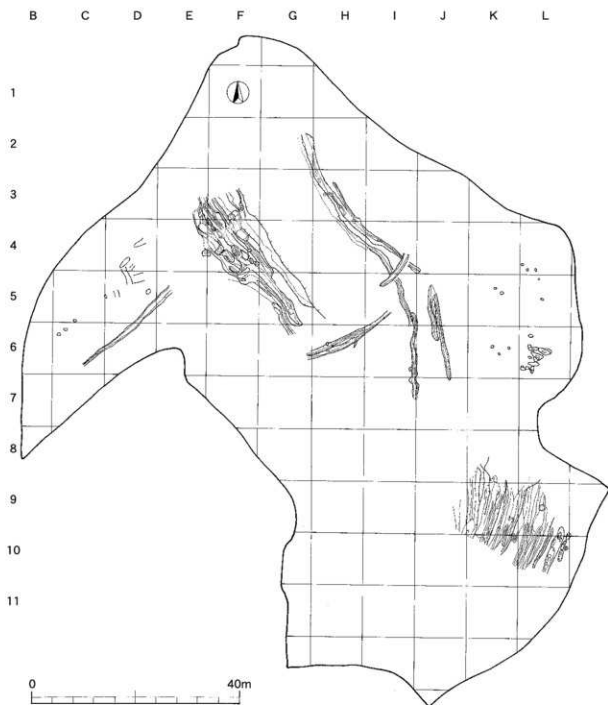
谷部が南北に走り、傾斜地を多く含むため調査区域を東部・西部・南部・北部・中央部に分けて調査を行った。まず、東部・北部を調査した後、西部・中央部・南部の順に調査を進めた。重機により表土を剥いで遺物包含層を検出した後、山鉾、ジョレンなどにより人力で掘り下げを行った。ただ、遺構が検出されたり、遺物が集中して出土した区域は、移植ゴテ等で慎重に調査を進めた。検出した遺構は平面及び見通し断面の実測及び写真撮影等の記録保存に努めた。出土した遺物については平板により実測を行うとともにレベルを測定し、遺物台帳に記入した後、取り上げを行った。



第5图 柳原遺跡周辺地形図



第6図 柳原遺跡グリッド配置図



第7図 遺構配置図

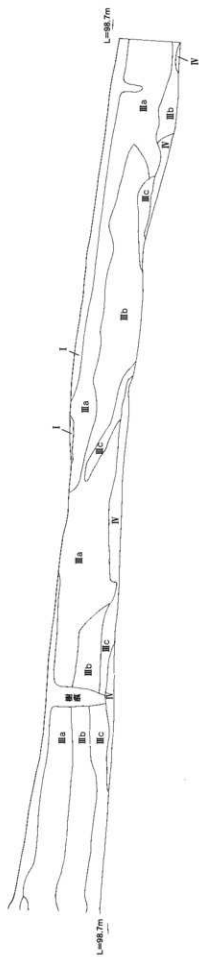
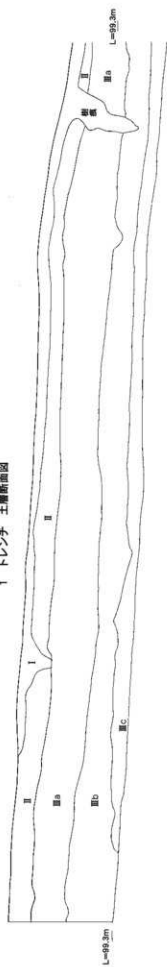
第2節 遺跡の層序

柳原遺跡の層序は概ね以下の通りである。調査対象区域内は斜面が多く、遺物包含層が流れ込みなどにより攪乱している部分が多くみられた。

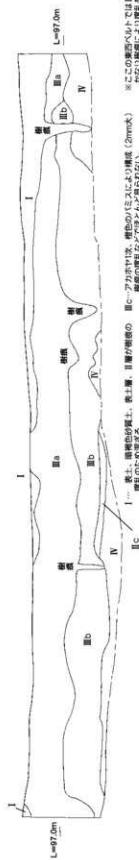
V	I a	I a	褐色砂質土	
	I b	I b	暗褐色砂質土	古代・中世の遺物包含層
	I c	I c	黒褐色砂質土	古代・中世の遺物包含層
	I d	I d	軽石混土層	
	II	II	黒色砂質土	古代の遺物包含層
	III a	III a	アカホヤ二次（腐植土）	縄文時代後期頃の遺物包含層
	III b	III b	アカホヤ火山灰	鬼界カルデラの噴出源（約6,400年前）
	IV	IV	淡黄橙色粘質土	縄文時代早期の遺物包含層
	V	V	黄褐色粘質土	縄文時代早期の遺物包含層
	VI	VI	茶褐色粘質土	
	VII	VII	暗褐色粘質土	
	VIII	VIII	暗褐色強粘質土	
	IX	IX	シラス二次	

第8図 基本土層図

1 トレンチ 土層断面図



2 トレンチ 土層断面図



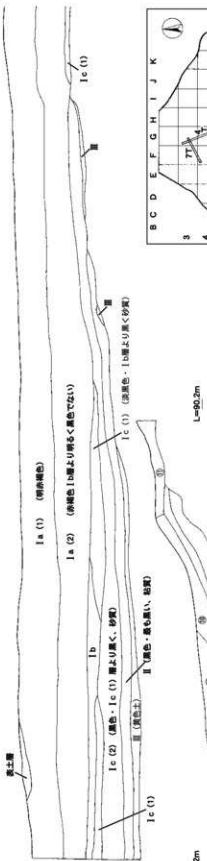
I ... 表土、暗褐色の腐土、黄土層、目撃が腐敗の腐土のたけさる
 IIa - アカネヤク、にぶい腐色を帯びる。し
 まりはよくない、腐色の腐土が厚い。
 IIb - アカネヤク、腐色を帯びる。しまりは
 良くない、腐土(腐敗の字元部)に深く
 埋れる。
 III - 腐色は暗褐色、上部にアカネヤク
 が入る。非常にしぼんでおり、
 腐色の腐土とほとんど混ざり合っている。し
 まりはよくない、腐色の腐土が厚い。
 IIIc - アカネヤク、暗褐色の腐土(20cm水)

第9図 土層断面図(1)

3 トレンチ 土層断面図

L=90.2m

L=90.2m



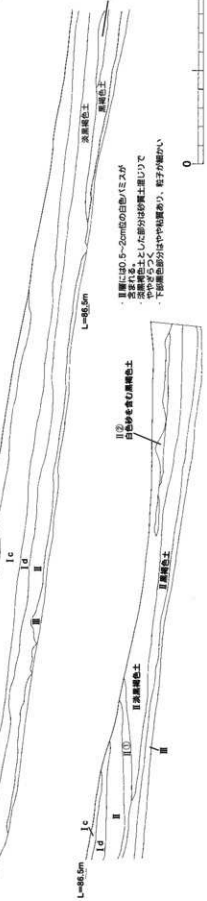
- ①赤褐色土 粘質黄土から粘土、やや硬土をまじる
- ②赤褐色土 ①と類似し黄色土がまじる
- ③黄褐色土 粘質シルス
- ④赤褐色土 Ic(1)より暗い、Ib(2)とも異なる
- ⑤赤褐色土 Ic(2)より暗い、やや暗い
- ⑥赤褐色土 ⑤より暗く、やや少暗くなる(入)まじり
- ⑦赤褐色土 ⑤よりIbに近づくが多少暗くなる
- ⑧赤褐色土 ⑤よりIbに近づく
- ⑨赤褐色土 ⑤よりIbに比べて明るく黄色に近しい
- ⑩赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑪赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑫赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑬赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑭赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑮赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑯赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑰赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑱赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑲赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ⑳赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉑赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉒赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉓赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉔赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉕赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉖赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉗赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉘赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉙赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉚赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉛赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉜赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉝赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉞赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㉟赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊱赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊲赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊳赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊴赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊵赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊶赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊷赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊸赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊹赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる
- ㊺赤褐色土 黄白色に近く、やや白くまじる

L=90.2m

4 トレンチ 土層断面図

L=87.3m

L=87.3m

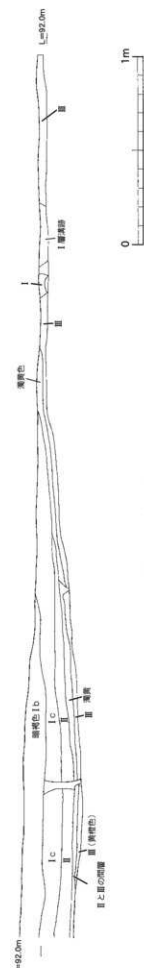
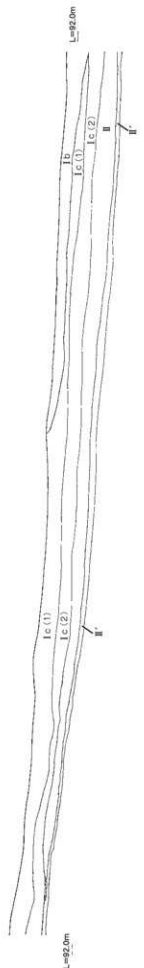
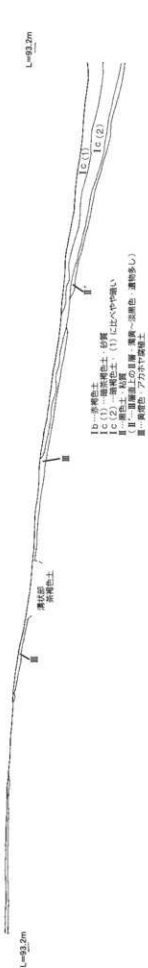


- 層には0.5-2cm位の白色バミスが
- ・浸透黄褐色土とした部分は砂質土混じりで
- ・ややざらつく
- ・下部黄色部分はやや粘質あり、軽子が細かい

0 1m

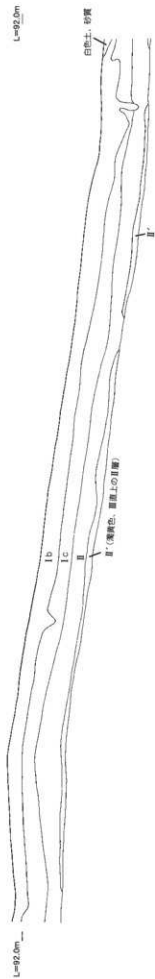
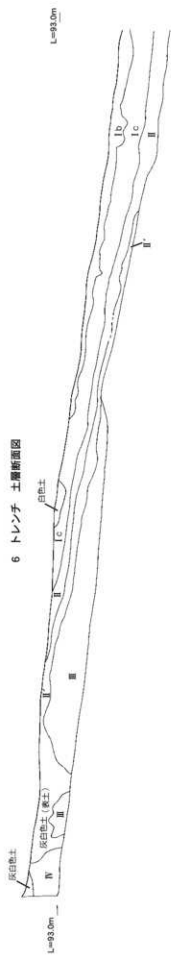
第10図 土層断面図(2)

5 トレンチ 土層断面図

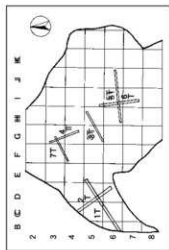


第11図 土層断面図(3)

6 トレンチ 土層断面図

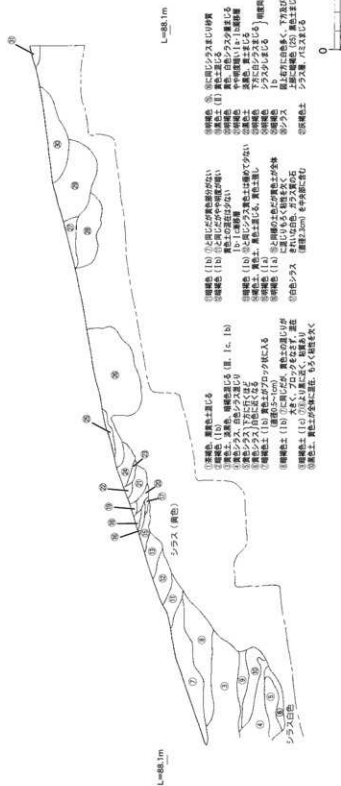
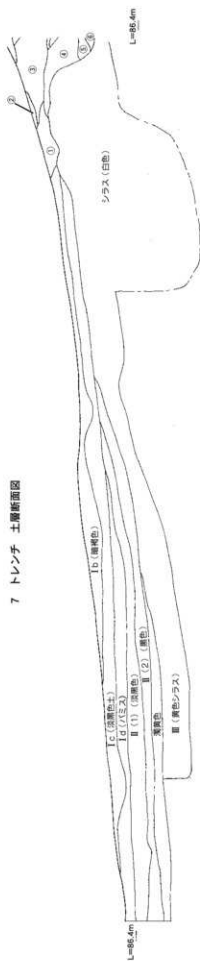


I b : 暗赤褐色、明度低く、I b の層砂層
 I c : 淡黄色へ暗褐色、やや砂質
 II : 暗赤褐色、明度低く、層砂層
 III : 暗赤褐色、明度低く、層砂層へ淡褐色
 IV : 暗赤褐色土
 灰白色土 : 黄土と含まれる、砂質、一部層砂層になる
 白色土 : 黄土と含まれる、砂質だが、一部粘土を含む



第12図 土層断面図(4)

7 トレンチ 土層断面図



- ①赤褐色、黄褐色土層
- ②赤褐色 (1b) 赤褐色土層
- ③黄褐色シラス、白色シラス
- ④黄褐色シラス、下方に灰土
- ⑤黄褐色土 (1b) 赤褐色土層
- ⑥赤褐色土 (1b) 赤褐色土層
- ⑦赤褐色土 (1b) 赤褐色土層
- ⑧赤褐色土 (1b) 赤褐色土層
- ⑨赤褐色土 (1b) 赤褐色土層
- ⑩赤褐色土 (1b) 赤褐色土層
- ⑪赤褐色土 (1b) 赤褐色土層
- ⑫赤褐色土 (1b) 赤褐色土層
- ⑬赤褐色土 (1b) 赤褐色土層
- ⑭赤褐色土 (1b) 赤褐色土層

第13図 土層断面図(5)

第3節 縄文時代の調査

本遺跡では縄文時代の遺構や遺物は調査区西側に集中していた。遺構は北東側に緩やかに傾斜するIV層上面で検出された。ただ、遺物はIV層以外からも出土しており、台地からの流入の可能性が考えられる。

1 遺構

集石4基と土坑1基が検出された。いずれも調査区西側での検出である。これらの集石を位置的なまとまり、形状の違いから1～4号に分けて記述する。なお、いずれも覆土に大差なく、IV層上面で検出されていること等から同一時期の遺構と思われる。

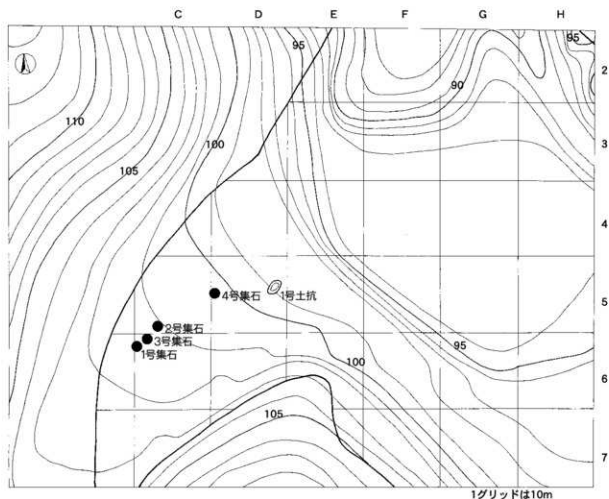
(1) 集石

1号集石

B・C-6区に位置し、IV層上面にくり込む形で検出された。長径60cm×短径50cmのほぼ円形状に散布している。礫のレベル差はあまりなく、深さは大体10cmである。礫の数は少なく、拳大のものが多く。黒曜石片や炭化物も出土している。礫は総数29個で、ほとんどが安山岩だったが、頁岩も含まれている。火熱を受けて赤化している礫が1点確認できた。

2号集石

C-5区に位置し、長径70cm×短径60cmの円形状をなす。礫は密集しておらず、まばらな状態で



第14図 縄文時代の遺構配置図

検出された。礫は小さく、破碎したものが多くを占め、半分は100g未満のものだった。ただ、近接した礫が1点接合した。1号集石同様、ほとんどが安山岩で、他は頁岩、砂岩であった。黒曜石が3点出土しており、そのうちの1点は打製石鏃の先端部で、石材は上牛鼻産である。集石に掘り込みは確認できなかった。

3号集石

C-6区に位置し、1号集石と隣接している。約1m四方の正方形をなし、埋土はIV層に比較的似ている。礫はレンズ状に落ち込んでおり、浅い掘り込みが確認できた。礫の総数は97個で、300g近い花崗岩や頁岩以外は、全て安山岩である。拳大のものから人頭大まで様々な大きさの礫が20cmほどの深さに重なっている。周囲で縄文時代の土器片が1点出土した。

4号集石

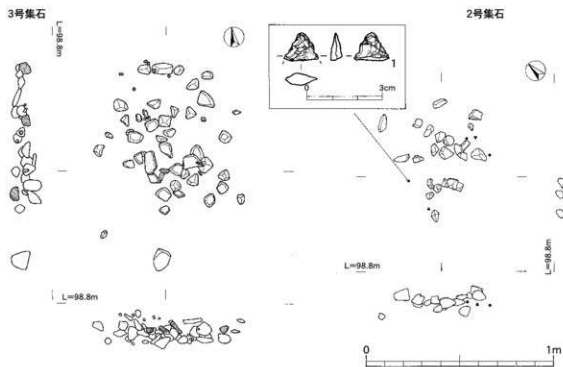
C-5区とD-5区の境に位置し、IV層直上の斜面で検出された。長軸60cm、短軸40cmの不整形である。2号集石同様、掘り込みを持たない。礫の総数は12個で、拳大の角張ったものが多い。1点は黒曜石のフレーク、3点が頁岩、他は安山岩である。

(2) 土坑

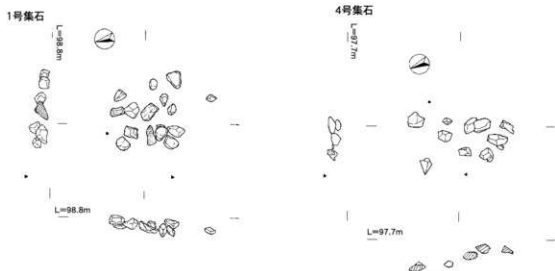
1号土坑

D-5区に位置し、長径150cm、短径80cm、深さ約40cmの南北に長い長楕円形をしている。

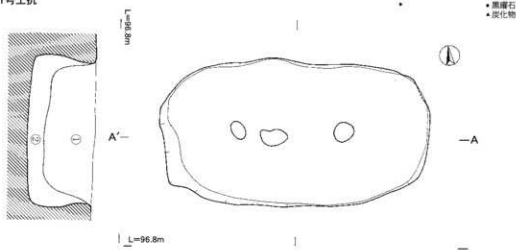
明茶褐色砂質土を切り込む。埋土の上面は、アカホヤの2次堆積でしまりが悪く、遺物は見られなかった。その下は淡黄橙色砂質土で弱い粘性を帯び、アカホヤ火山灰やパミスを所々に含む。土坑底面に杭跡を思わせる10cm×8cm、15cm×8cm、10cm×10cmのビットを3本確認した。樹根跡の可能性もあるため、遺構の性格については不明である。



第15図 集石遺構及び出土遺物



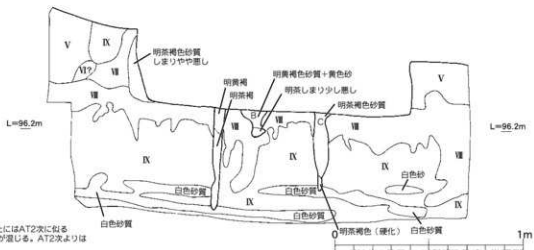
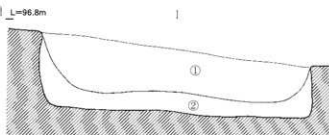
1号土坑



●黒曜石
●炭化物

①アカホヤの2次堆積（埋む層）
しまりが悪い。遺物の混入無し。

②淡黄褐色粘質土。弱い粘性を帯びる。
アカホヤ火山灰のノミスを所々に含む。
しまりは良い。遺物の混入は無し。
IV層の埋土である。



※ 粘層Bの埋土にはAT2次に似る
黄色砂質土が混じる。AT2次よりは
粘質。

第16図 集石遺構・1号土坑

2 遺物

縄文時代の遺物は谷部北側（F・G-3～5区）を中心に出土しているものと、西側（B・C-5・6区）を中心に出土しているものに分けられる。6・7以外は前者である。これらが出土した付近では集石も検出されており、同時期のものと考えられる。ただ、出土遺物の多くは1層から出土するものや表土一括で取り上げられたものであり、攪乱や流れ込みによる可能性が高い。遺物の出土層については観察表に表記する。

(1) 土器

縄文時代早期の土器（2・3）

2は外面に縦方向の条痕の後、横方向に同じ条痕を巡らす。内面は粗いナデである。胎土にはチャート片と短粒の角閃石がみられる。早期中頃の中原式土器の範疇に含まれるものである。3は摩滅しているが、貝殻腹縁による刺突文を施すことから早期後半の塞ノ神B式土器と考えられる。

縄文時代前期の土器（4・5）

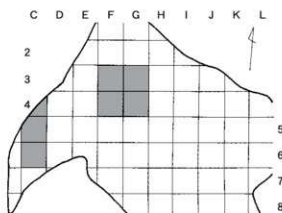
口縁部片2点と図示しなかったが胴部片数点がある。いずれも曾畑式土器と考えられる。4の口縁部は外反し、口唇部外端に粘土の盛り上がりが見られる。内面上端に半裁竹管状の工具を一列に刺突し、その下に横方向の沈線が施される。外面には横方向の短沈線が施される。5は内面を平坦気味にすることによって口唇部が三角形に尖っている。内面には長めの刺突を巡らし、その下に横方向の沈線を施す。外面には横方向の短沈線がみられる。以上の曾畑式土器の胎土には滑石は含まれていない。

縄文時代後期後半～晩期の土器（6・7）

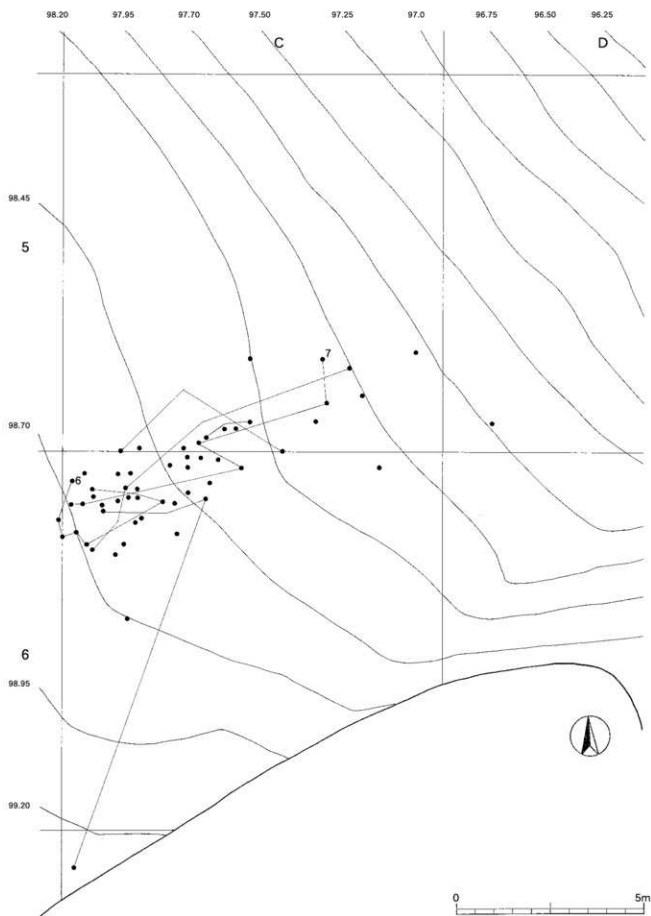
6・7は底部を除く破片がまとまって出土したが、全形を復元することはできなかった。全体的に外傾する器形であり、屈曲した部分はみられない。口縁部も真っすぐにのびるもので口唇部をわずかに面取りする。器面調整は内外面とも横方向のミガキであり、胎土には角閃石が多くみられる。器形以外の特徴は上加世田式土器から入佐式土器の古い段階にみられるものではあるが、器形が異なる。

縄文時代晩期の土器（8・9）

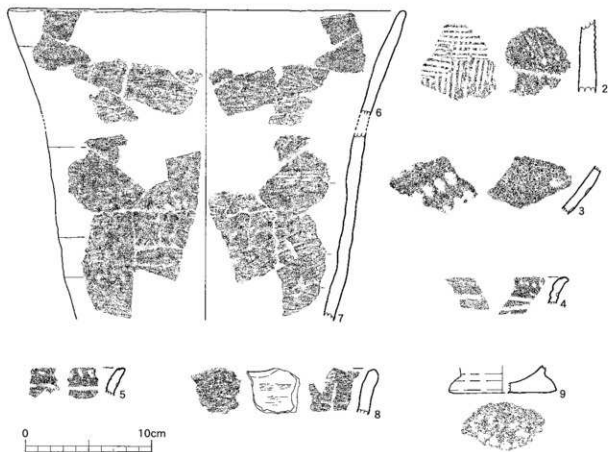
胴部片も数点あるが、特徴のある口縁部(8)と底部(9)を1点ずつ図示した。口縁部には鱗状の突起が付いていたと思われるが、欠損しており、形状は分からない。口唇部を厚めに丸くおさめており、器面調整は内外面とも粗いナデである。底部は大きく張り出すタイプである。底面には何らかの圧痕が認められる。これらの土器は、黒川式土器の中でも新しい段階のものと考えられる。



第17図 縄文土器集中区



第18図 縄文土器出土状況図



第19図 縄文土器

第3表 縄文土器観察表

神宮 番号	遺物 番号	器種	部位	出土区	層	胎土	色調		調整		備考
							外面	内面	外面	内面	
19	2	深鉢形土器	胴部	F 4	I b	チャート片・角閃石	橙	にぶい黄橙	条痕	粗いナデ	
	3	深鉢形土器	頸部	G 3	II	角閃石	にぶい黄	茶褐	—	—	摩耗
	4	深鉢形土器	口縁部	F 3	I 上	軽石	明黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	
	5	深鉢形土器	口縁部	H 6	I a	—	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	
	6	深鉢形土器	口縁部	BC 6	I II III	角閃石	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	
	7	深鉢形土器	胴部	C 5・6	I II III	角閃石	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	
	8	深鉢形土器	口縁部	G 5	I a	角閃石	暗褐	橙	粗いナデ	粗いナデ	口縁部外面煤付着
	9	深鉢形土器	底部	Sレンチ	III	—	橙	橙	粗いナデ	ナデ	底部に圧痕

(2) 石器

本遺跡出土の石器は調査区西側に集中する傾向にある。主にⅢ・Ⅳ層からの出土ではあるが、Ⅰ層出土のものも少なくはない。自然擾乱による遺物の移動が考えられる。出土土器も擾乱や流れ込みによる可能性が高く、出土土器との対比による石器の時期設定は難しい。

石鏃・石鏃未製品 (10~33)

石鏃は、形態的に正三角形に近いもの(10・11)、凹基式(12~26)、長身鏃(27・28)などが見られる。凹基式は、抉りの浅いもの(12~18)と深いもの(19~26)とに分けられる。11は薄い剥片を素材としており、表裏とも平坦面が広く残る。11・29・32は二次加工による整形は行われているが、未製品である。

磨製石鏃(33)

1点のみの出土である。頁岩を素材とし、二等辺三角形を呈す。基部は欠損しており、抉りの有無は明確ではないが、表裏両面とも丁寧な研磨が施される。稜は見られず、時期は不明である。

楔形石器(34)

1点のみの出土である。片側が欠損しているが、上下からの剥離がみられることから楔形石器に分類した。石材は上牛鼻産の黒曜石である。

石槍(35)

35の石材は上牛鼻産黒曜石を使用しており、基部を欠損する。連続性のある剥離調整により整形加工が行われている。先端部が欠損しているが、石鏃の可能性もある。

石匙(36・37)

36はチャート製であり、やや丸味のある身部をもつ。横長剥片を素材とし、打面部は残したまま、剥片末端の左側縁に丁寧な二次加工を施し、刃部を形成する。37は針尾産系の黒曜石を使用したものである。素材剥片の形状を利用して斜状に刃部をつくり、表裏から細かい剥離調整が施される。2点とも縦長の石匙である。

スクレーパー(38~40)

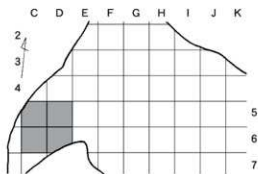
38は安山岩製、39・40は上牛鼻産黒曜石製である。38は直線的は側縁部に二次加工を施す。39は剥片末端に、40は側縁部に二次加工を施し、弯曲した刃部に仕上げている。

使用痕のある剥片石器(41)

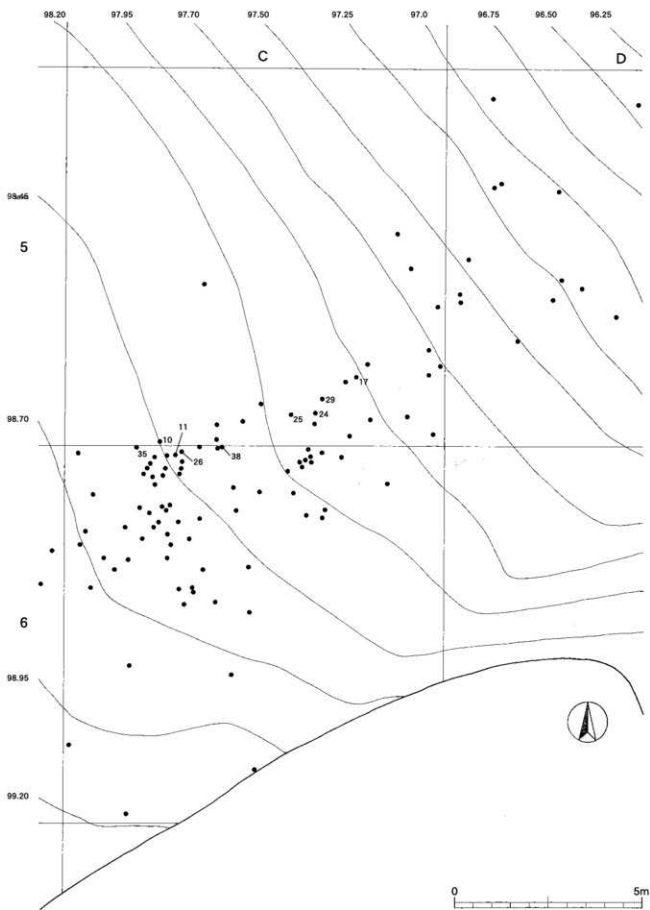
41は上牛鼻産黒曜石剥片で下辺部に剥離調整は施されていないが、刃部として考えられる下辺の末端に使用痕が観察される。

敲石(42)

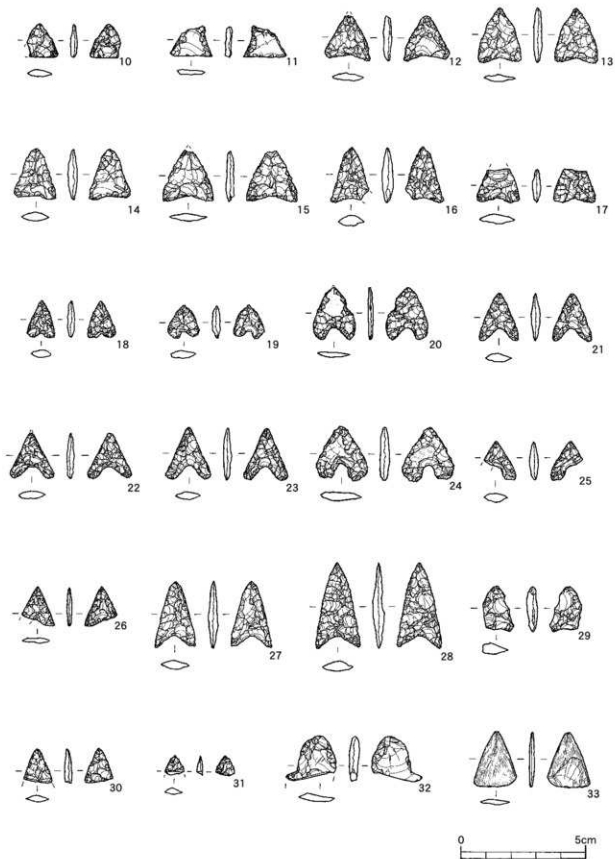
42は下半部を欠損する砂岩製の敲石である。敲打痕はみられないが、棒状敲石に分類した。



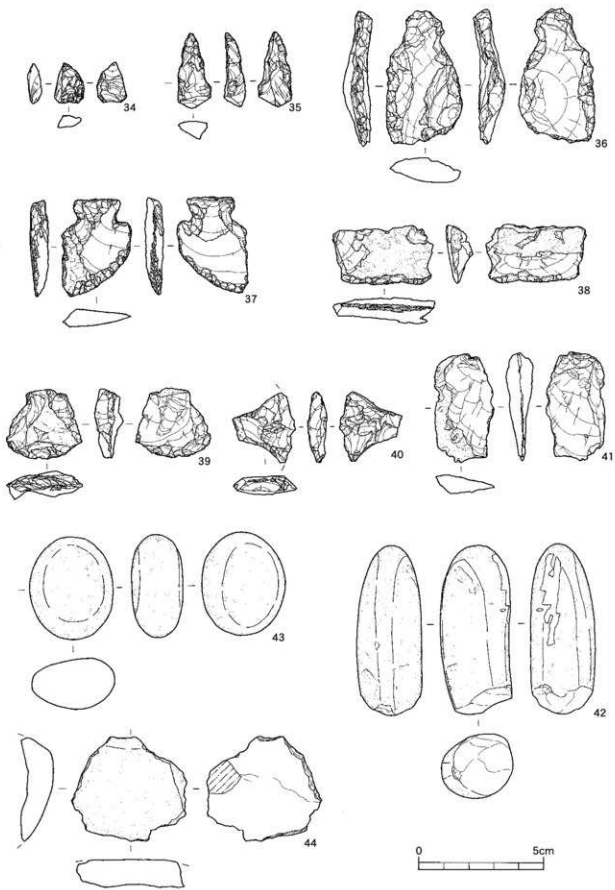
第20図 縄文石器集中区



第21図 縄文石器出土状況図



第22図 縄文石器(1)



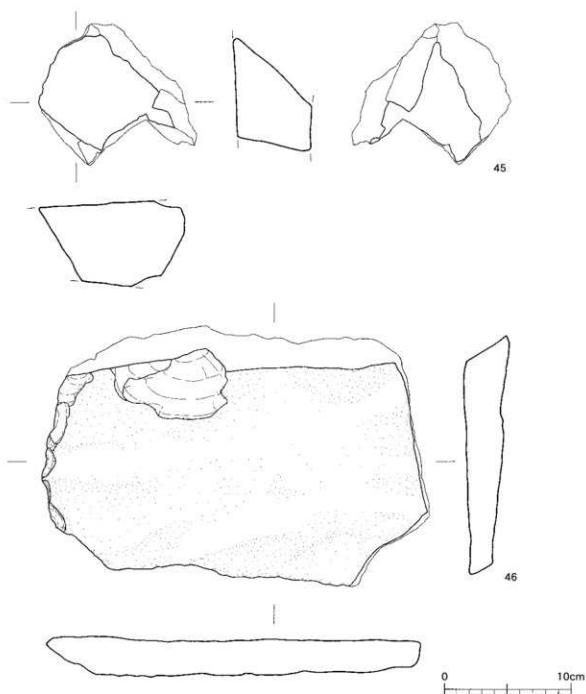
第23図 縄文石器(2)

磨石(43)

43は長径4cm, 短径3.3cm, 平面長円形を呈す砂岩製の小型の磨石である。表裏両面とも磨面があり, 側面にも磨られた痕跡を確認する。

石皿(44~46)

全て安山岩製の石皿片である。561は磨面には若干の敲打痕が観察され, 台石の可能性もある。



第24図 縄文石器(3)

第4表 縄文石器観察表

検出 番号	遺物 番号	器 種	石 材	区	層	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備 考	遺物番号	
22	10	打製石鏃	黒曜石(上牛鼻)	C5	Ⅲb	1.3	1.4	0.3	0.401		508	
	11	打製石鏃未製品	黒曜石(上牛鼻)	C6	Ⅲb	1.3	1.7	0.3	0.585	未製品	519	
	12	打製石鏃	安山岩	H6	Ⅱ	1.8	1.9	0.4	0.845		一括	
	13	打製石鏃	安山岩	D5	Ⅲ	2.2	1.8	0.35	0.986		一括	
	14	打製石鏃	頁岩	I7	Ⅲ	2	1.7	0.4	0.884		一括	
	15	打製石鏃	安山岩	H6	Ⅱ	2.1	2	0.35	1.162		一括	
	16	打製石鏃	黒曜石(針尾)	G3	Ⅱ	2.3	1.6	0.5	1.113	脚部欠損	一括	
	17	打製石鏃	黒曜石(上牛鼻)	C5	Ⅲ	1.4	1.7	0.4	0.735	先端部欠損	604	
	18	打製石鏃	黒曜石(針尾)	4トレンチ	—	1.5	1.1	0.3	0.376		一括	
	19	打製石鏃	黒曜石(腰岳)	—	表層	1.4	1.3	0.3	0.415		一括	
	20	打製石鏃	黒曜石(腰岳)	16	Ⅱ	2.15	1.7	0.3	0.64		一括	
	21	打製石鏃	頁岩	16	I	2	1.6	0.35	0.626		一括	
	22	打製石鏃	黒曜石(上牛鼻)	18	Ic	1.9	1.85	0.35	0.588		一括	
	23	打製石鏃	鉄石英	16	Ic	2	1.7	0.3	0.671		一括	
	24	打製石鏃	安山岩	C5	Ⅲb	2.1	2.1	0.4	1.243		605	
	25	打製石鏃	安山岩	C5	Ⅲ	1.6	1.3	0.4	0.043	脚部欠損	606	
	26	打製石鏃	黒曜石(上牛鼻)	C6	Ⅲb	1.6	1.2	0.2	0.281	脚部欠損	520	
	27	打製石鏃	頁岩	H12	Ⅲa	2.7	1.7	0.4	1.124		854	
	28	打製石鏃	黒曜石(上牛鼻)	J10	—	3.5	1.85	0.5	1.803		一括	
	29	打製石鏃	黒曜石(上牛鼻)	C5	Ⅲ	1.8	1.1	0.4	0.887	未製品	609	
	30	打製石鏃	安山岩	D5	I	1.4	1.1	0.3	0.381	先端部	一括	
	31	打製石鏃	黒曜石(腰岳)	D4	I	0.85	0.8	0.25	0.97	先端部	一括	
	32	打製石鏃	黒曜石(針尾)	D5	Ⅳ	2.2	1.6	0.3	1.157	未製品	600	
	33	磨製石鏃	頁岩	—	表層	2.3	1.8	0.3	0.725		一括	
	23	34	くさび形石器	黒曜石(上牛鼻)	C6	Ⅲa	1.6	1.2	0.55	0.876		580
		35	石槍	黒曜石(上牛鼻)	C6	Ⅲb	3.1	1.4	0.9	2.534		510
		36	石匙	チャート	H5	Ia	5.4	3.1	1	16.655		一括
		37	石匙	黒曜石(上牛鼻)	C6	Ⅲb	4	2.8	0.8	7.567		548
		38	スクレイパー	安山岩	C6	Ⅲa	4	2.3	0.9	8.473		524
		39	スクレイパー	黒曜石(上牛鼻)	D4	Ⅲa	3	2.75	1	6.78		691
		40	スクレイパー	黒曜石(上牛鼻)	C6	V	2.9	2.5	0.7	4.463		720
		41	使用痕のある刮片	黒曜石(上牛鼻)	C5	Ⅲ	4.45	2.5	1	7.661		705
		42	敲石	砂岩	L6	Ⅱ	6.8	2.9	2.4	53.091		223
43		磨石	砂岩	L5	Ⅱ	3.5	4.2	2.2	39.531		348	
44		石皿の欠片	安山岩	I5	Ib	4.2	4.6	1.15	27.123		一括	
24		45	石皿の欠片	安山岩	L5	Ⅱ	12.5	10	6.1	945		200
	46	石皿	安山岩	C6	Ⅲ	30.3	19.3	3	3100		561	

第4節 弥生時代の調査

弥生時代の遺物は数点出土しているが、遺構は検出されなかった。出土区、層はまちまちで、いずれも小破片である。

遺物

数点出土したなかの1点を図示する。47は小破片ではあるが、壺形土器の肩部片と考えられる。4条以上の微隆起突帯を有する。黄褐色を呈し、胎土に角閃石が含まれる。

第5節 古墳時代の調査

本遺跡では、古墳時代の遺構は検出されなかったが、成川式土器と思われる遺物が出土した。出土点数は少なく、小破片が多かった。

遺物

古墳時代の土器の出土分布は谷部北側（GH-4・5区付近）に集中している。I・II層を中心に出土しているが、I層とIII層から出土した遺物が接合したものやIII層からの出土遺物もあり、周辺台地からの流れ込みも考えられる。出土遺物の多くは小破片であり、形状を判別することができなかったが、そのうち11点を図示した。

甕形土器（48～53）

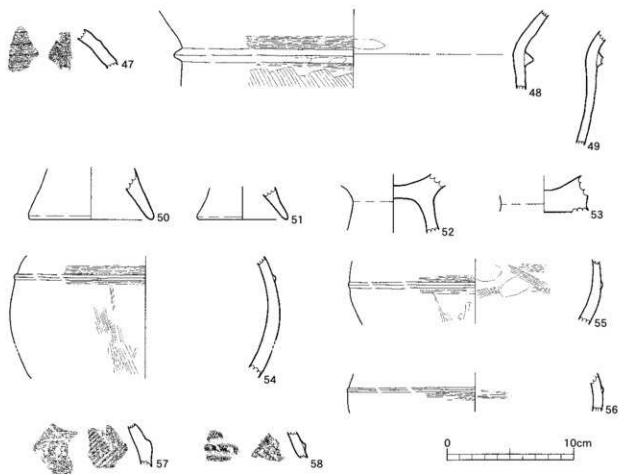
48・49は同一個体の可能性があり、屈曲部径33cmで「く」の字状にくびれた口縁部をもつ甕形土器の破片である。屈曲部に断面三角形の突帯を貼りつけている。突帯下部には左上から右下への斜方向にハケメ調整を施している。外面の色調は茶褐色で、内面は灰黄褐色を呈す。胎土には石英や角閃石粒が多く見られ、焼成良好である。

50～53は甕形土器の脚台部分である。50は甕形土器底部に斜め下付近に貼付く脚台で脚台径9.4cmである。脚台内外面とも丁寧なナデで仕上げられており、明赤褐色を呈す。胎土には細かい軽石や石英粒が見受けられる。51は摩滅がはげしく、調整が不明瞭ではあるが、脚台内面にはヘラナデの痕が見られる。

52は焼成が良好でどっしりとしているが、摩滅・剥落が著しく、調整が観察できない。胎土には角閃石が多く見られる。53は脚台の欠損した底部片である。石英や角閃石の粒子を多量に含み、茶色石粒も見られる。

壺形土器（54～58）

54～56は胴部片で、焼成、胎土、器面の色調、形状から同一個体の壺と思われる。体部に丸みを帯び、幅3mm程の微隆起の突帯を有す。54や55の突帯下部には斜方向のハケメが見られ、内面は丁寧なナデを行っている。胎土には石英粒が見られる。55は内面に整形時の指圧痕を有す。57は太い刻目突帯を有する胴部片である。突帯下部にわずかではあるが、横になてた形跡が見られる。橙色を呈し、胎土には石英粒が見られる。58は突帯を有す胴部片である。突帯には斜方向の浅い刻目片が施してある。摩滅がはげしく、小破片のため形状は不明である。



第25図 弥生～古墳時代の土器

第5表 弥生～古墳時代遺物観察表

陣図 番号	遺物 番号	器種	部位	出土区	層	胎土	色調		調整		備考
							外面	内面	外面	内面	
25	47	壺	肩部	GH4+レンチ	—	角閃石	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	微粒起突帯
	48	甕	頸部	H 5	II	石英・角閃石	茶褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	
	49	甕	頸部	I 5	Ic・III	石英・角閃石	茶褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	
	50	甕	底部	H 4	I	軽石・石英	明赤褐	明赤褐	ナデ	横ナデ	
	51	甕	底部	J 8	Ic	石英	明赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	
	52	甕	底部	G 4	I b	角閃石	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	
	53	甕	底部	F 4	—	石英・角閃石	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	
	54	壺	胴部	H4・5G3	Ic・II・III	石英	明赤褐	明赤褐	ナデ・ハケメ	ナデ	
	55	壺	胴部	H 5	Ic	石英	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ・掘注痕	
	56	壺	胴部	H 6	Ic・II	石英	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	
	57	壺	胴部	H 6	Ic	石英	橙	橙	ナデ	ナデ	
	58	壺	胴部	H 5	—	石英	浅黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	

第6節 古代の調査

1 遺構

調査区西側より土坑1基、東側斜面よりⅢ層上面において土坑16基・焼土跡7か所を検出した。造成による削平で包含層の残存状況はよくない。特にL-6区では土坑がまとまって検出され、周辺の土は褐色であった。これらの遺構には土師器を多く伴うものも見られ、出土遺物の対比から古代のものと考えられる。いずれも覆土に大差なく、何らかの関連をもつ同一時期の遺構と思われる。ただ、これらがまとめて1つの遺構とするには配置や繋がりに何ら関連がみられず疑問が残る。

(1) 土坑

長径約45cmのものから3m弱のものまで計23基検出された。そのうち焼土を伴う土坑がL-5・6区から7基(18~24号土坑)検出された。焼土壁を伴う土坑として活用されたのではなく、崩された焼土塊が土坑に遺棄してあるものと考えられる。それらの断面は分層できなかった。L-6区から検出された焼土を伴う土坑は全て遺物を伴っている。出土遺物のほとんどが土師器であり、黒色土器や石器も見られた。検出面、平面形状、長径、短径、深さ、埋土、出土遺物については計測表にて記し、主なものだけの記述とする。

2号土坑

D-4区、Ⅲ層上面から検出された。楕円形を呈す3号土坑と近接する。土坑東部分は調査区外だったため、その先の形状は不明である。埋土は、黒色土が主であるが、端にしまりの悪い濁黄色土を確認した。遺物は共伴しない。

5号土坑

平面形はほぼ円形を呈し、2か所の落ち込みを伴う。長径58cm×短径56cm、深さ10cm弱である。出土遺物は2点で、図化できたのは1点であった。67は裏の把手部分である。半円状で、橙色を呈す厚さ約2cmのものである。丁寧なナデ調整を施す。

13号土坑

長径250cm×短径120cmで楕円形を呈す。やや傾斜した面からの検出であり、深さ12cmとやや浅い。埋土は黒褐色でパミスを含み、周辺の土と類似している。土坑内からは8点の遺物が出土しているが、図化できたのは3点である。69・70は土師器の裏である。外反する口縁部片で口径17cm前後に復元できる。両方とも橙色を呈し、外面に煤の付着が見られる。70は内面の頸部近くを粗く削り、その他はナデ調整される。71は内面のみを黒く燻した黒色土器A類の体部である。体部はほぼ直線的に立ち上がる。内面に横方向のミガキが施される。

16号土坑

平面形状は楕円形を呈し、長径244cm×短径88cm、深さ12cmである。13号土坑、22号土坑、23号土坑と近接しており、14号土坑を切っている。埋土は黒色でパミスを多く含む。遺構内からは遺物が多数出土した。59は土師器の裏の口縁部片である。短い口縁部が外反し、端部は断面四角形を呈す。丁寧な面取りを行う。胎土には石英粒や1~2mm大の軽石の粒子が多く見られる。60~62は黒

土器A類で内面のみが黒く燻され、ミガキが施される。いずれも口縁端部で外反し、口径8cm～10cmである。63～65は赤色土器である。63は口径13.5cm、高台径6.6cm、器高6.2cmの甕である。太めの高台から体部が直線状に外上方に立ち上がる。底部の器壁は厚く、内面の赤色顔料は所々剥がれ落ちている。内面半分には煤が付着する。65は高台径6.3cmの甕で、「ハ」の字状に開く高台を有する。内面は摩滅・剥落が著しく、観察できない。高台内面に赤色の顔料が塗布されるが、剥落が目立つ。66は軽石である。擦られた痕跡を残す。

20号土坑

長径68cm×短径52cm、深さ20cmで、ほぼ円形を呈す。焼土を伴い、周辺の土色と酷似する。拳大の軽石が3点出土したが、加工痕は認められなかった。

22号土坑

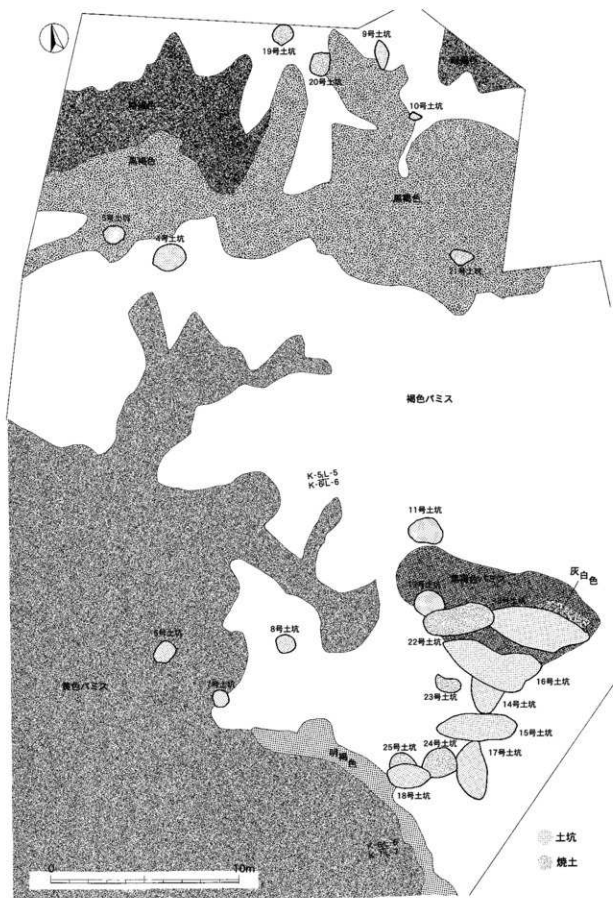
L-6区で検出された。被熱したと思われる土が硬化し、所々赤橙色を呈している。焼土の範囲は不定形で検出面から20cmの深さである。長径166cm×短径86cm、楕円形を呈す。土坑内からは主として土師器や軽石が多く出土した。75は復元口径15cm弱の土師器の口縁部である。内弯気味に立ち上がった体部は、口縁部近くで外反する。内外面とも丁寧なナデの調整が施される。焼成は軟質で甘く、浅黄橙色を呈す。76は断面三角形の高台を有する黒色土器A類の底部である。内面のみが黒く燻されるものである。内面のミガキは風化が著しいため明らかではないが、体部下半のナデ調整は観察できる。77は31.2cmに復元される大型の火舎の口縁部である。焼成が甘く、粉質である。上半は浅黄橙色であるが、下半に向かうにしたがって橙色となる。頸部下は下から斜上への粗い削りがなされるが、口縁部内外面はナデの調整で仕上げる。78は安山岩製の磨石である。長径10cm、短径8cm、厚さ4.5cmである。表面と側面に敲打痕を確認する。79は軽石製品である。長径9cm、短径4cm、厚さ4cmのほぼ長方形を呈す。平坦をなす面には整形時の加工痕が残る。

23号土坑

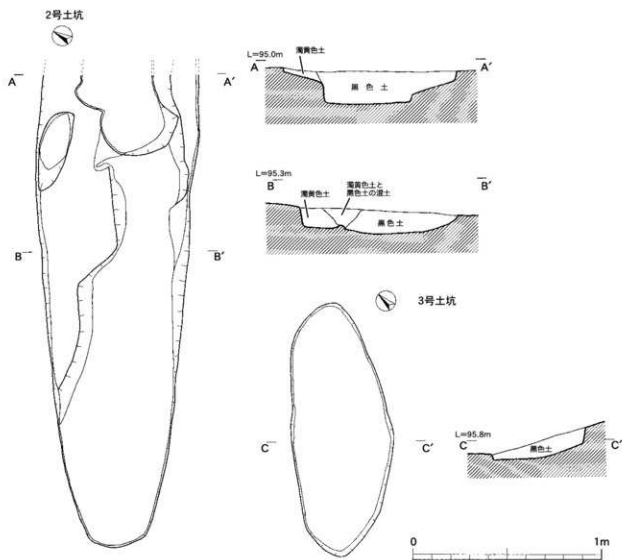
焼土の範囲は長径64cm×短径52cmに及び、検出面から16cmの深さまで焼土を含む。円形をなし、埋土は赤橙色を呈す。土坑の底は平坦で、壁の立ち上がりは直に近い。土師器を主とした遺物の出土がみられたが、そのうちの5点を図化する。80・81は土師器の坏か甕の口縁部片である。80は復元口径13.5cmで、体部が外反気味に立ち上がる。81は直状に立ち上がり、口縁部が僅かに肥厚する。両方とも内外面とも丁寧なナデ調整が施され、硬く焼き締まる。82は口径21cmに復元できる土師器の甕の口縁部である。屈曲部下を横方向の粗いヘラ削りで調整し、弱い稜をなす。また、丸味を帯びた口唇部もヘラで調整してある。口縁部内面と器面は横ナデで調整しており、一部横方向のハゲメの痕跡がうかがえる。外面は火熱を受けたため赤化し、煤の付着が見られる。きわめて硬質に焼成される。84は内面のみ赤色顔料が塗布される赤色土器片である。復元口径13.5cmで内外面ともに丁寧なナデ調整が施され、外面には煤が付着する。

24号土坑

長径100cm×短径72cmで、ほぼ円形に近い土坑である。検出面から28cmの深さまで焼土を厚く含



第26図 調査区東遺構配置図

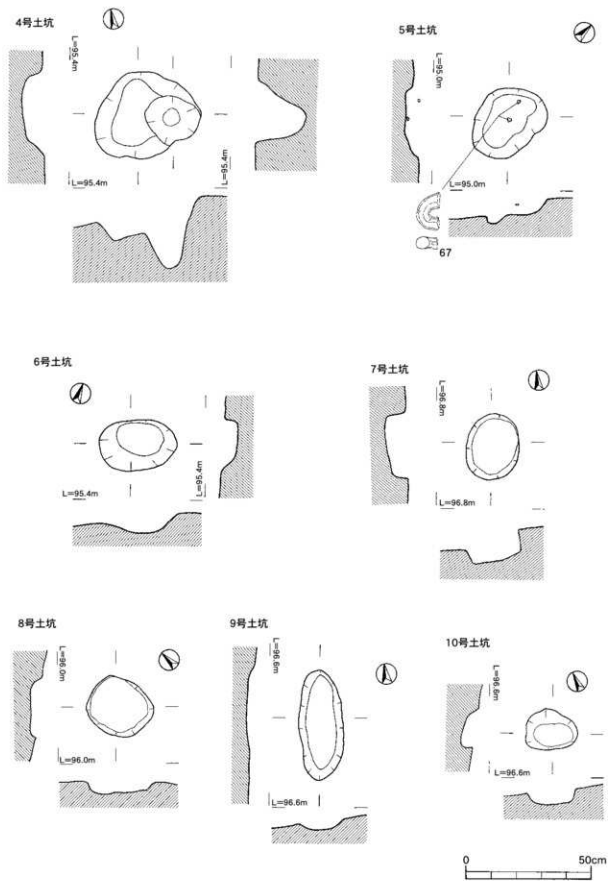


第27図 土坑(1)

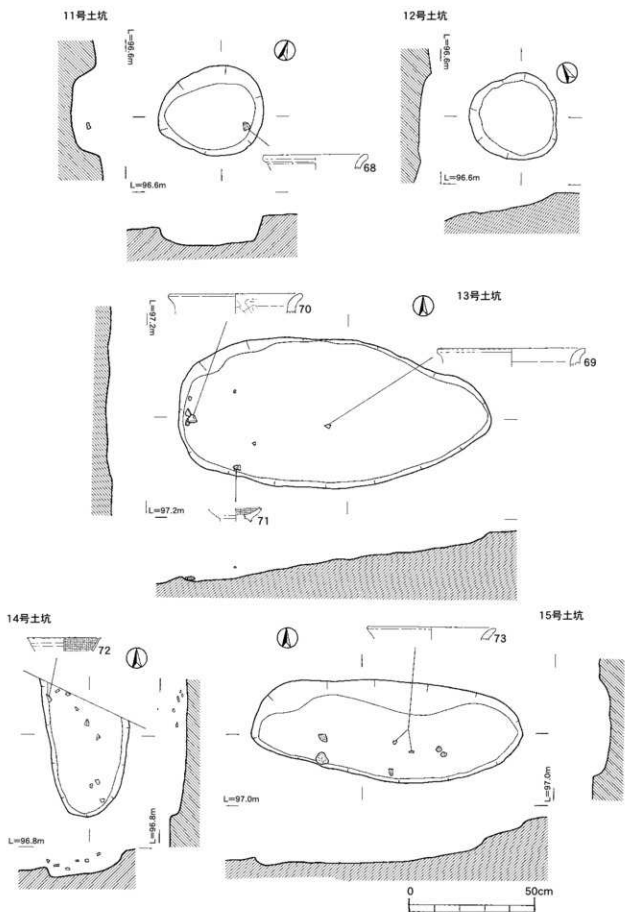
む。85は土師器の口縁部片である。体部は直線状に立ち上がり、口縁部の器肉は薄くなる。焼成はやや軟質で、浅黄褐色を呈す。86は土師器の甕の口縁部片である。口径19cmに復元できる。断面四角形の角張った口唇部はヘラナデで調整され、その中央部には僅かな窪みが観察できる。胎土には角閃石粒が多く含まれ、堅緻に焼成される。

25号土坑

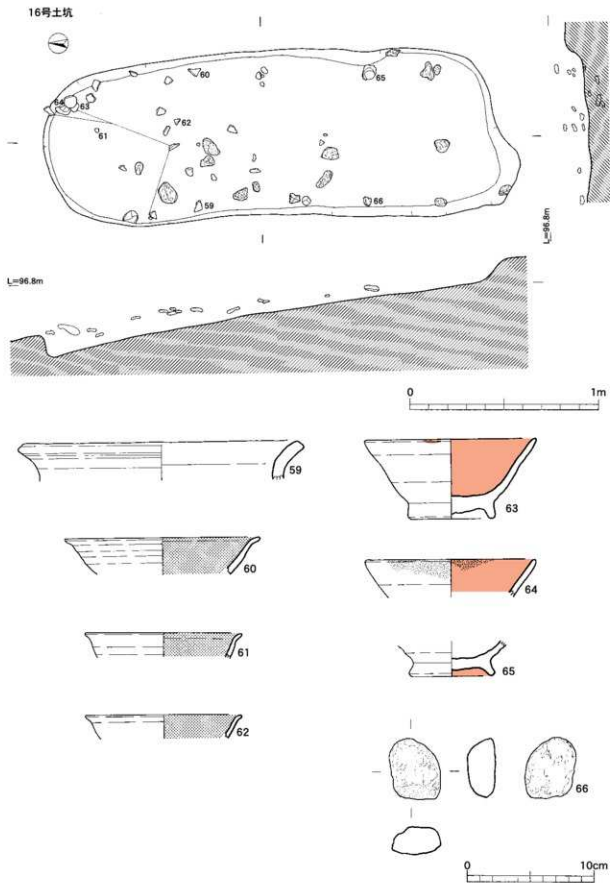
L-6区において24号土坑と近接した場所で検出された。18号土坑と重複するが、前後関係は不明瞭である。埋土は黒褐色で深さ28cmを呈す。遺物は4点出土し、その中の1点を図示する。87は土師器の甕で、30cmに復元できる大型のものである。頸部で屈曲し、口縁部は平坦をなす。頸部下は下から上への縦方向の粗い削り、それ以外はナデで調整される。胎土は砂粒を多く混じえ、器表に浮き出す。内面にはぶい赤褐色、外面には煤が厚く付着しており、暗褐色を呈す。



第28图 土坑(2)

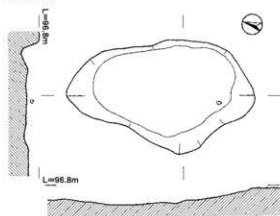


第29图 土坑(3)

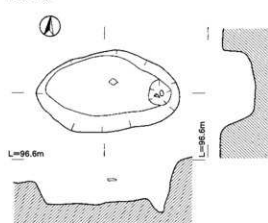


第30图 土坑(4)及出土遺物

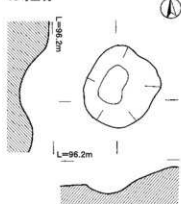
17号土坑



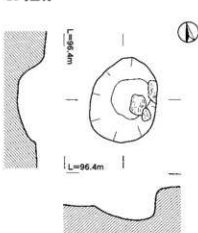
18号土坑



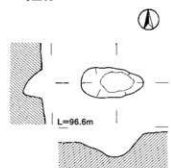
19号土坑



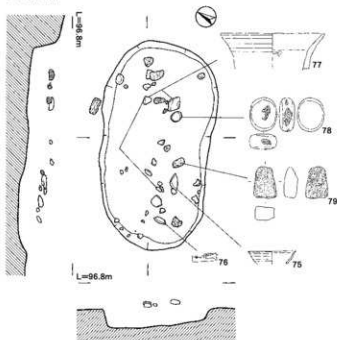
20号土坑



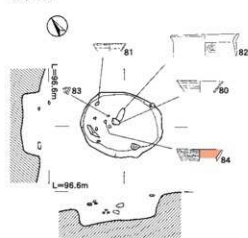
21号土坑



22号土坑



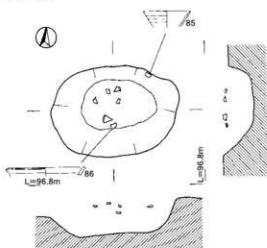
23号土坑



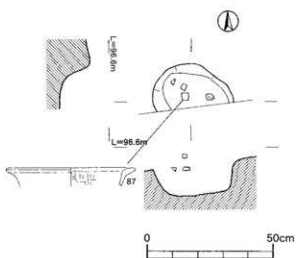
0 50cm

第31图 土坑(5)

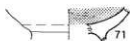
24号土坑



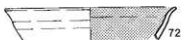
25号土坑



67



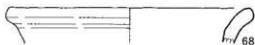
71



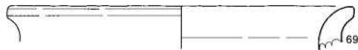
72



74



68



69



70

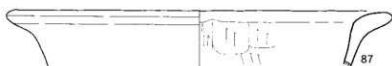
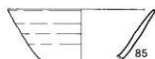
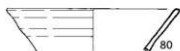
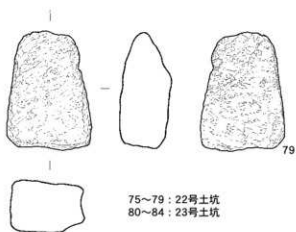
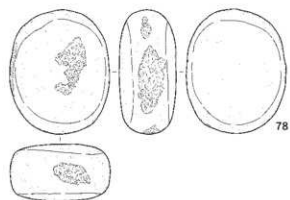


73



67 : 5号土坑 72 : 14号土坑
 68 : 11号土坑 73 : 15号土坑
 69~71 : 13号土坑 74 : 不明遺構

第32图 土坑(6)及び土坑内出土遺物



85·86 : 24号土坑
87 : 25号土坑



第33图 土坑内出土遗物

第6表 古代遺構計測表

棟号 番号	遺構	出土区	層	平面形状	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	共伴遺物	備考
27	2号土坑	D 4	Ⅲ	—	—	80	20		
	3号土坑	D 4	Ⅲ	楕円形	135	55	10		
	4号土坑	K 5	Ⅲ	円形	64	48	58		
	5号土坑	K 5	Ⅲ	円形	64	48	20	土師器	
28	6号土坑	K 6	Ⅲ	楕円形	62	40	16		
	7号土坑	K 6	Ⅲ	円形	54	40	20		
	8号土坑	K 6	Ⅲ	円形	54	48	12		
	9号土坑	L 5	Ⅲ	楕円形	88	34	10		
	10号土坑	L 5	Ⅲ	円形	40	32	14		
	11号土坑	L 6	Ⅲ	円形	84	72	24	土師器	
	12号土坑	L 6	Ⅲ	円形	70	68	12		
29	13号土坑	L 6	Ⅲ	楕円形	252	118	12	土師器, 黑色土器	
	14号土坑	L 6	Ⅲ	—	—	64	8	黑色土器	
	15号土坑	L 6	Ⅲ	楕円形	218	76	20	土師器	
30	16号土坑	L 6	Ⅲ	楕円形	244	88	12	土師器, 黑色土器, 赤色土器, 軽石製品	
	17号土坑	L 6	Ⅲ	楕円形	150	66	8	土師器	
31	18号土坑	L 6	Ⅲ	楕円形	114	64	深44浅20	土師器	
	19号土坑	L 5	Ⅲ	円形	66	56	22		焼土を伴う
	20号土坑	L 5	Ⅲ	円形	68	52	20	軽石	焼土を伴う
	21号土坑	L 5	Ⅲ	楕円形	48	22	16		焼土を伴う
	22号土坑	L 6	Ⅲ	楕円形	166	86	20	土師器, 黑色土器, 火舎, 石器, 石製品	焼土を伴う
	23号土坑	L 6	Ⅲ	円形	64	52	16	土師器, 黑色土器, 赤色土器	焼土を伴う
	24号土坑	L 6	Ⅲ	円形	100	72	28	土師器	焼土を伴う
32	25号土坑	L 6	Ⅲ	—	—	—	土師器	焼土を伴う	

第7表 遺構内出土遺物観察表

棟号 番号	遺物 番号	種別	器種	遺構	出土区	層	外面色調	内面色調	調整		法 量				備考	
									外面	内面	口径	底径	高台径	器高		
30	59	土師器	甕	16号土坑	L 6	—	にぶい褐	灰褐	横ナデ	横ナデ	21.6	—	—	—	—	口縁部
	60	黑色土器	甕	16号土坑	L 6	—	にぶい黄橙	黒	横ナデ	横ナデ	15.4	—	—	—	—	口縁部
	61	黑色土器	甕	16号土坑	L 6	—	にぶい黄橙	黒	横ナデ	ミガキ	12.4	—	—	—	—	口縁部
	62	黑色土器	甕	16号土坑	L 6	—	浅黄橙	黒	横ナデ	ミガキ	12.5	—	—	—	—	口縁部
	63	赤色土器	甕	16号土坑	L 6	—	にぶい橙	にぶい赤褐	横ナデ	ナデ	13.6	—	6.45	6.3	—	口縁部～底部
	64	赤色土器	甕	16号土坑	L 6	—	橙	橙	横ナデ	横ナデ	13.4	—	—	—	—	口縁部・底付着
	65	赤色土器	甕	16号土坑	L 6	—	橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	—	—	6.3	—	—	底部
	66	石製品	—	16号土坑	L 6	—	浅黄	浅黄	—	—	長径4.7cm	短径3.8cm	重さ13.41g	—	—	—
	67	土師器	甕	5号土坑	K 5	Ⅱ	橙	橙	ナデ	ナデ	—	—	—	—	—	把手
	68	土師器	甕	11号土坑	L 6	—	褐	明赤褐	ナデ	ナデ	19	—	—	—	—	—
32	69	土師器	甕	13号土坑	L 6	—	橙	橙	ナデ	ナデ・ケズリ	27.2	—	—	—	—	口縁部
	70	土師器	甕	13号土坑	L 6	—	橙	明褐	ナデ	ナデ・ケズリ	24.6	—	—	—	—	口縁部
	71	黑色土器	甕	13号土坑	L 5-6	—	浅黄橙	黒	横ナデ	ミガキ	—	—	—	—	—	胴部～底部
	72	黑色土器	甕	14号土坑	L 6	—	にぶい黄橙	黒	横ナデ	ミガキ	13.4	—	—	—	—	口縁部
	73	土師器	甕	15号土坑	L 6	—	にぶい赤褐	にぶい赤褐	横ナデ	横ナデ	23.8	—	—	—	—	口縁部
	74	土師器	甕	不明	L 6	—	浅黄	浅黄橙	—	—	—	—	7.8	—	—	—
	75	土師器	甕	22号土坑	L 6	—	にぶい黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	14.2	—	—	—	—	口縁部
	76	黑色土器	甕	22号土坑	L 6	—	橙	暗灰黄	横ナデ	ミガキ	—	—	6.6	—	—	底部
	77	火舎	—	22号土坑	L 6	—	橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	30.8	—	—	—	—	口縁部
	78	石器	磨石	22号土坑	L 6	—	—	—	—	—	径10cm	短径8cm	最大厚45cm	重さ70kg	—	—
79	石製品	—	22号土坑	L 6	—	浅黄	浅黄	—	—	長径9.3cm	短径5.8cm	重さ69.29g	—	—	—	
33	80	土師器	甕	23号土坑	L 6	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	13.6	—	—	—	—	口縁部
	81	土師器	甕	23号土坑	L 6	Ⅰ	明黄褐	橙	横ナデ	横ナデ	11.8	—	—	—	—	口縁部
	82	土師器	甕	23号土坑	L 6	Ⅱ・Ⅲ	明赤褐	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ・ケズリ	26.6	—	—	—	—	口縁部
	83	黑色土器	甕	23号土坑	L 6	—	浅黄	黒	横ナデ	ミガキ	—	—	—	—	—	口縁部
	84	赤色土器	甕	23号土坑	L 6	—	にぶい黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	13.5	—	—	—	—	口縁部
	85	土師器	甕	24号土坑	L 6	—	浅黄橙	浅黄	横ナデ	横ナデ	11.6	—	—	—	—	口縁部
	86	土師器	甕	24号土坑	L 6	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	ナデ	9.0	—	—	—	—	口縁部
	87	土師器	甕	25号土坑	L 6	—	暗褐	にぶい赤褐	横ナデ	横ナデ・ケズリ	30.0	—	—	—	—	口縁部・底付着

2 遺物

数多くの土器が出土した。土師器をはじめ、須恵器が主である。須恵器は破片資料が多かったが、接合や復元により、口径約25cm、張り出す肩部最大径51cmの大甕の存在も明らかになった。その他、黒色土器、赤色土器、須恵質土師器、特殊遺物、土製品がある。

(1) 土師器

各区から土師器は多量に出土した。最も集中したのは調査区中央部であった。いずれも小破片で、完形品はなかった。坏、壺、甕、鉢がある。

坏 (88~99)

88・89は底部から口縁部までのもの、90は胴部片、91~99は底部である。ただ、95~99の底部は厚くなっているが、南九州でよく見られる充実高台と呼ばれるものとは若干異なる。意識的に高台状に作られたのではなく、底部切り離し、または調整する際に厚くなったものと考えられる。88・89は底径に差はあるが、傾きは似る。両方とも摩滅が著しいが、底部のヘラ切り痕、内面のナデ調整が観察できる。90は底部中心を欠損しているが、僅かにヘラ切り痕が残る。浅黄橙色を呈し、焼成は甘く、軟質である。91、92の法量は似る。91は角張る底部から調整時についてと思われる屈曲部を有し、立ち上がる。92、93は底部から丸味を帯びながら立ち上がり、内面見込みにはナデによる丁寧な調整が見受けられる。胎土には1mm大の石英粒を含む。両方とも硬く焼き締まる。95~97の底部形状は酷似しており、外底はヘラ切り離した後、ナデ調整される。体部下半、内面にも指ナデによる調整が施される。底径5cm前後である。98は低い高台状の底部を有すが、外面の調整は粗い。99は摩滅が進み、調整を不明瞭にする。底部から約1cmほど斜上方に立ち上がり、更に外方へ屈曲する。坏の類に入れてはいるが、他の器種の可能性もある。

壺 (100~139)

出土した壺は器形により大きく6類に分類できる。

壺Ⅰ類 (100~105) ……体部は直線状に開き、深さがある。口径は9cm~13.5cm。

壺Ⅱ類 (106~113) ……Ⅰ類より直線状に大きく開き、浅い。口径12cm~15cm程度。

壺Ⅲ類 (114~115) ……体部が内湾する。

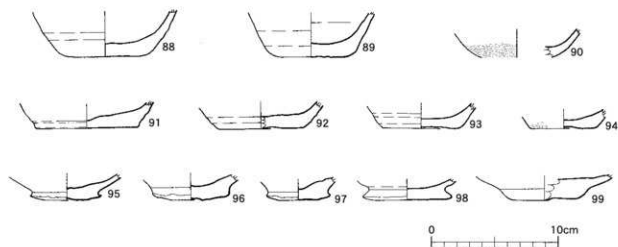
壺Ⅳ類 (116~121) ……口縁端部が僅かに外反する。

壺Ⅴ類 (122~125) ……Ⅰ類より大きく外反する。

底部類 (126~139) ……底部一括

100~102は似た法量のものである。いずれも丁寧なナデ調整で仕上げる。107は橙色を呈し、緻密に焼成される。胎土に茶色石粒を含み、器表に多く見られる。111は直線状に立ち上がる体部を内外面とも丁寧な横ナデで調整している。緻密な胎土を用い、器壁を薄く仕上げた精良なものである。体部下半に煤付着を確認する。115は丸味を帯びた体部が内湾気味に立ち上がるが、体部中位から器壁が急に薄くなり、口縁付近で若干厚みを増す。とても丁寧なナデ調整により仕上げる。116は口縁部内外面に厚い煤が固着する。灯明器の可能性が高い。118は口縁部近くを強く横ナデすることにより、若干の稜を生じさせる。122~124は焼成が良好で、器肉を薄く精良に仕上げる。

底部は、脚長の高台を有するもの (126~128)、「ハ」の字状に開く高台を有するもの、短い高台



第34図 古代 土師器(1)

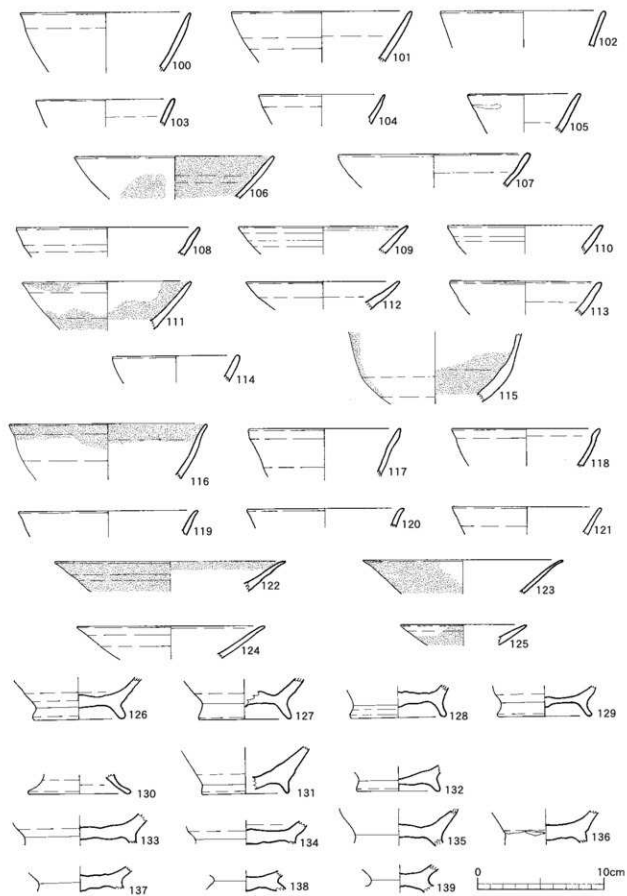
を有するもの(131・132)、摩滅・剥離が著しく、調整を不明瞭にしているもの(133~139)に分けられる。

甕 (140~159)

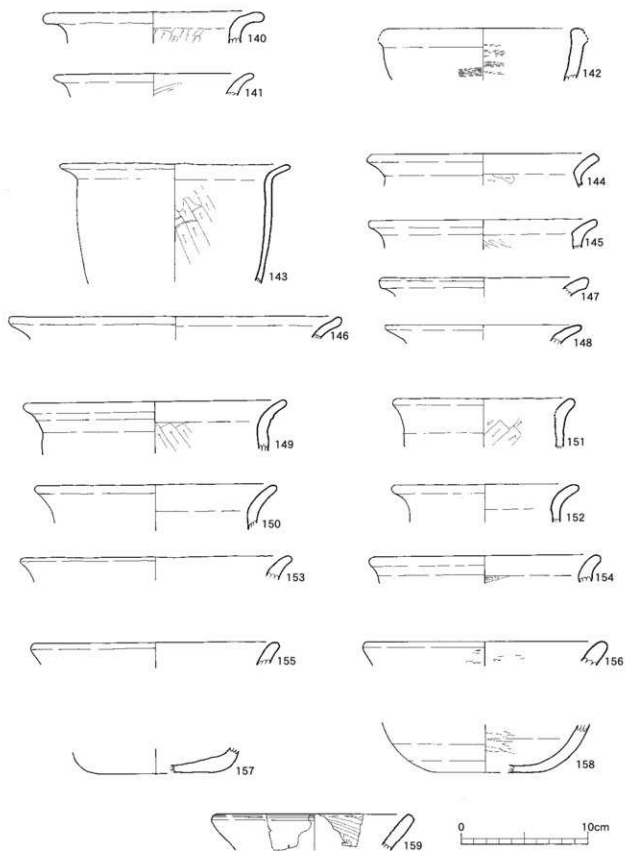
甕は大きく6類に分類できる。口縁部が平坦をなすもの(140~142)、屈曲が強く、口縁部が開くもの(143~148)、頸部からなだらかに屈曲し、「く」の字状を呈すもの(149~154)、口縁部が直線状に立ち上がるもの(155・156)、底部(157・158)である。140は口径17.4cmに復元される小型の甕である。口縁部下からL字状に屈曲し、口縁の端部を外方に引き出し、上面を平坦にしている。内面胴部は粗い削り、その他は横ナデの後、指頭によるナデ調整を行う。僅かながら歪みがみられる。141は小破片であるが、口縁端部が大きく外反し、端部が1cm程度平坦をなす。丁寧な横ナデの調整で、きわめて硬質に焼成される。142は口縁端部は欠損しているが、口縁部を直に屈曲させ、上面をヘラで平滑に仕上げる。内外面ともハケメ・指頭痕が観察できる。143は長胴の胴部を有す口径18cmに復元される甕である。内面頸部下は斜位の削り、他は横ナデにより丁寧に調整される。胎土に石英粒、角閃石粒、軽石粒が多く含まれる。144・145は内面頸部の屈曲部に横方向のヘラ削りを行うことで強い稜を巡らす。147は口径16.8cmに復元される甕口縁部の小片である。僅かに肥厚する端部を丸味をもった形におさめている。146~148の外面には煤付着を確認する。149と150の器形は似ている。149の調整は、内面頸部下が斜位のヘラ削りを施すが、内面口縁部と外面は横ナデで仕上げられる。硬質に焼成され、にぶい橙色を呈す。153は精良な胎土を用いて作られ、堅緻に焼成されている。口縁部の内外を横ナデで仕上げている。156は厚い器肉の口縁部内外に横方向のハケメが残り、橙色を呈す。158は底径9cmに復元でき、内面は横方向の削りで調整し、器面をヘラによるナデで仕上げている。胎土には5mm弱の軽石粒を多く見受けける。

鉢 (159)

鉢は1点のみの出土である。内面は斜位のヘラ削り、外面はナデ調整される。硬質に焼成され、橙色を呈し、一部分に煤が付着する。口縁部は断面四角形を呈し、口唇部は横方向にヘラで平滑に仕上げる。



第35图 古代 土師器(2)



第36図 古代 土師器(3)

(2) 黒色土器

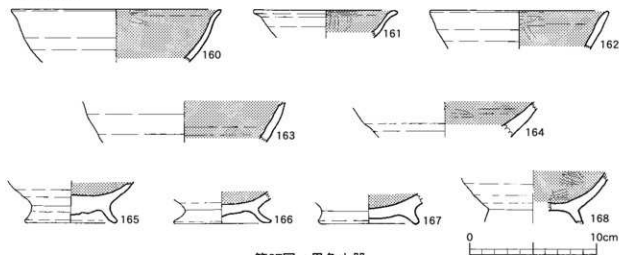
内面のみが黒く燻される黒色土器A類が出土している。調査区東部や南部からの出土がほとんどを占める。小破片が多く、図示できたのは8点であった。全て碗である。

160・161は体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が外反するものである。160は小破片のためはっきりしないが、復元口径13.8cmと大きい。外面調整は横ナデ、内面調整は横方向を基調とし、上から斜方向にミガキを行っている。161の外面には煤が付着している。内面の外反した口縁部分には横方向のミガキ、それより下部は縦方向のミガキによって仕上げている。

162の体部は直線的に立ち上がり、外面にはふい黄橙色を呈す。口縁上部は横方向のミガキ、それより下は斜方向のミガキを行っている。

163と164は胴部片である。163の内面は薄い灰色を呈し、胎土の色調が所々にみられる。丁寧なミガキによって仕上げ、工具痕を残していない。焼成はやや軟質である。164は摩滅が激しいが、器壁は厚い。内面色調は、黒味を帯びた橙色を呈す。僅かに横のミガキが確認できる。

165～168は底部である。165・166の高台は「ハ」の字状に開く。165の胎土は精良緻密で焼成も良好である。見込み部分の黒色は剥げかかっている。166の高台は165より開き、高台先端部は平坦をなす。内面は丁寧なミガキによって仕上げている。焼成はやや甘い。168の高台内外面は横ナデされており、浅黄色を呈す。内面の体部下半には横のミガキ、体部中位より上には斜方向のミガキが施されている。高台先端部が欠損しているため、形状は不明であるが、高い高台を有するものと考えられる。



第37図 黒色土器

第8表 黒色土器観察表

種別 図番号	遺物 番号	器種	出土区	層	外面色調	内面色調	調整		法量			備考	
							外面	内面	口径	底径	高台径		器高
37	160	碗	K 5	II	浅黄橙	黒	横ナデ	ミガキ	16.5	—	—	—	口縁部
	161	碗	G 5	I b	にふい黄橙	黒	横ナデ	ミガキ	11.0	—	—	—	口縁部
	162	碗	H10	表土一括	にふい黄橙	暗灰	横ナデ	ミガキ	14.0	—	—	—	口縁部
	163	碗	I 5	II	浅黄	灰オリーブ	横ナデ	ミガキ	—	—	—	—	胴部・石英粒
	164	碗	II1	II下	にふい黄橙	にふい黄褐	横ナデ	ミガキ	—	—	—	—	胴部
	165	碗	L 6	II	浅黄	黒	横ナデ	ミガキ	—	—	7.2	—	底部
	166	碗	K 5	II	浅黄	黒	横ナデ	ミガキ	—	—	7.6	—	底部
	167	碗	H 6	III	にふい黄橙	にふい黄橙	横ナデ	横ナデ	—	—	7.4	—	底部
168	碗	I 4	I b・II	浅黄橙	暗灰	横ナデ	ミガキ	—	—	—	—	底部	

(3) 赤色土器

内面に赤色顔料を塗り込んだもので、小破片が多く、摩滅の激しいものが目立つた。そのなかの15点を図示する。全て壺であり、ほとんどの外面色調は浅黄橙色を呈す。出土位置は、調査区東部に集中している傾向にある。

壺

器形により4類に区分する。

壺Ⅰ類 (169～172)

底部から直線的に外上方にのびる口縁をもつ類である。169は口径14cm、底径8cm、器高5.5cmである。「ハ」の字状に開き、すっとのびた高台を有す。全体的に歪み、口縁部は波打った感がある。内面には橙色の顔料が丁寧に塗布されており、胎土には多くの茶色石粒が見受けられる。体部下半には大きな段があり、高台を貼り付ける際のナデ調整によるものではないかと考えられる。171は復元口径13.8cmで169とほぼ同じ法量である。内外面とも摩滅が激しく、内面の顔料は所々剥がれ落ちている。外面にも薄く所々に赤色顔料がみられるが、全体に塗布したものなのか垂れたものなのかは判別不能である。胎土には1～2mm大の茶色石粒や石英粒もみられる。170と172は復元口径16cm弱の大きな壺である。両方とも小破片ではあるが、内外面ともナデ調整が施されており、内面は鮮やかな橙色を呈す。

壺Ⅱ類 (173・174)

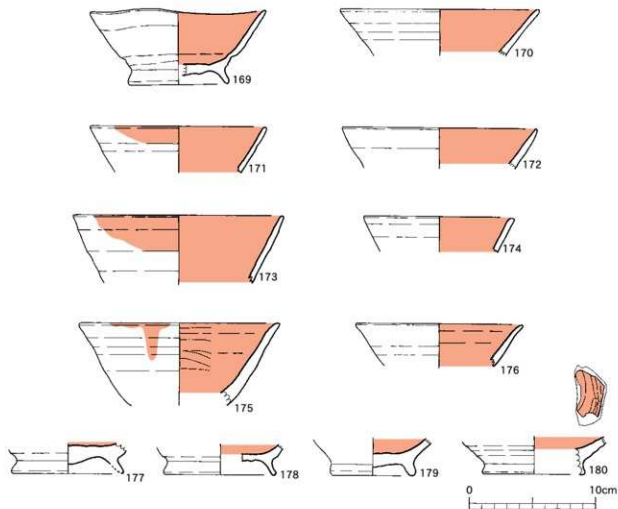
Ⅰ類より比較的深さをもつ2点である。173は摩滅が激しく、小破片であるため径の信頼性は低い。復元口径16.4cmの大きな壺である。胎土には黒色の微粒子や石英粒、茶色石粒もみられる。焼成は良好だが、やや粉質である。174は復元口径12cmである。胎土には173同様、黒色の微粒子が多くみられる。器壁が厚く、口縁部は丸味を帯びる。摩滅が激しいが、内外面ともナデ調整に治い、明赤褐色の顔料が残る。

壺Ⅲ類 (175・176)

体部は丸味をもつが、若干外反する口縁部をもつ。175は器壁が厚く、口径約16cmである。外面は浅黄橙色を呈し、多くの茶色石粒が見受けられる。内面の赤色顔料は厚く丁寧に塗布されている。外面には顔料の垂れが見受けられる。内面は斜方向のミガキ、外面は横ナデによって調整されている。また、体部中位には調整時に付いたと思われる段を有す。焼成も良好で焼き締まっている。176は口唇部手前で外側に薄く積み上げられる。内面の一部にしか赤色はみられない。

底部類 (177～180)

いずれも「ハ」の字状に開くが、細く長いもの(177・178)と厚く短いもの(179・180)がある。177は摩滅が激しく、残りはよくない。ただ、焼成は良好で硬く、内面見込み部分は丁寧なミガキにより調整してある。178は内外面に煤が付着しているが、欠けた部分の付着もみられるため、二次的に火熱を受けたのではないかと考える。内外面とも丁寧なナデが施されてある。内面の1～2mm大の石英粒が目立つ。



第38図 赤色土器

179は内外面ともナデ調整が丁寧なされているが、軟質で焼成が甘い。内面は薄くなった橙色を呈す。底部内面にも僅かに赤味を帯びた部分が確認できるが、判別不能である。180は摩滅が激しく、高台と立ち上がりの部分が僅かに残る。粉質で焼成が甘い。内面見込み部分に顔料がみられる。

第9表 赤色土器観察表

種図 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	外面色調	内面色調	調 整		法 量				備 考
							外面	内面	口径	底径	高台径	器高	
38	169	碗	H 6	Ⅱ・Ⅲ	にぶい橙	明赤褐	ナデ	ナデ	13.8	—	7.6	5.7	口縁～底部
	170	碗	L 6	Ⅱ・Ⅲ	浅黄橙	橙	ナデ	ナデ	15.6	—	—	—	口縁部
	171	碗	K 5	Ⅱ	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	13.8	—	—	—	口縁部
	172	碗	16・G4	Ⅱ	浅黄橙	橙	ナデ	ナデ	15.4	—	—	—	口縁部
	173	碗	Ⅱ0	Ⅲ一括	浅黄橙	明赤褐	ナデ	ナデ	16.5	—	—	—	口縁部
	174	碗	K 6	Ⅱ	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	11.8	—	—	—	口縁部
	175	碗	H 6	Ⅲ	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	15.9	—	—	—	口縁部
	176	碗	G4南北T	Ⅱ	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	13.2	—	—	—	口縁部・茶粒
	177	碗	5トレンチ	I	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	—	—	8.8	—	底部
	178	碗	H 5・16	Ⅱ	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	—	—	8.6	—	底部
	179	碗	K 5	Ⅱ	橙	橙	ナデ	ナデ	—	—	6.0	—	底部
	180	碗	H 4	Ⅱ一括	浅黄橙	橙	ナデ	ナデ	—	—	8.1	—	底部

(4) 須恵質土師器

本遺跡から出土した須恵質土師器は6点でその全てを図示する。ここでの須恵質土師器とは、高度で堅緻に焼成されたと思われる土師器をいう。6点とも薄い橙色を呈す。以下、器種に分けて説明する。

坏 (181~183)

181~183は坏である。底部にヘラ切り痕を有す。181は大きく歪み、口縁部はほぼ楕円形をなす。底部内外面に大きなヒビが見受けられ、胎土には1~2mm大の石英粒を含む。器肉が薄く、底部から緩やかに外反する。器の内外面には横方向のナデ整形痕が見られる。182は口径12cm、底径6.5cm、器高約4.5cmで、内外面ともナデ調整が施されている。底部外面に灰色を呈す部分が見られる。

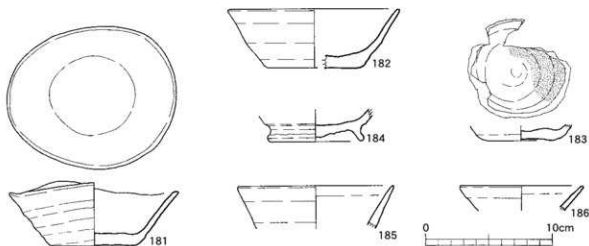
183は坏の底部である。底径約6cmで底部外面にヘラ切り後、指でナデた痕跡を残す。胎土には、5~6mm大の軽石粒や石英の微粒子が見られる。焼成は良好だが、細かいひび割れが所々に見受けられ、内面に煤付着を確認する。

碗 (184)

184は碗の底部である。高台が「ハ」の字状に開き、中位から先端部にかけて丸みをもつ。高台付け根よりすぐ上に屈曲部を残し、そのまま直線的に立ち上がろうとしている。胎土は緻密で細かく、焼成は非常に良好で硬く焼締まっている。内外面とも丁寧なナデ調整が行われている。

器種不明 (185・186)

185と186は口縁部であるが、器種不明のものである。185は直状に立ち上がり、口縁端部を薄くつまみ上げる。186は浅く、内外面ともに丁寧な横ナデがされている。



第39図 須恵質土師器

第10表 須恵質土師器観察表

種別 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	外面色調	内面色調	調整		法量				備考
							外面	内面	口径	底径	高台径	器高	
39	181	坏	H3・4	Ic・III	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	13.5	6.8	—	5.1	口縁部~底部
	182	坏	H5・16・7	Ia・III	橙	にぶい橙	横ナデ	横ナデ	13.7	7.2	—	4.7	口縁部~底部
	183	坏	16	II	橙	にぶい橙	横ナデ	ナデ	—	5.8	—	—	底部・煤付着
	184	碗	H5・17	Ib	橙	にぶい橙	横ナデ	横ナデ	—	—	7.4	—	底部
	185	坏か碗	18	II	赤褐	明赤褐	横ナデ	横ナデ	12.4	—	—	—	口縁部
	186	坏か碗	G4	I一括	にぶい赤褐	灰褐	横ナデ	横ナデ	9.8	—	—	—	口縁部

(5) 須恵器

須恵器は主に調査区中央部から多く出土しており、甕・壺・鉢がみられた。遺物の多くはⅠ・Ⅱ層で出土しているが、表土一括で取り上げられたものもあるため、層は不安定と考えられる。

甕 (187~201)

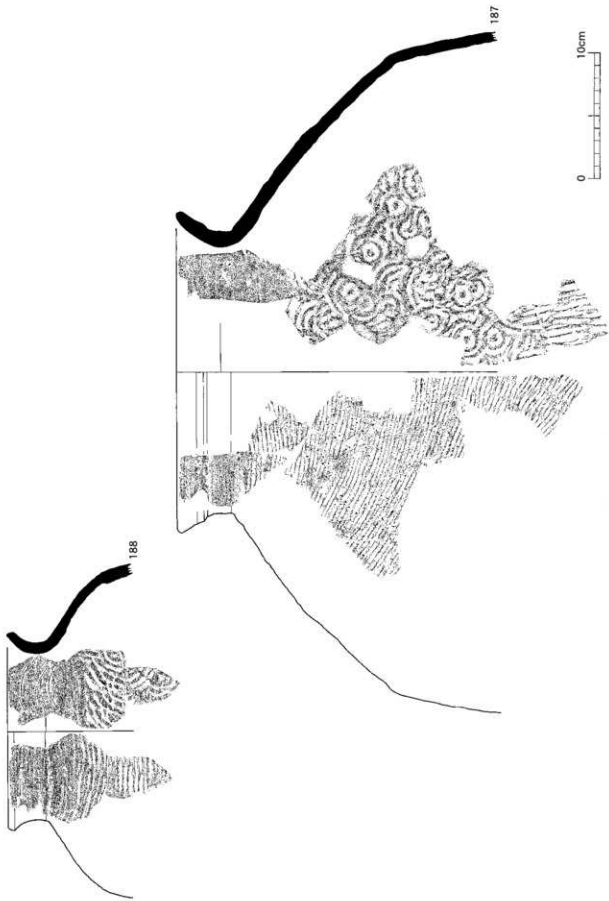
187・188は甕の口縁部である。187は復元口径25cm程の頸部から外反する口縁部をもつ大型の甕である。頸部から肩部にかけて大きく開き、肩部付近で直状にすぼまる。同一個体と思われる小破片が十数点あったが接合不能であった。188は張り出す肩部から短い頸部が垂直気味に立ち上がり、すぐに外側に開く。口唇部は丸味を帯びず、直状を呈す。2点とも外面に平行状タタキ痕、内面には同心円状当て具痕が見られる。

189・190は胴部であるが、若干頸部を有す。口縁部形態については不明である。189は187同様、大型の甕であるが、短い頸部が直状に立ち上がる。頸部内面にはナデ調整の上に指圧痕がみられる。外面は灰色で内面は赤味がかかった灰色を呈す。器面に長格子状タタキ痕、内面に同心円状当て具痕を残す。190の頸部内面は丁寧なナデ調整を行い、外面は平行状タタキ痕、内面は同心円状当て具痕が残る。

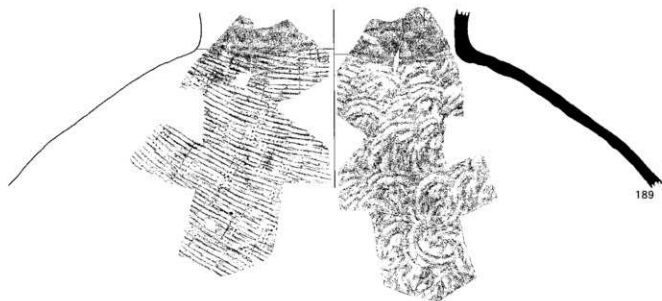
191~201は甕の胴部である。191・192は色調、胎土、焼成から同一個体と思われる。両点とも外面に長格子状タタキ痕、内面には平行状当て具痕がやや斜方向に残る。196・194は色調、タタキ痕は似ているが、内面の当て具痕、胎土等から別個体のもと思われる。全体的に明赤褐色を呈す。196の下方は器壁が厚くなっており、ケズリも粗いため、甕の底部に近い可能性が高い。器面に平行状タタキを様々な方向に組み合わせた痕が残る、内面には太い平行状の当て具痕が残る。焼成は良好である。194の器面は光沢を帯びる。胎土に含まれる成分によるものではないかと考える。5点の破片が接合されたものだが、かなりの歪みがみられる。甕の一番膨らみをもつ部分と考える。上部付近には自然軸がかかっている。197の内面下部はハケナデ調整によって当て具痕はほとんど消されているが、内面上部には同心円状当て具痕が残る。198の外面は土師器様の色調を呈す。摩滅が激しいが、所々に平行状のタタキ痕が見受けられる。197同様、内面下部は丁寧なナデ調整が行われているが、上部には同心円状の当て具痕が残されている。200は外面のタタキ痕をハケナデ調整によってほとんど消している。外面色調は縞状を呈す。199・201の外面には正格子状タタキ痕、内面に同心円状当て具痕が残る。ただ、201の内面には平行状の当て具痕もみられる。

壺 (202~211)

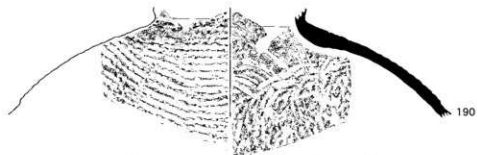
202は復元口径15cmの壺である。直状に立ち上がる胴部が肩部で内側に屈曲し、頸部からのびた口縁部下で「く」の字状になり、さらに外反する。口唇部は平坦をなす。自然軸がかかり、黄色味を帯びる。内面は丁寧なナデ調整がされている。203はほぼ垂直に立ち上がる頸部から口縁部が外反する。内外面ともナデ調整が施されている。また、内面には自然軸が見受けられる。204・206は肩部である。204の外面下には横方向のタタキ痕が残るが、上方はナデによって消されている。しかし、張り出した肩付近に放射状のタタキ痕が見受けられる。内面には指圧痕が残る。206は内外



第40図 須恵器(1)



189



190



191



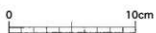
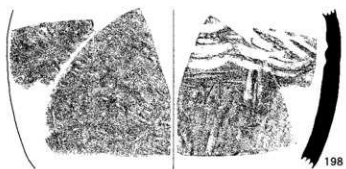
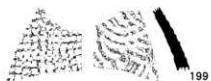
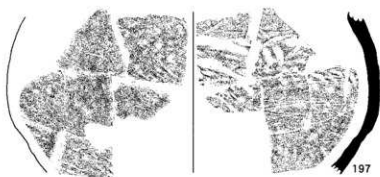
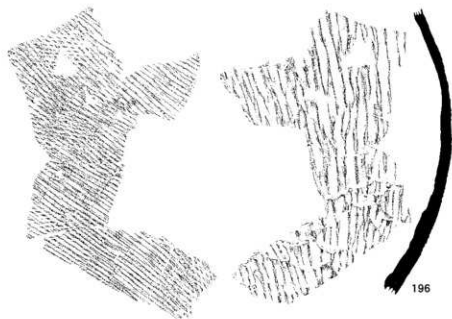
192

0 10cm

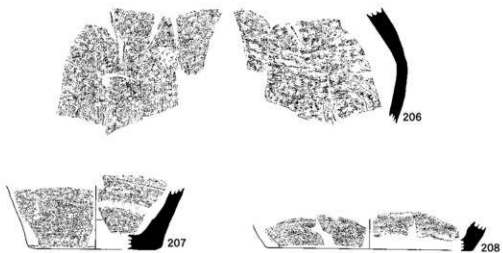
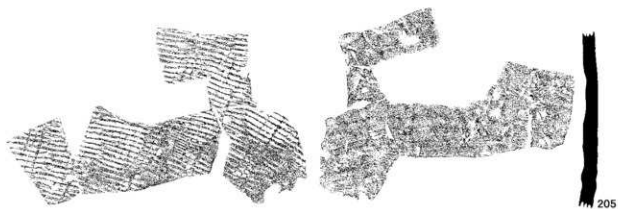
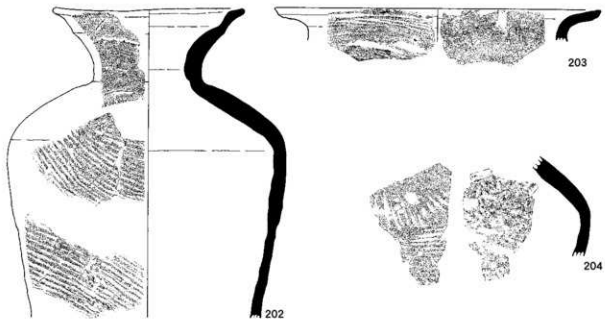
第41图 须惠器(2)



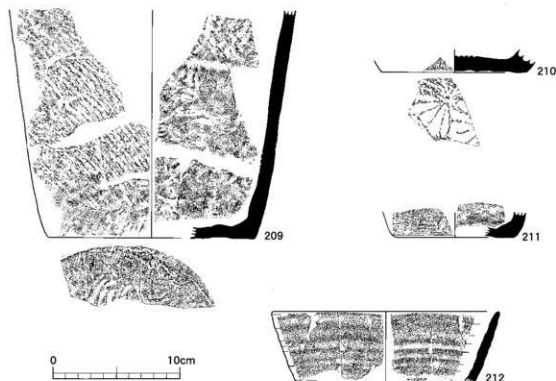
第42図 須惠器(3)



第43図 須恵器(4)



第44図 須恵器(5)



第45図 須恵器(6)

面とも灰色を呈し、丸味を帯びた肩を有する。肩部上方では丁寧な横のナデ調整がなされ、下方には縦のハケメ痕が残る。205は胴部である。外面に斜方向の長格子状タタキ痕が残り、内面はヘラケズリのとナデ調整がされている。胎土は緻密で焼成良好である。

207～211は底部である。207は底部から外上方に立ち上がる。胎土に黒い粒子を含み、小さく空洞をつくる。内外面ともに丁寧なナデ調整を行っている。208は僅かに残る底部から立ち上がる部分の底部片である。小破片ではあるが、外面の丁寧なナデ調整が確認できる。209は直立に近い立ち上がりで、外面には格子状タタキ痕をナデ消している。熱により赤く発色した部分や自然釉も見受けられる。底部外面には目痕があり、重ね焼きしたことをうかがわせる。内面には輪積み痕や同心円状当て具痕をヘラによりナデ消した痕跡が残る。210は底部外面に車輪文タタキ痕を残す。底部から立ち上がる外面の一部にも車輪文タタキ痕が見受けられる。内面には自然釉がかかり、白茶等の斑点状になる。

鉢 (212)

鉢は1点のみの出土である。復元口径19cmで体部が外上方に立ち上がる。内外面ともナデ調整である。胎土は精良緻密で焼成も良好である。口縁部付近は橙色気味に発色している。同一個体と思われる小破片が7点出土しているが、出土箇所はばらばらである。

(6) 特殊遺物

本遺跡からは墨書土器1点、刻書土器1点、器種不明1点が出土した。これらをまとめて特殊遺物とする。

墨書土器 (213)

213は黒色土器A類の口縁部片である。丸味を帯びた体部下半から直線状に立ち上がる。器面に細めの筆致で「三依」と思われる文字の墨書を施す。内面上半は横方向のヘラミガキ、下半は縦方向のヘラミガキを細かく行っている。また、口縁部付近に薄い煤付着を確認する。復元口径13.6cmでにぶい黄橙色を呈す。

刻書土器 (214)

214は高台径7.3cmの赤色土器の碗である。僅かにつまみ出した「ハ」の字状の短い高台を有す。体部下半に屈曲部を有し、外反気味に立ち上がる。器肉が厚く、硬く焼き締まり、焼成は良好である。赤色顔料の塗布された見込み部分には鋭利な工具で焼成、塗布後に刻書されている。「月」の文字は確認できるが、その左上に刻書された文字は判読不能である。また、底部外面を指頭による調整が明瞭に残る。ただ、放射状の規則的な調整とはやや異なる。このような底部の調整は、本遺跡または近隣遺跡での出土遺物に類例を見ない。

器種不明 (215)

215は鉢形に近い器形の小破片である。体部最大径は11.4cmに復元でき、厚さ6.5mmである。破片下部は膨らみを持ち、底部近くであると考えられる。頸部から外反する部分が僅かに観察できる。内外面とも丁寧なナデによる調整が施される。胎土に石英粒を多く含み、内面は浅黄橙色、外面は焼成により淡赤橙色に発色する。

(7) 土製品 (216~223)

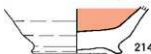
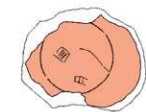
216~220は土師器碗の底部を再利用し、中央部を穿孔した紡錘車である。216~218は7cm前後で中心部に1cm弱の穿孔を有す。216は黒色土器A類の碗の底部を再利用しており、側面は丁寧なミガキを施す。217・218は底部のヘラ切り痕が残るが、ミガキによって調整している。219は他のものより大きめで復元径9.2cmを測る。土師器底部のヘラ切り痕は確認できるが、立ち上がり部分が若干残っており、磨かれた痕跡は不明瞭である。220は復元径2.7cmを測る小さなものである。摩滅・剥離が著しく、調整は明らかではない。

221・222は底部の破損部分を転用した円盤状土製品である。221は高台径6.5cmの碗の高台と体部を粗く削り取っている。削り取る際に付いたと思われる調整を確認する。222は径6cmの高台をきれいに削り取っている。ただ、表面の破損が著しく、調整は不明である。

223は粘土塊である。特にL-6区で検出された焼土遺構群の中から数点、調査区中央から多量の粘土塊が出土した。その中の1点を図示する。粘土塊は親指大のものから拳大のものまであり、所々に筋の繊維状の痕跡を観察する。



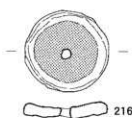
213



214



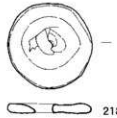
215



216



217



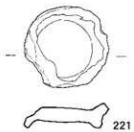
218



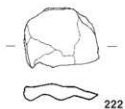
219



220



221



222



223



第46図 古代 特殊遺物

第11表 古代遺物観察表(1)

神道 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	層	外面色調	内面色調	調 整		法 量			備 考		
								外面	内面	口径	底径	高台径		器高	
34	88	土師器	環	K 5	Ⅱ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	-	5.0	-	-	底部	
	89	土師器	環	15	Ic	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	-	4.6	-	-	底部、茶粒	
	90	土師器	環	H 5	Ⅱ	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	底部、煤付着	
	91	土師器	環	G 4	I上	黄褐	黄褐	横ナデ	横ナデ	-	8.1	-	-	底部	
	92	土師器	環	16	Ⅱ	浅黄橙	橙	横ナデ	横ナデ	-	6.6	-	-	底部	
	93	土師器	環	3Hンチ	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	-	6.0	-	-	底部	
	94	土師器	環	J11	表土	にぶい橙	にぶい橙	横ナデ	横ナデ	-	5.2	-	-	底部、煤付着	
	95	土師器	環	H 5	Ⅱ	にぶい黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	-	5.3	-	-	底部	
	96	土師器	環	16	Ic	浅黄	灰黄	横ナデ	横ナデ	-	5.0	-	-	底部	
	97	土師器	環	15	Ic	灰黄	灰	横ナデ	横ナデ	-	5.2	-	-	底部	
	98	土師器	環	L 5	Ⅱ	明黄褐	橙	横ナデ	横ナデ	-	7.1	-	-	底部	
	99	土師器	環	H 3	Ic	橙	にぶい黄	横ナデ	横ナデ	-	5.2	-	-	底部	
	35	100	土師器	碗	G 5	Ⅲ	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	13.4	-	-	-	口縁部
		101	土師器	碗	18	Ⅱ	橙	橙	横ナデ	横ナデ	14.3	-	-	-	口縁部、茶粒
102		土師器	碗	K 5	Ⅱ	にぶい黄橙	浅黄橙	横ナデ・ハウメ	横ナデ・ハウメ	13.0	-	-	-	口縁部	
103		土師器	碗	15	Ic	にぶい黄橙	浅黄	横ナデ	横ナデ	10.9	-	-	-	口縁部	
104		土師器	碗	H 4	Ib一括	にぶい黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	10.0	-	-	-	口縁部	
105		土師器	碗	H 4	Ib	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	8.8	-	-	-	口縁部	
106		土師器	碗	16	Ⅲ	浅黄橙	黄橙	横ナデ	横ナデ	15.8	-	-	-	口縁部、煤付着	
107		土師器	碗	L6・K5	Ⅱ・Ⅲ	橙	橙	横ナデ	横ナデ	15.0	-	-	-	口縁部	
108		土師器	碗	H 4	I上	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	14.4	-	-	-	口縁部	
109		土師器	碗	H 5	Ic	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	13.5	-	-	-	口縁部	
110		土師器	碗	G 4	I	にぶい橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	12.2	-	-	-	口縁部	
111		土師器	碗	110	Ⅲ一括	浅黄	浅黄	横ナデ	横ナデ	13.2	-	-	-	口縁部、煤付着	
112		土師器	碗	17	Ic	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	12.0	-	-	-	口縁部	
113		土師器	碗	H 4・5	Ib・Ic	にぶい橙	にぶい橙	横ナデ	横ナデ	11.8	-	-	-	口縁部、石英粒	
114		土師器	碗	H5南北I	Ⅱ	浅黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	9.8	-	-	-	口縁部	
115		土師器	碗	14	Ⅱ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	口縁部、煤付着	
116		土師器	碗	K 5	Ⅱ	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	15.6	-	-	-	口縁部、煤付着	
117		土師器	碗	17	Ⅱ	浅黄	浅黄	横ナデ	横ナデ	12.0	-	-	-	口縁部	
118		土師器	碗	H 5	Ⅲ	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	11.7	-	-	-	口縁部	
119		土師器	碗	K 5	Ⅱ	浅黄橙	灰白	横ナデ	横ナデ	14.2	-	-	-	口縁部	
120		土師器	碗	H 4	Ib一括	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	12.4	-	-	-	口縁部	
121		土師器	碗	G 4	Ⅲ	浅黄	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	11.6	-	-	-	口縁部	
122		土師器	碗	G 4	I	にぶい橙	にぶい橙	横ナデ	横ナデ	18.2	-	-	-	口縁部、煤付着	
123		土師器	碗	G 4	I	にぶい黄橙	にぶい黄	横ナデ	横ナデ	15.8	-	-	-	口縁部	
124		土師器	碗	H 4	Ib・c	にぶい橙	にぶい黄	横ナデ	横ナデ	14.7	-	-	-	口縁部	
125		土師器	碗	G 3	I	橙	にぶい黄	横ナデ	横ナデ	10.1	-	-	-	口縁部	
126		土師器	碗	G 4	Ⅲ	浅黄橙	浅黄	横ナデ	横ナデ	-	6.6	-	-	底部、煤付着	
127		土師器	碗	16	Ⅱ	黄橙	黄橙	横ナデ	横ナデ	-	7.0	-	-	底部、茶粒、摩滅	
128		土師器	碗	4Hンチ	-	浅黄橙	橙	横ナデ	横ナデ	-	7.2	-	-	底部、茶粒、摩滅	
129		土師器	碗	H 6	Ⅲ	浅黄	浅黄	横ナデ	横ナデ	-	7.1	-	-	底部	
130		土師器	碗	G 3	Ⅱ	浅黄橙	にぶい橙	横ナデ	横ナデ	-	7.6	-	-	底部	
131		土師器	碗	G 2	I下	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	-	6.6	-	-	底部、茶粒、摩滅	
132		土師器	碗	K 5	Ⅱ	浅黄	浅黄	横ナデ	横ナデ	-	6.3	-	-	底部、摩滅	
133		土師器	碗	-	-	浅黄	橙	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	底部、茶粒、摩滅	
134	土師器	碗	16	Ⅱ一括	浅黄橙	にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	底部		
135	土師器	碗	4Hンチ	-	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	底部、茶粒		
136	土師器	碗	16	Ⅲ	浅黄	浅黄	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	底部		
137	土師器	碗	H 6	Ⅱ一括	浅黄橙	灰白	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	底部、茶粒		
138	土師器	碗	H 5	Ic	にぶい橙	褐灰	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	底部、摩滅		
139	土師器	碗	-	Ⅲ一括	浅黄橙	浅黄	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	底部、摩滅		
36	140	土師器	甕	G5・H6	Ⅱ・Ⅲ	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ハズリ	22.4	-	-	-	口縁部・右稜・角隅石粒	
	141	土師器	甕	L 6	Ⅱ	にぶい黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ	20.4	-	-	-	口縁部・右稜・角隅石粒	
	142	土師器	甕	L 6	Ⅱ	暗褐	褐	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	19.2	-	-	-	口縁部・右稜・角隅・石粒	

第12表 古代遺物観察表(2)

神宮 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	層	外面色調	内面色調	調整		法量			備考			
								外面	内面	口径	底径	高台径		器高		
36	143	土師器	甕	H6	II	黄橙	明褐	ナデ	ナデ・ケズリ	23.8	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	144	土師器	甕	L6	I	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ・ケズリ	23.8	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	145	土師器	甕	H3	III	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ・ケズリ	24.0	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	146	土師器	甕	L6	III	暗褐	暗褐	ナデ	ナデ	34.8	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	147	土師器	甕	K5	II	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	21.6	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	148	土師器	甕	H6	II	黒	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	20.2	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	149	土師器	甕	H4	III	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ・ケズリ	27.1	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	150	土師器	甕	G6	Ia	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ・ケズリ	25.6	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	151	土師器	甕	L6	III	暗褐	褐	ナデ	ナデ・ケズリ	18.4	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	152	土師器	甕	H6	Ic-一括	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ	18.0	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	153	土師器	甕	L6	III	黄灰	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	27.7	-	-	-	口縁部・角閃石・磁石		
	154	土師器	甕	L6	III	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ・ケズリ	24.0	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石		
	155	土師器	甕	K5	II	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	25.0	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	156	土師器	甕	H5	Ib	橙	橙	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	24.7	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	157	土師器	甕	L5	II	褐	褐	ナデ	ナデ	-	9.0	-	-	底部・石莖・角閃石		
	158	土師器	甕	L6	II	明褐	黄褐	ナデ	ナデ・ケズリ	-	10.8	-	-	底部・石莖・角閃石		
	159	土師器	鉢	C4・産北T	-	橙	橙	ナデ	ナデ・ケズリ	20.0	-	-	-	口縁部・石莖・角閃石・磁石		
	40	187	須恵器	甕	H6・9・9・9・57	Ic・II	オリブ黒	浅黄	灰	平行タタキ	同心円当て具	24.0	-	-	口縁部～胴部	
		188	須恵器	甕	16・11	Ic	灰褐	黒	灰	平行タタキ	同心円当て具	15.2	-	-	口縁部	
189		須恵器	甕	10・10・11	II・III	灰	オリブ黒	長格子状タタキ	同心円当て具	-	-	-	-	頸部～胴部		
41	190	須恵器	甕	H5・6・4・5	Ib・c・II	明灰黄	黄灰	灰	平行タタキ	同心円当て具	-	-	-	頸部～胴部		
	191	須恵器	甕	G5・18・11	Ia・II・III	オリブ黒	灰黄褐	灰黄褐	平行タタキ	平行文当て具	-	-	-	胴部		
	192	須恵器	甕	H5・9・10・18	Ib・c・II	緑黒	黄灰	灰	平行タタキ	平行文当て具	-	-	-	胴部		
	193	須恵器	甕	3T・11	表土	灰	灰褐	長格子状タタキ	平行文当て具	-	-	-	-	胴部		
42	194	須恵器	甕	J6・15・4・5	Ic・II	明赤褐	灰黄褐	灰	平行タタキ	平行文当て具	-	-	-	胴部		
	195	須恵器	甕	G3・4・6・4・5	Ic・II・III	灰	灰白～灰	灰	平行タタキ	平行文当て具	-	-	-	胴部		
	196	須恵器	甕	H3・17・11	表土・II	褐灰～赤褐	灰～オリブ色	灰	平行タタキ	平行文当て具	-	-	-	胴部		
43	197	須恵器	甕	H5・6・16	Ic・II・III	灰	灰黄	灰	ナデ	ナデ	-	-	-	胴部		
	198	須恵器	甕	H5	II・III	にぶい黄	灰オリブ	灰	ナデ	ナデ	-	-	-	胴部		
	199	須恵器	甕	17	II	褐	灰	格子目タタキ	同心円当て具	-	-	-	-	胴部		
	200	須恵器	甕	H5・15・7	Ib・c	灰黄褐	灰黄	灰	平行タタキ	同心円当て具	-	-	-	胴部		
	201	須恵器	甕	H4・15・6	Ib・c	暗オリブ褐	にぶい黄	格子目タタキ	同心円当て具	-	-	-	-	胴部		
	202	須恵器	壺	3T・11	Ib・II	灰白～灰黄褐	黒褐	灰	平行タタキ	ナデ	14.8	-	-	-	口縁部～胴部	
44	203	須恵器	壺	G4・H4・16	Ic	灰白～灰	灰～黒褐	灰	平行タタキ	同心円当て具	25.6	-	-	-	口縁部	
	204	須恵器	壺	H4	Ia・表土	にぶい黄褐	褐灰	灰	平行タタキ	ナデ	-	-	-	-	胴部	
	205	須恵器	壺	111・12	表土一部・II	にぶい黄橙	灰黄	長格子状タタキ	ナデ	-	-	-	-	-	胴部	
	206	須恵器	壺	H3・4・14	Ib・c・II	暗青灰	暗青灰	ナデ	ナデ	-	-	-	-	-	胴部	
	207	須恵器	壺	前庭レンテ	-	灰黄褐～灰白色	暗灰黄	ナデ	ナデ	-	9.2	-	-	-	底部	
	208	須恵器	壺	G4・H5	Ib・c	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	-	16.4	-	-	-	底部・目取有	
	209	須恵器	壺	16	3・4T・II・III	暗赤～オリブ色	にぶい赤褐	灰	平行タタキ	ナデ	-	16.4	-	-	底部・自然釉	
45	210	須恵器	壺	16	II	灰	暗オリブ色	車輪文	ナデ	-	10.4	-	-	-	底部	
	211	須恵器	壺	H4	I	暗青灰	暗青灰	ナデ	ナデ	-	9.2	-	-	-	底部	
	212	須恵器	鉢	H3・6・6・8	Ic・II	橙	褐灰	ナデ	ナデ	17.8	-	-	-	-	口縁部～胴部	
	213	黒土器	甕	L6	III	にぶい黄橙	-	ナデ	ナデ・ミガキ	13.4	-	-	-	-	口縁部	
46	214	黒土器	甕	G3	III	浅黄	橙	ナデ	ナデ・内赤	-	-	7.3	-	-	胴部～底部	
	215	土師器	不明	H4・6	II・III	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	-	-	-	-	-	胴部	
	216	紡錘車	-	L6	II	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	-	-	-	-	-	黒色土器転用	
	217	紡錘車	-	K5	II	浅黄	にぶい黄	-	-	-	-	-	-	-	-	
	218	紡錘車	-	H6・産北T	I	浅黄橙	淡黄	-	-	-	-	-	-	-	-	茶粒
	219	紡錘車	-	D6	I一括	橙	橙	-	-	-	-	-	-	-	-	茶粒
	220	紡錘車	-	-	表土一括	橙	にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	221	河原土製成	-	16	I	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	-	-	-	-	-	-	-
	222	河原土製成	-	H5	II	にぶい橙	にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	223	粘土塊	-	前庭レンテ	-	浅黄橙	浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第7節 中世の調査

遺構は調査区全域で溝状遺構が6条検出された。遺物も多量に出土しており、調査区中央に集中している傾向にある。いずれも小破片が多く、接合も困難だったが、青磁などは多様な施文が見られ、貴重な資料になった。

1 遺構

調査区中央付近に多条の溝状遺構が検出された。いずれも斜面での検出で、ほぼ南北方向に流れている。H-6区とI-4・5区では近世の溝状遺構と直行し、切られている。これらの溝の中からは土師器・須恵器・青磁など古代から中世の遺物が出土しているもののはっきりした時期は不明である。ここでは、中世のものとしたが、近世以降の可能性もある。

溝状遺構 1

E～G-3～5区に跨り、北西から南東方向に流れる長さ30m、幅10m、深さ約0.3mの大溝である。検出した面の地形は斜面であるため、北東部から南西部にかけて、下りの傾斜になる。

溝内からは、土師器・瓦質土器・須恵器・青磁・鉄製品が計9点出土した。図化できたのは瓦質土器1点、青磁1点である。224は播鉢の口縁部片で、灰色を呈す。外面の口縁下部までは雑な斜方向のハケ目を、口縁部付近はナデによる調整の後、横の浅いハケ目を施す。内面は満遍なく雑に施された斜方向の掻き目の上から、逆の斜方向に5条単位の掻き目を入れる。口縁部は横ナデによる調整がみられる。225は青磁の底部である。器肉のかなり厚い、丸みを帯びた断面四角形の高台を持っている。全面施釉後、高台内面の釉を中心だけ残し、ドーナツ状に削りとり、一部に赤い発色が見受けられる。

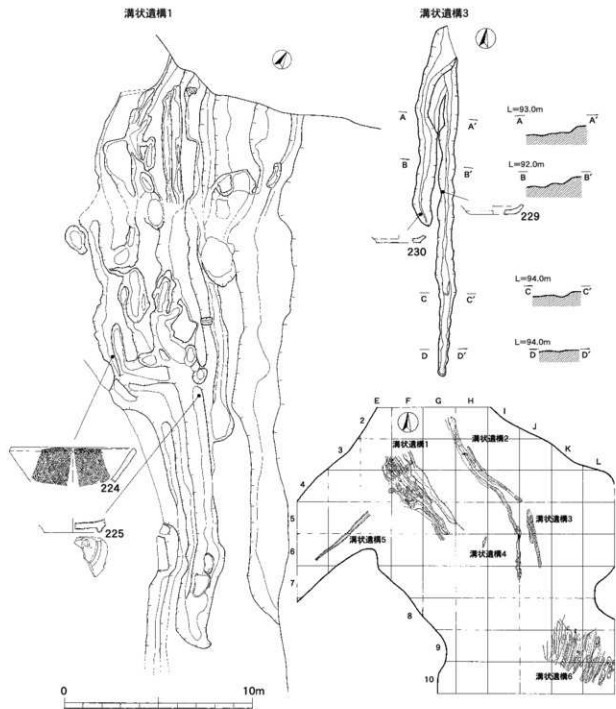
溝状遺構 2

G～J-2～7区に跨り、溝状遺構1に並行して走る二又状の溝である。長さ約50m、幅3m、深さ約1mで、Ⅲ層上面での検出である。溝中央部で近世の遺構と思われる溝状遺構7によって切られている。溝状遺構1同様、斜面での検出で、北東部から南西部に緩やかに傾斜する。また、南側から北にかけても全体的に下りの傾斜である。

溝内からは、計10点の遺物が出土し、そのなかの3点を図示する。226は成川式土器と思われる甕形土器の口縁部片である。復元口径約32cmで、「く」の字状に屈曲した部分に断面三角形の突帯を貼り付けている。突帯上部にはナデによる調整が見られ、突帯下部には左上から右下に下がる斜方向にハケメを施している。外面の色調は橙色で、内面は明黄褐色を呈す。胎土には石英や角閃石粒が多く見られ、焼成良好である。227は土師器の口縁部である。復元口径12cmで外上方に直状に立ち上がる。内面は黄橙色を呈し、外面には煤の付着が確認できる。器壁は薄く、胎土には茶色石粒を含む。228は土師器の胴部片である。にぶい黄橙色を呈し、焼成が甘く、軟質である。体部に丸味をもち、内湾気味に立ち上がる。体部外面にナデ調整時についたと思われる段を有す。

溝状遺構 3

J-5・6区で溝状遺構2と並行して検出された。長さ約20m、深さは20cm程度で浅い。溝状遺構2同様、山の斜面での検出のため、北東から南西にかけて僅かに傾斜する。また、北に向けて緩やかに傾斜するが、溝中央部で極端に落ち込む。

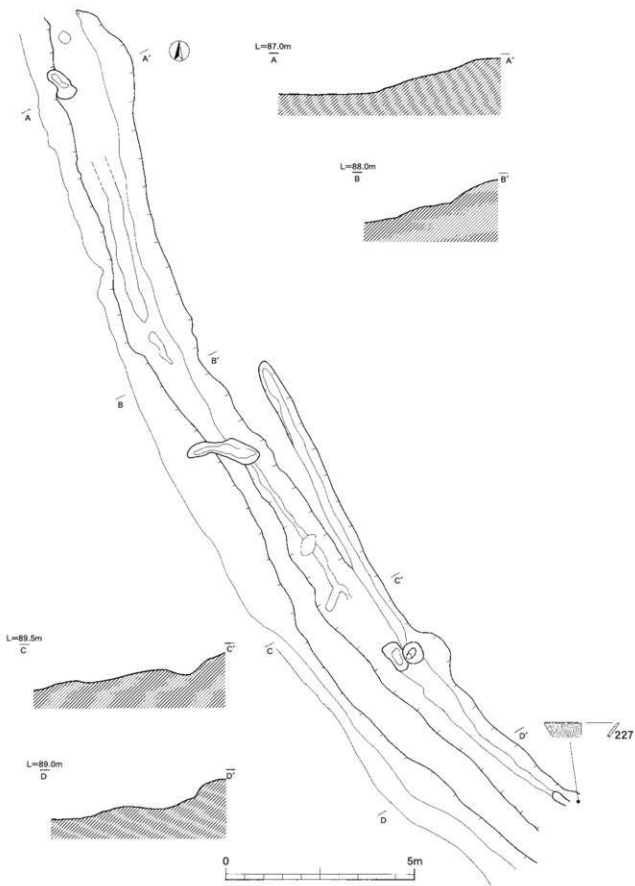


第47図 溝状遺構1・3

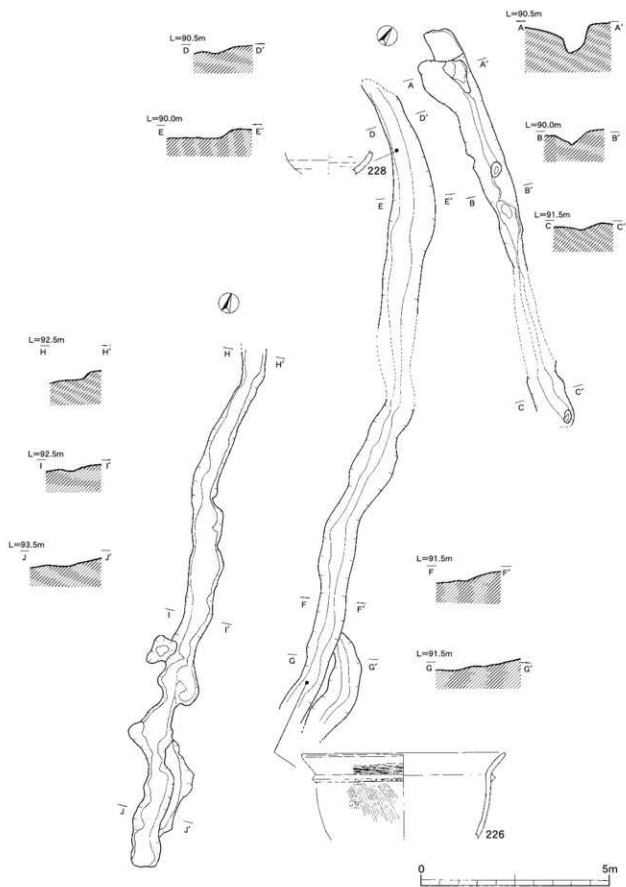
遺構からは9点の遺物が出土した。その中の2点を図示する。229・230の両方とも土師器杯の底部で、糸切り痕が残る。いずれも明黄褐色を呈し、焼成は良好である。また、復元底径は7cmで、外上方に立ち上がる体部を僅かに残す。229は230より丸味を帯びる。

溝状遺構4

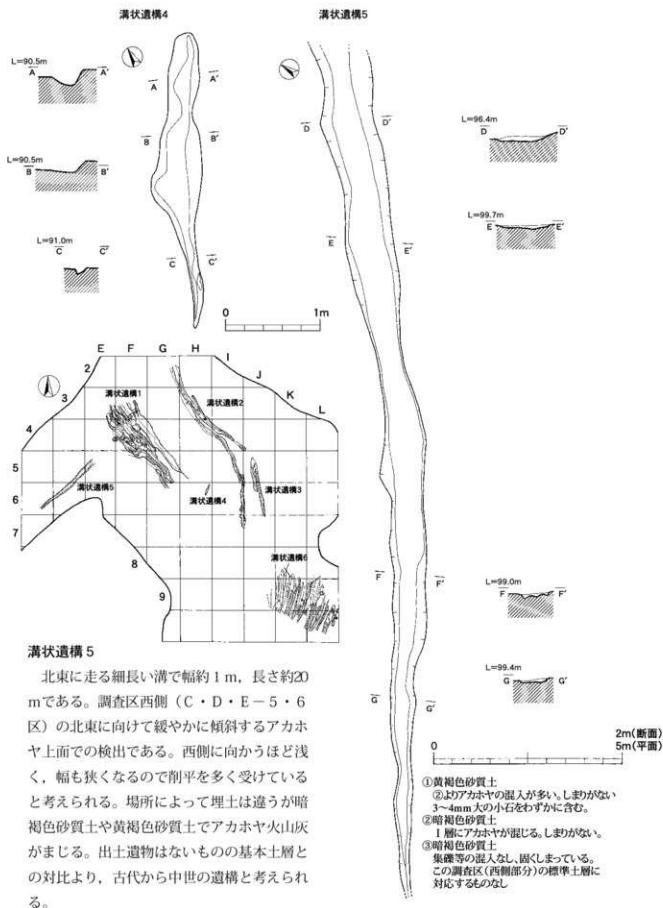
H-6区、Ⅲ層上面で検出された短い溝状遺構である。長さ約4m、深さ15cm程である。遺構内からは土師器が2点出土したが、細片のため、図化には至らなかった。



第48図 溝状遺構 2 上



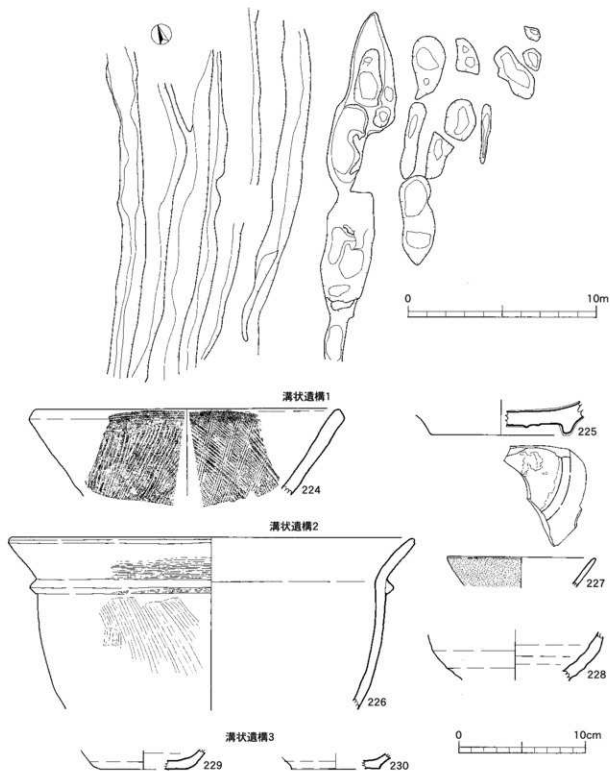
第49図 溝状遺構 2下



第50図 溝状遺構4・5

溝状遺構 6

調査区南側，L-10区において東から西への下りの傾斜になる斜面で検出された。南北に走り、長さ約10mである。幾条にも連なる溝の東側には、窪み状の落ち込みが連続する溝状の遺構が隣接する。遺構の北側と南側の両端は消失し、その先は不明である。遺構内からの出土遺物はない。



第51図 溝状遺構 6 及び出土遺物

2 遺物

多量の遺物が出土しており、これらは大きく土師器・瓦質土器・陶器・磁器・土製品・石製品・古銭に分けられる。以下、種別・器種ごとに記す。

(1) 土師器

土師器は調査区中央部を中心に多量に出土した。ただ、小破片のため、図化できたのは僅かである。器種は坏・皿がある。ただ、坏か皿か判別できないものもあった。底部には糸切り痕が残る。

坏

231～258は坏である。いずれも底径と口径の差があまりないタイプのものである。口縁部から底部(231～242)、口縁部(243～248)、底部(249～258)である。

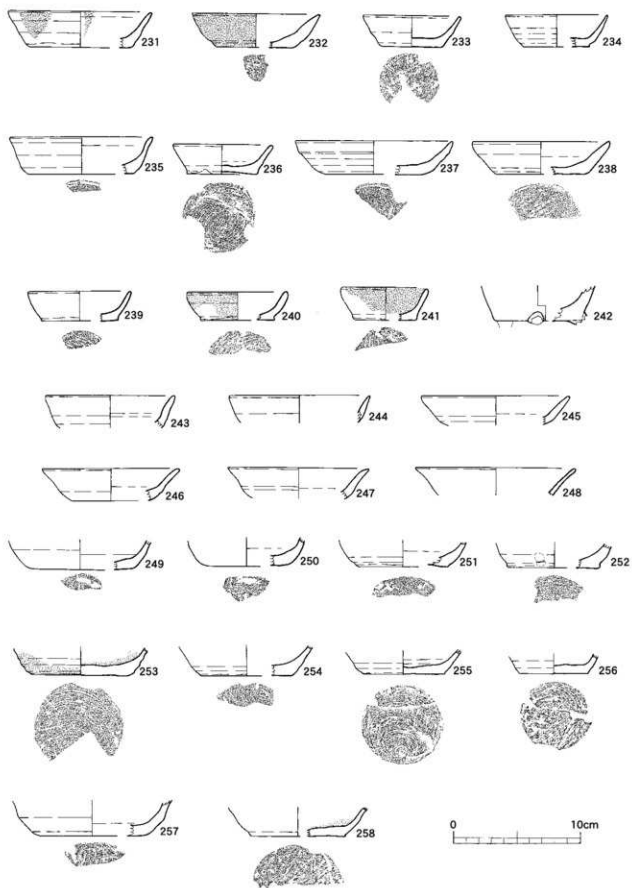
口縁部から底部まで残るもの(231～242)、直行するもの(231～234)、外反するもの(235・236)、内弯するもの(237～241)、特殊なもの(242)の4種に分類した。

231は復元口径11.5cmで胎土に茶色石粒を多く含む。器面は横ナデによって調整される。232の口縁部は極端に細くなり、尖った感を受ける。胎土に石英粒が多く見られる。233は復元口径7.6cmの小さい坏である。胎土には角閃石の微粒子と茶色石粒が多く見受けられ、器面に煤の付着が確認できる。235は復元口径11.4cmで、硬く焼き締まっており、須恵質土師器に似た色合いである。体部中位から外側に薄くつまみ上げる。内外面ともにざらつきを感じる。236は復元口径約8cmで橙色を呈す。底部は中央部が僅かに浮き上がる。また、底部端が上にめくれ上がっており、糸切りを行う際にできたものと思われる。237は淡橙色を呈し、体部に丸みをもつ。焼成は甘く、軟質である。体部はナデによる調整がなされ、強い稜を2段有す。239～241は法量が似ており、底部には糸切り離された際についたと思われるめくれが確認できる。241は内外面ともに濃い煤が付着している。特に外面の煤は口縁部から底部に垂れたように付着しており、灯火器としての使用がうかがえる。242は三足坏である。脚は1つしか残存しておらず、ヘラ切りの底部に脚がつけられている。その脚も途中から欠損しており、形状は不明である。器肉が厚く、復元底径約7.5cmを測る。浅黄色を呈し、焼成はやや甘く、軟質である。

口縁部のみのもの(243～248)は、直行するもの(243～245)と外反するもの(246～248)の2つに分けられる。

243と244は深みがあるが、245は直線的に外上方に立ち上がり、前者に比べて浅い。前者は胎土に砂粒を多く含み、両方とも横ナデによる調整がなされる。245は復元口径約12cmで橙色を呈す。焼成はやや甘く、粉質である。246～248は腰部から口縁部にかけて緩やかに外反するものである。246と247は法量、色調、焼成が酷似している。復元口径約10.5cmで橙色を呈し、硬く焼き締まっている。248は器壁が薄く、体部中位辺りから口縁部にかけて大きく外反する。器面の摩滅が進み、調整を不明瞭にしている。胎土には1mm弱の茶色石粒が見受けられる。

底部(249～258)は、立ち上がりの残存部から坏であると判断する。器形により3種に細分する。内弯気味に立ち上がるもの(249～252)、直状に立ち上がるもの(253～256)、外反気味に立ち上がるもの(257・258)である。249・250ともに摩滅が著しく、調整の観察は不能である。252の体部下半には、糸切り離した後、回転軸軸台から手ではがす際についたと思われる指先の痕が残る。また、



第52図 中世 土師器(1)

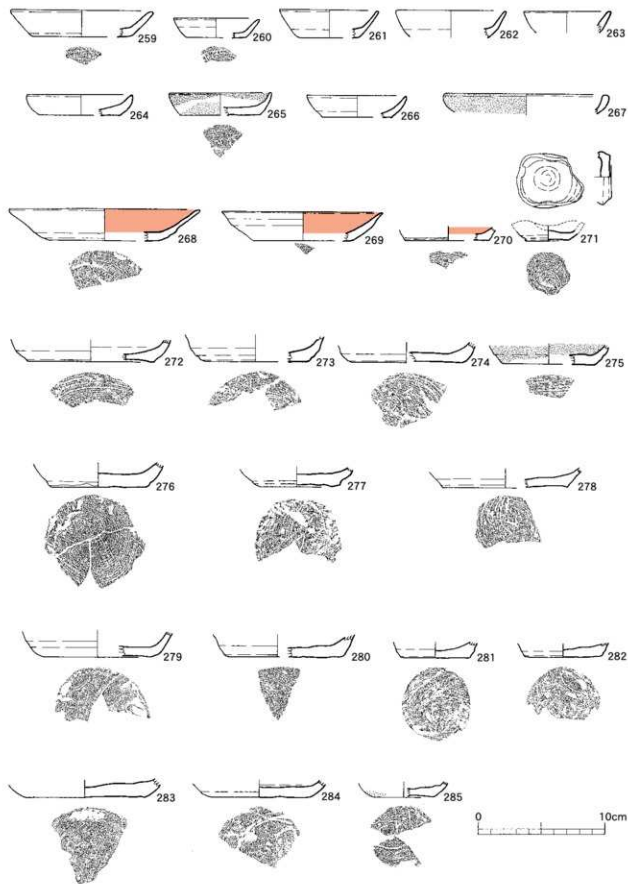
指痕の奥に爪痕のような痕跡も確認できる。指痕は長径1cm、深さ4mmである。橙色を呈し、復元底径7cmである。253は底径7cmで、内外面ともに煤付着を確認する。ただ、欠け部分も黒色を呈するため、2次的に加熱を受けた可能性も考えられる。立ち上がり部分にはヘラによる削り痕が残る。254は体部下位をヘラ削りで仕上げ、浅い屈曲部を有す。上方に薄くつまみ上げる。内面はナデによる調整が行われる。255はにぶい黄橙色を呈し、底径が6.5cmである。内面は指によるナデで調整され、胎土に角閃石粒や茶色石粒が多く見られる。256は底径約5.5cmで茶色石粒を含む胎土を硬く焼成しており、にぶい黄橙色を呈す。257は復元底径9cmで灰黄色を呈す。胎土には茶色石粒が多く見られ、焼成は良好である。258の底部内面に煤付着が確認できる。茶色石粒と石英の微粒子が底部外面と器面に見受けられる。焼成は良好である。

皿 (259~271)

皿を4類に分類する。口縁部が直行するもの(259~263)、内弯するもの(264~267)、赤色土器(268~270)、耳皿(271)である。259・260と262・263は法量は違うものの傾きが似る。前者は胎土に砂粒を含み、橙色を呈す。262は体部に丸味を帯び、体部中位付近で段を有し、直線的に立ち上がる。264~266は法量が似る。265は内外面に煤が付着し、口唇部付近は特に濃くなる。灯明皿である可能性が高い。底径と口径の差があまりなく、復元底径約5.5cmを呈す。267は口縁部の細片である。口唇部が肥厚し、丸味を帯びる。火熱を受け、外面に濃い煤が固着する。268~270は赤色土器の皿である。いずれも内面に赤色顔料を塗布し、底面には糸切り痕が残る。268は口径約15cm、底径9cm、器高2.5cmである。広い見込みをもち、底部から直線的に外上方へ立ち上がる。立ち上がり直後にナデ調整時の浅い段を有す。見込み部分にはナデ押圧痕を有す。胎土は緻密で細かく、焼成は良好で硬い。269は小破片である。内外面とも丁寧にナデ調整され、胎土には茶色石粒が見受けられる。口唇部手前で薄くつまみ上げられ、急に細くなる。271は耳皿で上部付近を欠失している。皿部は径3.5cmほどの円形につくられるが、対向する2か所を押すように折り曲げ、耳皿としている。器高1.5cmである。底部端部に段を有し、内外面ともにナデによる調整が行われている。緻密な胎土を用い、硬く焼成し、浅黄橙色を呈す。

器種不明 (272~285)

皿か坏か不明のものである。内弯気味に立ち上がるもの(272~277)、外上方に立ち上がるもの(278)、直状に立ち上がるもの(279~285)に分けられる。272~274は法量が似ており、復元底径10cm弱ある。若干摩滅しているものの、立ち上がり部分にヘラによる調整痕が残る。275は内外面の体部に煤が付着する。灯火器であると考えられる。277は浅黄色を呈し、1~2mm大の茶色石粒が目立つ。278は橙色を呈し、復元底径約10cmである。底部に歪みをもつが、須臾質に焼成され、硬く焼き締まる。底部外面の胎土中には4mm大の軽石粒が含まれる。279~282の法量は違うが、傾きは大体似ており、283~285は前者より開き気味で立ち上がる。279は焼成良好であるのに対し、280は軟質である。281は体部に丸味を帯び、立ち上がる。内面見込み部分には指頭圧痕が残る。282の底部付近は火熱を受けたため部分的に赤化している。器面の立ち上がり部分に僅かな横ナデの調整が残る。内面は指でナデ調整を行い、仕上げている。283~285は胎土は精良で、焼成良好である。いずれも内底部はナデによる仕上げと思われる。



第53図 中世 土師器(2)

第13表 土師器観察表

神工 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	外面色調	内面色調	調 整		法 量				備 考
							外面	内面	口径	底径	高台径	器高	
52	231	環	J6	1b	浅黄	浅黄	横ナデ	横ナデ	11.4	8.1	—	2.8	口縁~底部(系切り)
	232	環	G5	1a	灰褐	灰褐	横ナデ	横ナデ	10.0	6.0	—	2.6	口縁~底部(系切り)
	233	環	G5	1a	にぶい・橙	にぶい・橙	横ナデ	横ナデ	7.5	4.8	—	2.5	口縁~底部(系切り)
	234	環	G4	1b	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	7.9	5.2	—	2.5	口縁~底部(系切り)
	235	環	15	1c	橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	11.1	8.2	—	3.0	口縁~底部(系切り)
	236	環	G5	1c	橙	橙	横ナデ	横ナデ	7.8	5.5	—	2.4	口縁~底部(系切り)
	237	環	H4	1a	淡橙	淡橙	横ナデ	横ナデ	12.4	7.8	—	2.7	口縁~底部(系切り)
	238	環	H5	1c	橙	橙	横ナデ	横ナデ	10.7	6.8	—	2.6	口縁~底部(系切り)
	239	環	H5	1c	明赤褐	明赤褐	横ナデ	横ナデ	8.2	6.1	—	2.4	口縁~底部(系切り)
	240	環	南北1シ	—	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	7.7	5.8	—	2.3	口縁~底部(系切り)
	241	環	H4	1c	浅黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	6.8	4.4	—	2.6	口縁~底部(系切り)
	242	三足環	15	1a	灰白	浅黄	ナデ	ナデ	—	—	—	—	底部
	243	環	南北1シ	—	橙	橙	横ナデ	横ナデ	10.2	—	—	—	口縁部
	244	環	G4	1b	浅黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	11.2	—	—	—	口縁部
	245	環	南北1シ	—	橙	橙	横ナデ	横ナデ	11.8	—	—	—	口縁部
	246	環	G4	1b	にぶい・橙	にぶい・橙	横ナデ	横ナデ	10.6	5.8	—	2.6	口縁部
	247	環	G4	1	橙	橙	横ナデ	横ナデ	11.5	—	—	—	口縁部
	248	環	16	1c	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	12.1	—	—	—	口縁部
	249	環	16	1c一括	にぶい・橙	にぶい・褐	横ナデ	横ナデ	—	8.2	—	—	底部(系切り)
	250	環	G4	1a	にぶい・橙	にぶい・橙	横ナデ	横ナデ	—	5.6	—	—	底部(系切り)
	251	環	H6	II	にぶい・橙	にぶい・橙	横ナデ	横ナデ	—	7.2	—	—	底部(系切り)
	252	環	H4	II	にぶい・橙	橙	横ナデ	横ナデ	—	7.2	—	—	底部(系切り)
	253	環	16	1c	橙	橙	横ナデ	横ナデ	—	7.2	—	—	底部(系切り)
	254	環	F3	I	にぶい・橙	にぶい・橙	横ナデ	横ナデ	—	7.2	—	—	底部(系切り)
255	環	H3・F3・G3	I・I上・1c	橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	—	6.6	—	—	底部(系切り)	
256	環	H4	1b	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	—	5.4	—	—	底部(系切り)	
257	環	4トレンチ	1	灰黄	灰黄	横ナデ	横ナデ	—	8.0	—	—	欠片	
258	環	G4	1a	黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	—	7.3	—	—	底部(系切り)	
259	皿	G4	1b	橙	橙	横ナデ	横ナデ	11.2	7.2	—	2.1	口縁~底部(系切り)	
260	皿	H4	1b	明赤褐	明赤褐	横ナデ	横ナデ	6.8	4.6	—	1.5	口縁~底部(系切り)	
261	皿	H5	1a・1b	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	7.8	4.4	—	2.2	口縁~底部(系切り)	
262	皿	H5	1b	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	8.7	5.8	—	—	口縁~底部(系切り)	
263	皿	H5	II	橙	橙	横ナデ	横ナデ	6.8	—	—	—	口縁部	
264	皿	F3	I	にぶい・橙	にぶい・橙	横ナデ	横ナデ	8.0	6.4	—	1.7	口縁~底部(系切り)	
265	皿	G4	1b	橙	橙	横ナデ	横ナデ	8.0	6.0	—	1.8	口縁~底部(系切り)	
266	皿	18	1c	にぶい・橙	にぶい・橙	横ナデ	横ナデ	7.8	5.6	—	1.8	口縁~底部(系切り)	
267	皿	H5	I	黒色	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	12.8	—	—	—	口縁部	
268	赤土器~皿	111	表土	にぶい・橙	にぶい・橙	ナデ	ナデ	15.0	8.8	—	2.5	口縁~底部	
269	赤土器~皿	G4	1b一括	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	ナデ	ナデ	12.4	7.8	—	2.3	口縁~底部	
270	赤土器~皿	G5	1a	にぶい・橙	橙	ナデ	ナデ	—	6.8	—	—	底部	
271	耳皿	E5	—	浅黄橙	浅黄橙	ナデ・胎痕	ナデ	—	3.4	—	—	口縁~底部	
272	環か皿	15	1c	にぶい・褐	にぶい・橙	横ナデ	横ナデ	—	10.0	—	—	底部(系切り)	
273	環か皿	J5	1b	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	—	7.8	—	—	底部(系切り)	
274	環か皿	F3	1a	橙	にぶい・橙	横ナデ	横ナデ	—	8.8	—	—	底部(系切り)	
275	環か皿	G3	1b	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	—	7.4	—	—	底部(系切り)	
276	環か皿	G2	I	黄橙	黄橙	横ナデ	横ナデ	—	7.4	—	—	底部(系切り)	
277	環か皿	H3・G3	Ib・I下	橙	橙	横ナデ	横ナデ	—	5.6	—	—	底部(系切り)	
278	環か皿	G4	1	橙	橙	横ナデ	横ナデ	—	10.0	—	—	底部(系切り)	
279	環か皿	G5・H5	1	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	—	8.4	—	—	底部(系切り)	
280	環か皿	G3	I	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	—	10.0	—	—	底部(系切り)	
281	環か皿	G5	I	明黄褐色	明黄褐色	横ナデ	横ナデ	—	5.4	—	—	底部(系切り)	
282	環か皿	H5	1a	橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	—	4.8	—	—	底部(系切り)	
283	環か皿	17	表土	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	横ナデ	横ナデ	—	9.6	—	—	底部(系切り)	
284	環か皿	F4	1a	浅黄橙	浅黄橙	横ナデ	横ナデ	—	7.8	—	—	底部(系切り)	
285	環か皿	G4・G3	I一括	橙	橙	横ナデ	横ナデ	—	5.0	—	—	底部(系切り)	

(2) 瓦質土器

瓦質土器は破片が約20点出土しているが、出土区や層はまちまちである。選別した8点を図示する。器種は壺、搦鉢、火舎がある。

壺 (286)

286は復元口径12.8cmの壺の口縁部である。直行する口縁部から肩部が外へ強く張る形態である。外面は縦方向のハケナデを施した後、その上から更に横方向のハケナデで調整している。内面は横方向のみのハケナデ調整である。灰色を呈し、陶器質で良好な焼きがなされている。

搦鉢 (287~292)

287~289は口縁部、290~292は底部である。287は浅黄色を呈し、口縁部下が「く」の字状になる。内面に単位6条の掻き目を施し、煤付着も確認できる。外面はナデ調整がされ、所々に指圧痕を残す。288は復元口径約29cmの大きな搦鉢で灰色を呈す。内面には単位6条の掻き目が下から上に施されている。上部の掻き目は浅くなり、使い込んだ様子がうかがえる。289の内面にはナデ調整の上に掻き目を施した痕跡が残る。ただ、小破片のため、掻き目の本数は不明である。

290は胎土、焼成など287と酷似しているが、掻き目により別個体と判断する。復元底径は14cmで、にぶい黄橙色を呈す。焼成は良好で硬く焼締まっている。底から上へ単位8条の掻き目が施されている。291は小破片のため、径の信頼性は低いが、復元底径約12cmである。灰色を呈し、胎土に軽石の微粒子が多くみられる。立ち上がりは緩やかで大きく開く器形である。292は摩滅が激しく、掻き目が判然としない。

火舎 (293・294)

293・294は円筒形を呈する同一個体の火舎と思われる。にぶい黄橙色を呈し、軟質で焼成が甘い。器壁が厚く、外反する口縁部を薄くつまみ上げる。摩滅が激しいが、内面にケズリ痕が確認できる。

(3) 陶器

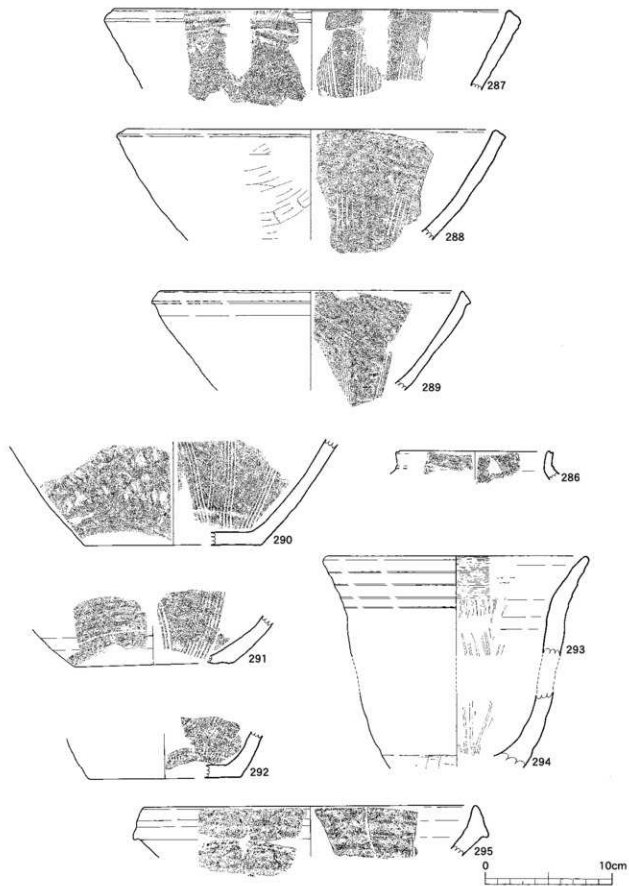
陶器は1点のみの出土である。295は備前焼搦鉢の口縁部片である。焼成は、非常に良好で硬く焼締まり、灰色を呈す。胎土は緻密で軽石の微粒子が混入する。

第14表 瓦質土器観察表

神宮 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	外面色調	内面色調	調 整		法 量				備 考
							外面	内面	口径	底径	高台径	器高	
54	286	壺	H 5	I a	灰	灰	ナデ	ナデ	11.5	—	—	—	口縁
	287	搦鉢	G 4	I b	にぶい黄	浅黄	ナデ	櫛目	31.0	—	—	—	口縁
	288	搦鉢	I 6	I c	灰	灰	ナデ・削り	櫛目	29.2	—	—	—	口縁
	289	搦鉢	II 2	II	灰オリーブ	灰オリーブ	ナデ	櫛目	24.0	—	—	—	口縁
	290	搦鉢	G 4	I b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ・削り	櫛目	—	14.0	—	—	底部
	291	搦鉢	F 4・H 4	I b・I 上	灰	灰	ナデ	櫛目	—	12.2	—	—	底部
	292	搦鉢	F 4・G 2	I b	灰	灰白	ナデ	櫛目	—	11.0	—	—	底部
	293	火舎	L 6	II	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ	27.6	—	—	—	口縁部・底面・側面・軽石混
294	火舎	L 6	II	浅黄橙	浅黄橙	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	—	—	—	—	口縁部・側面・軽石混	

第15表 陶器観察表

神宮 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	外面色調	内面色調	調 整		法 量				備 考
							外面	内面	口径	底径	高台径	器高	
54	295	搦鉢	L 6・I 6	I・I c	黒褐	灰	ナデ	ナデ	26.2	—	—	—	口縁・備前焼



第54図 瓦質土器・陶器

(4) 青磁

本遺跡出土の青磁には同安窯系と龍泉窯系がみられた。それらを器種や形態・文様により分類する。

① 同安窯系青磁

器種は碗と皿がある。

碗 (296)

296は体部から口縁部にかけてやや内弯気味に立ち上がっている碗である。軸は透明なガラス質で光沢があり、体部外面に幅広の粗い縦位の櫛目文を施している。

皿 (297・298)

297・298は平底皿である。298は、平らな広い見込から外反気味の短い体部が立ち上がり斜行する。全面施軸後、底部外面の中央部の軸を環状に掻き取ってある。内面には篋による文様とジグザグ状の櫛点描文が見られる。

② 龍泉窯系青磁

器種は碗、杯、皿、盤、壺がある。

碗

碗Ⅰ類 (299～305)

鎚蓮弁文碗である。305は体部外面に広い蓮弁文が見られ、立体的で稜がはっきりしている。299～304は幅広の蓮弁を施しているが稜がはっきりしない。

碗Ⅱ類 (306)

大きな粗略な蓮弁を有する碗である。器形は丸みを帯び、器壁は厚みを帯びている。外面には大きな片切りの蓮弁文を有する。

碗Ⅲ類 (307～315)

片切彫や線による線描蓮弁文を有する碗である。体部は丸みを帯び、やや内弯気味に外上方へ立ち上がっている。文様の特徴により3種に細分する。

Ⅲ-A類 (307～309)

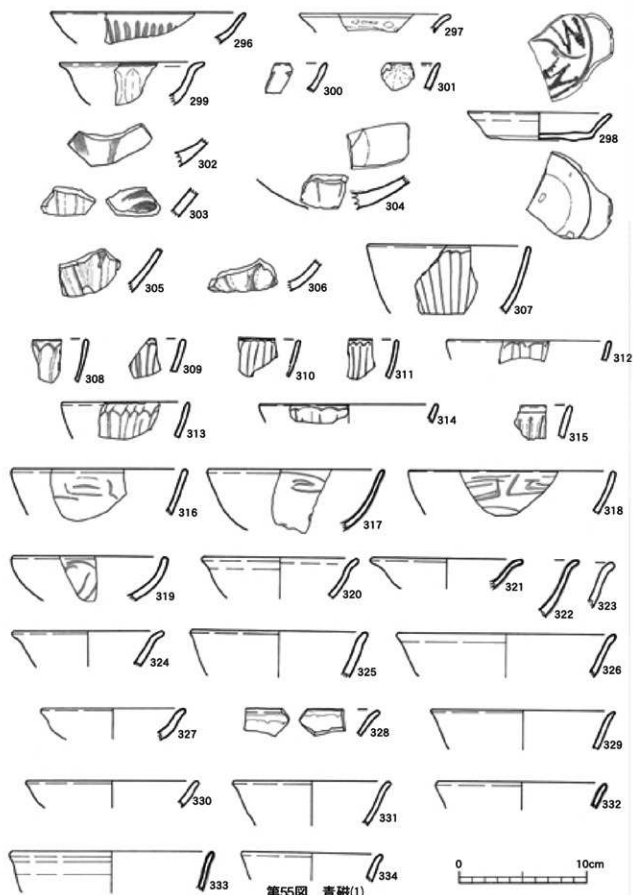
略化された線描の縦線と蓮弁上部の波状線である剣頭が蓮弁の単位を意識して施文してある。片切彫あるいは丸彫と篋先等による細線を組み合わせて蓮弁文を表現している。307はくすんだオリープ色を呈し、貫入を多く有する。309は小破片ではあるが、上端部の波が一定を保っているのが分かる。

Ⅲ-B類 (310～313)

Ⅲ-A類とは異なり、剣頭が蓮弁の単位としての意識を失っている。310～312は篋先等による細線により施文されている。いずれも波状の線は雑で縦線の間隔はまちまちである。311は磁胎が白っぽく、軸は微かに青みのある淡灰黄色である。

Ⅲ-C類 (314・315)

蓮弁上部の線が緩やかな雑な波状もしくは一条の沈線になるタイプである。314は軸層がかなり薄く、他の青磁に比べてほとんど光沢がない。また、磁胎は灰褐色に薄く鈍い茶が混じったような色調である。



第55図 青磁(1)

碗Ⅳ類 (316~319)

雷文帯碗である。体部が丸みを帯び、若干内湾している。外面口縁部に方形を重ねた雷文をめぐらしている。316~318の雷文は崩れており、319の文様は判然としない。317~319の胴部には大きなうすらとした線描きの蓮弁も見受けられる。316~318には同一個体と思われる口縁部と胴部が数点あったが、小破片であったため図示しなかった。

碗Ⅴ類 (320~339)

内外面無文で外反している碗である。器形は体部が直に立ち上がり、口縁部が短く、「く」の字状に屈曲している。320~328は口縁部が鋭く外反する。なかでも321は口縁部が短く屈折し、上端部は平坦な面をなす。329~334の口縁部は僅かに外反し、335~339は口縁部を玉縁状に仕上げているのが特徴である。

碗Ⅵ類 (340~344)

無文の直口碗である。色調はまちまちだが、340は灰色味を帯びた磁胎で釉層は薄く、内外面ともに気泡を多く含む。344は釉に若干の気泡を含み、他に比べ器壁が厚い。341~343の口縁部には一条もしくは二条の沈線文が見受けられる。

碗Ⅶ類 (345~349)

大碗である。345~347の内外面には凹凸のある判然としない連弁文が施されている。348は黄味の強いオリーブ色を帯びた釉がかかり、内面見込みには型押し草花文が施されている。349の体部はかなりの丸みを帯び、内湾気味に立ち上がり、外面には大きな片切りの連弁文を有している。その中央部には調整のナデが横一直線に二条の細い沈線文状に表れている。

底部 (350~357)

龍泉窯系青磁の底部を一括したものである。高台と施釉の状態により4つに細分した。

底部Ⅰ類 (350)

脚長の高台をもち、全面施釉後に畳付きの釉を削っているものである。釉は青緑色を呈している。体部の立ち上がりに段を有し、丸みを持ち立ち上がる。

底部Ⅱ類 (351~355)

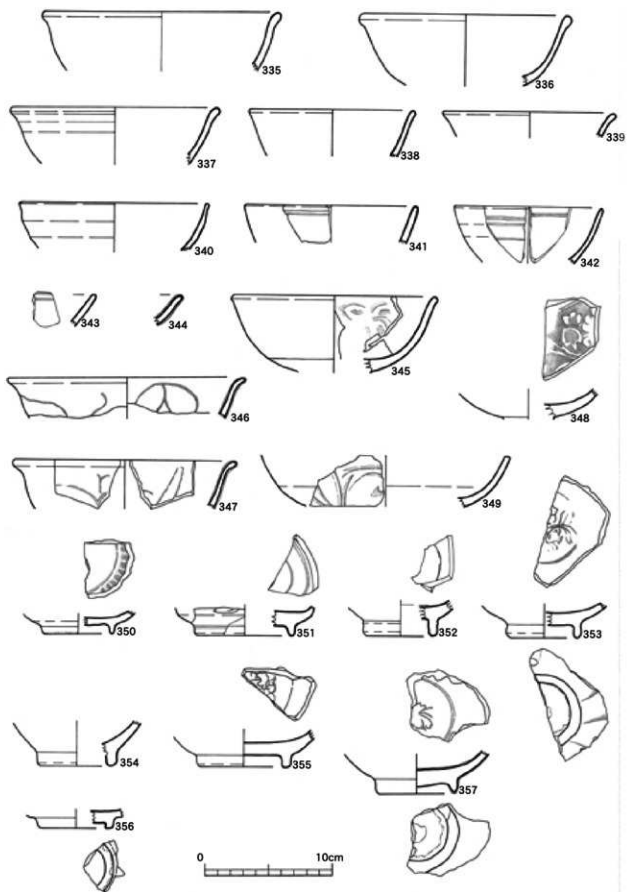
高台が断面四角形を呈し、いずれも全面施釉後、高台内の釉を環状に掻き取ってある。その露胎部分が赤く発色している。体部下位はどれも丸味を帯びている。ただ、351は体部下位を「く」の字状に屈曲させ立ち上がり、外面には判然としない文様を施してある。内面見込みには一条の沈線をめぐらしている。353の内面見込みには草花文のスタンプがみられ、体部外面には片切りの連弁文が施されてある。355は貫入を多く含むため、はっきりとはしないが、内面見込みに判然としない文様が見受けられる。

底部Ⅲ類 (356)

高台が断面四角形を呈し、畳付きと高台内面に釉がかからないものである。釉調は灰褐色で貫入を多く含む。

底部Ⅳ類 (357)

高台が丸みを帯び、全面に施釉後、高台内の釉を環状に掻き取ってある。内面見込みにはっきりとはしないが353と似た草花文のスタンプが施されてある。



第56图 青磁(2)

坏 (358~360)

坏Ⅰ類 (358・359)

口縁部が鋭く外反し、上端は平坦面をなしている。釉は軽やかすんだ青緑色を呈している。358の体部は丸味を持ち、外面には幅広と幅の狭い蓮弁で構成された片切りの粗略な文様が施されている。359は幅広と細線による蓮弁文が施されている。

坏Ⅱ類 (360)

360は底部であるが、体部が丸味を持ち、内弯気味に立ち上がっているため、坏と考えられる。体部外面に幅広の蓮弁文が見受けられる。

皿 (361~371)

器形により3つに分類した。

皿Ⅰ類 (361~364)

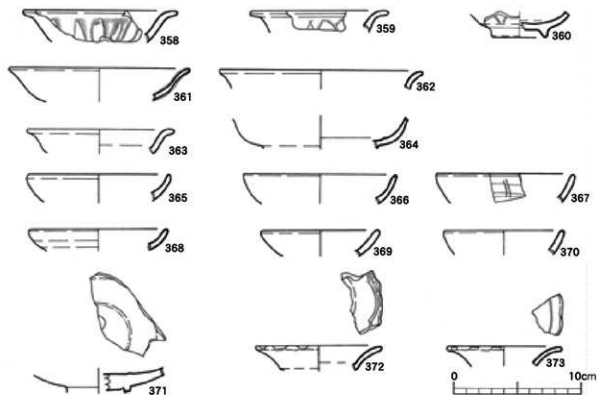
外反する皿である。361~363は口縁端部が短く屈曲している。364は腰部に丸味を持ち、口縁端部が短く外反するタイプである。

皿Ⅱ類 (365~371)

内弯する皿である。浅いものと深みを持つものに分かれる。369の口縁部は肥厚する。

皿Ⅲ類 (372・373)

高台付稜花皿である。口縁端部に輪花を有する。体部に丸味を持ち、短い体部が外反気味に立ち上がる。372は内面の周縁に沿い、2条の沈線文をめぐらしている。釉は暗いオリーブ色で細かい気泡が目立つ。また、判然としないが、内側面に線描きの花文様も施している。373は内面の口縁下部に1条の沈線文をめぐらしている。



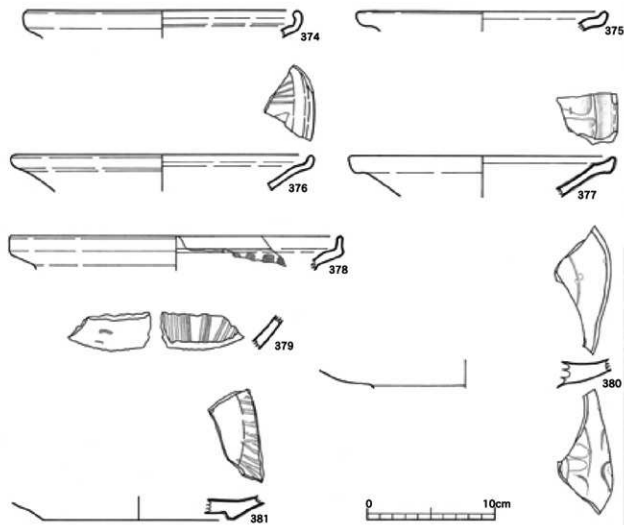
第57図 青磁(3)

盤 (374~381)

374~378は口縁部, 379・380は胴部, 381は底部である。374~378はいずれも鈿縁盤である。広い見込みをもち、口縁端部を横に長く屈折させ、端部をつまみ上げているのが特徴である。375~377は底部から斜めに直線的に立ち上がり、口縁部上位で約1cm程度、平坦をなし、口縁端部をほぼ直角に短くつまみ上げている。374の口縁端部のつまみ上げは他に比べて長めである。また、内面の屈曲部が茶色く発色している。いずれも磁胎は灰白色を呈し、焼成は良好である。377は小破片ではあるが、口径約21cmの大きい盤である。平坦をなす手前部分に強い稜をなす。内面に微かではあるが、文様を確認できる。磁胎は精良緻密で黒色の微粒子を含む。378の外面には幅1cm弱の凹線が規則的に施されている。

379は胴部片であるが、内面には篋による2条の縦線が等間隔に施されている。軸は厚く、青緑色を呈し、内外面ともに貫入を多く含む。380は底部に近い部分である。器壁は厚く、磁胎は緻密である。内面見込みに1条の沈線文と外面に判然としないが文様が見受けられる。

381は上げ底風の円盤高台をなす。内面には篋による縦線が無作為に施されている。底部内面の軸が環状に掻き取られている。



第58図 青磁(4)

壺 (382・383)

382は頸部上方が開き気味に上がり、口縁部が緩やかに屈折し、上面が平坦をなしている。口唇部だけ軸が薄くなっており、他の部分と色調が異なる。383は頸部である。内面に施釉された痕が残っている。

その他 (384・385)

この類は判別不能のため、その他としてまとめた。384は直状に立ち上がり、外反する。内面には篋による縦線が口唇部から下に施されており、外面にも線刻がなされている。385は内面と外面の色調が全く異なっており、内面には凹凸のある判然としない文様を有する。



第59図 青磁(5)

第16表 青磁観察表(1)

神宮 番号	番号	種別	器種	出土区	層	胎土	色 調		施 釉		法量 (cm)			備 考
							外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	
55	296	青磁	碗	K 5	II	灰白	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	15.0	—	—	同安窯系
	297	青磁	皿	G 4	I b	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	11.5	—	—	〃
	298	青磁	皿	3トシチ	—	灰	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	11.1	8.3	2.2	〃
	299	青磁	碗	L 6	I c	浅黄+灰	灰白	浅黄	×	×	11.2	—	—	〃
	300	青磁	碗	G 4	I b	灰	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	—	—	—	〃
	301	青磁	碗	H 4	I a	灰白	オリーブ灰	オリーブ灰	○	○	—	—	—	〃
	302	青磁	碗	G 5	—	灰白	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	—	—	—	〃
	303	青磁	碗	H 5	I c	灰	オリーブ灰	オリーブ灰	○	○	—	—	—	〃
	304	青磁	碗	L 6	I b	灰白	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	—	—	—	〃
	305	青磁	碗	J 6	I b	灰白	灰オリーブ	オリーブ灰	○	○	—	—	—	龍泉窯系
	306	青磁	碗	4トシチ	I	灰白	オリーブ灰	オリーブ灰	○	○	—	—	—	〃
	307	青磁	碗	G 4	I b	灰	オリーブ灰	オリーブ灰	○	○	12.3	—	—	〃
	308	青磁	碗	H 5	I a	浅黄	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	—	—	—	〃
	309	青磁	碗	H 5	I 上	灰白	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	—	—	—	〃
	310	青磁	碗	H 4	I 上	灰	暗オリーブ灰	暗オリーブ灰	○	○	—	—	—	〃
	311	青磁	碗	—	表土	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	—	—	—	〃
	312	青磁	碗	H 4	I b	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	12.7	—	—	〃
	313	青磁	碗	—	表土	灰	緑灰	緑灰	○	○	9.8	—	—	〃
	314	青磁	碗	—	—	灰オリーブ	暗オリーブ	暗オリーブ	○	○	13.7	—	—	〃
	315	青磁	碗	H 4	I c	灰白	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	—	—	—	〃
	316	青磁	碗	G 4	I b	灰白	暗オリーブ	暗オリーブ	○	○	13.5	—	—	〃
	317	青磁	碗	I 6	I c	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	13.7	—	—	〃
	318	青磁	碗	H 4	I b	灰白	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	16.0	—	—	〃
	319	青磁	碗	G 6	I a	灰白	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	12.0	—	—	〃
	320	青磁	碗	H 4	I 上	灰	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	12.0	—	—	〃
	321	青磁	碗	G 3	I 上	灰	オリーブ灰	オリーブ灰	○	○	11.7	—	—	〃
	322	青磁	碗	G 4	I a	灰	オリーブ灰	オリーブ灰	○	○	—	—	—	〃
	323	青磁	碗	G 4	—	灰白	オリーブ灰	オリーブ灰	○	○	—	—	—	〃
	324	青磁	碗	H 4	I b	浅黄+灰白	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	11.7	—	—	〃
	325	青磁	碗	4 T	I	浅黄	灰オリーブ	灰オリーブ	○	○	13.6	—	—	〃
	326	青磁	碗	H 4	I	灰白	灰	灰	○	○	16.8	—	—	〃
	327	青磁	碗	5 T	—	浅黄	オリーブ灰	オリーブ灰	○	○	11.2	—	—	〃
328	青磁	碗	J 6	I b	浅黄	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	—	—	—	〃	
329	青磁	碗	I 4	I c	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	14.3	—	—	〃	

第17表 青磁観察表(2)

陣岡 番号	番号	種別	器種	出土区	層	胎土	色調		施軸		法量 (cm)		備考		
							外面	内面	外面	内面	口径	底径		器高	
55	330	青磁	碗	G 4	I b	灰白	明オリブ灰	明オリブ灰	○	○	13.3	—	—	龍泉窯系	
	331	青磁	碗	H 4	I	浅黄	明オリブ灰	明オリブ灰	○	○	12.1	—	—	〃	
	332	青磁	碗	G 3	I	灰白	緑灰	緑灰	○	○	13.2	—	—	〃	
	333	青磁	碗	H 4	—	浅黄	灰オリブ	灰オリブ	○	○	15.8	—	—	〃	
	334	青磁	碗	H 6	III	灰白	暗オリブ	暗オリブ	○	○	10.8	—	—	〃	
	335	青磁	碗	G 3	I	灰	オリブ灰	オリブ灰	○	○	18.4	—	—	〃	
	336	青磁	碗	16	Ic	にふい濁	オリブ黄	オリブ黄	○	○	16.0	—	—	〃	
	337	青磁	碗	H 3	I	灰白	明緑灰	明緑灰	○	○	16.2	—	—	〃	
	338	青磁	碗	H 5	I b	灰白	オリブ黄	オリブ黄	○	○	12.7	—	—	〃	
	339	青磁	碗	3トシチ	I	灰白	オリブ黄	オリブ黄	○	○	13.5	—	—	〃	
56	340	青磁	碗	H 4	I b	灰	明オリブ灰	明オリブ灰	○	○	14.6	—	—	〃	
	341	青磁	碗	H 5	I b	灰白	明緑灰	明緑灰	○	○	13.3	—	—	〃	
	342	青磁	碗	G 4	I b	灰白	オリブ灰	オリブ灰	○	○	11.5	—	—	〃	
	343	青磁	碗	G 5	I a	灰白	オリブ灰	オリブ灰	○	○	—	—	—	〃	
	344	青磁	碗	15	表土	灰	オリブ灰	オリブ灰	○	○	—	—	—	〃	
	345	青磁	大碗	H 3・4	I abc	灰	オリブ灰	オリブ灰	○	○	15.6	—	—	〃	
	346	青磁	大碗	H 4	I b	灰白	灰オリブ	灰オリブ	○	○	18.3	—	—	〃	
	347	青磁	大碗	H 5	I c	灰白	灰オリブ	灰オリブ	○	○	17.2	—	—	〃	
	348	青磁	大碗	G 6	I c	灰	オリブ灰	オリブ灰	○	○	—	—	—	〃	
	349	青磁	大碗	H 4	I	灰	灰オリブ	灰オリブ	○	○	—	—	—	〃	
	350	青磁	—	14	I c	灰白	明緑灰	明緑灰	○	○	—	5.4	—	〃	
	351	青磁	—	H 4	I b	灰白	オリブ灰	オリブ灰	○	○	—	7.4	—	〃	
	352	青磁	—	G 2	—	灰白	緑灰	緑灰	○	○	—	5.3	—	〃	
	353	青磁	—	J 6	I b	灰白	明緑灰	明緑灰	○	○	—	5.2	—	〃	
	354	青磁	—	—	表土	明オリブ灰	オリブ灰	オリブ灰	○	○	—	5.6	—	〃	
	355	青磁	—	H 5	I b	灰濁	暗オリブ	暗オリブ	○	○	—	6.7	—	〃	
	356	青磁	—	F 3	I	灰	オリブ濁	緑灰	○	○	—	5.5	—	〃	
	357	青磁	—	16	I c	灰	灰オリブ	灰オリブ	○	○	—	5.7	—	〃	
	57	358	青磁	—	16	II	灰白	明緑灰	明緑灰	○	○	11.5	—	—	〃
359		青磁	—	H 4	I 6	灰白	青緑	青緑	○	○	9.9	—	—	〃	
360		青磁	—	3トシチ	I	灰白	灰オリブ	灰オリブ	○	○	—	4.2	—	〃	
361		青磁	皿	F 3	III	灰白	オリブ灰	オリブ灰	○	○	14.0	—	—	〃	
362		青磁	皿	H 4	I b	灰白	灰オリブ	灰オリブ	○	○	15.7	—	—	〃	
363		青磁	皿	I 5	I c	灰	灰オリブ	灰オリブ	○	○	11.1	—	—	〃	
364		青磁	皿	H 5	I b	灰	オリブ灰	オリブ灰	○	○	—	—	—	〃	
365		青磁	皿	H 4	I 上	灰白	明オリブ灰	明オリブ灰	○	○	11.0	—	—	〃	
366		青磁	皿	G 5	I b	灰	暗青灰	暗青灰	○	○	11.9	—	—	〃	
367		青磁	皿	15	I a	灰白	オリブ灰	オリブ灰	○	○	10.8	—	—	〃	
368		青磁	皿	G 5	I a	灰白	灰オリブ	灰オリブ	○	○	10.6	—	—	〃	
369		青磁	皿	G 2	—	暗オリブ灰	灰オリブ	灰オリブ	○	○	9.1	—	—	〃	
370		青磁	皿	G 4	I a	灰	明オリブ灰	明オリブ灰	○	○	9.2	—	—	〃	
371		青磁	皿	14	—	灰	明オリブ灰	明オリブ灰	○	○	—	—	—	〃	
372		青磁	皿	H 4	I b	灰	暗オリブ	暗オリブ	○	○	9.5	—	—	〃	
373		青磁	皿	—	表土	灰	明オリブ灰	明オリブ灰	○	○	8.7	—	—	〃	
58		374	青磁	盤	H 4	I b	灰	灰オリブ	灰オリブ	○	○	21.2	—	—	〃
		375	青磁	盤	16	I c	灰	オリブ黄	オリブ黄	○	○	19.3	—	—	〃
		376	青磁	盤	H 11	I	灰	明オリブ灰	明オリブ灰	○	○	23.5	—	—	〃
	377	青磁	盤	16	I c	灰	暗オリブ	暗オリブ	○	○	20.7	—	—	〃	
	378	青磁	盤	H 4	I b	灰白	灰オリブ	灰オリブ	○	○	25.9	—	—	〃	
	379	青磁	盤	T 6	I a	灰	明オリブ灰	明オリブ灰	○	○	—	—	—	〃	
	380	青磁	盤	J 11	表土	灰	灰オリブ	灰オリブ	○	○	—	—	—	〃	
59	381	青磁	盤	H 5	I a	灰	オリブ灰	オリブ灰	○	○	—	13.8	—	〃	
	382	青磁	壺	G 4	I b	灰白	灰オリブ	灰オリブ	○	○	5.2	—	—	〃	
	383	青磁	壺	G 4	I b	灰白	明オリブ灰	灰白	○	○	—	—	—	〃	
	384	青磁	不明	G 4	I	灰白	灰オリブ	灰オリブ	○	○	8.0	—	—	〃	
	385	青磁	不明	G 5	I a	灰	灰オリブ	暗オリブ	○	○	—	—	—	〃	

(5) 白磁

本遺跡から出土した白磁を器種や形態により以下のように分類した。

碗 (386~390)

碗Ⅰ類 (386)

施釉後に口縁部周辺の釉を掻き取る「口禿げ」である。磁胎は灰白色を呈し、釉は空色を帯びた灰白色で薄く施釉されている。

碗Ⅱ類 (387~390)

387の体部は内弯気味に立ち上がり、上位で反転し、端部は外反する。外面中位に段を有し、篋削りの痕が見られる。磁胎は灰白色で灰色味が強い。388は内弯するタイプである。口縁部周辺に厚く施釉されている。389は口縁部が外反している。口縁端部を薄くつまみだしており、体部中位に鈍い段を有する。磁胎には空洞が見られ、粗雑な感を受ける。390の体部は内弯し、丸みを帯びている。磁胎には微細な黒色粒や白色粒を含んでいる。体部外面下位から高台外面には施釉されていない。内面見込みの外周に沈線文をめぐらし、中央部に草花文のスタンプを施してある。

坏 (391)

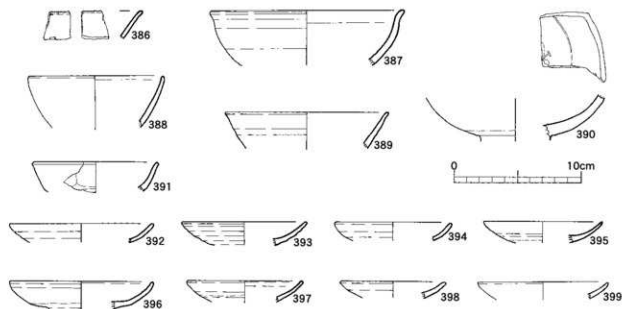
外面の器形により多角坏と考えられる。

皿 (392~420)

いずれも破片資料のため全体形状は判然としませんが、口縁部の傾きにより皿と考えられる。器形により6つに細分した。

皿Ⅰ類 (392~399)

体部に丸みを持ち、内弯気味に立ち上がる。見込みが浅く、口縁が外側に開く。体部に丸みを持ち、内弯気味に立ち上がる。392~395は体部中位に浅い段を1もしくは2有する。395~397の体部下半には施釉されていない。394・397は釉が薄く、他に比べ光沢が少ない。394・399の釉は黄色味を帯びており、399には細かい多くの貫入が見られる。



第60図 白磁(1)

皿Ⅱ類 (400~405)

I類に比べ深みを持つ。体部上位が丸みを帯び口縁部は内弯する。400・402・403は外面に浅い段を2有し、体部下半には施軸されていない。404の軸は水色味を帯びた白色を呈している。400・401は多くの細かい貫入を有する。口縁部に向かって斜上方に延び、直口縁をなす。磁胎は灰白色を呈し、軸は薄い。

皿Ⅲ類 (406)

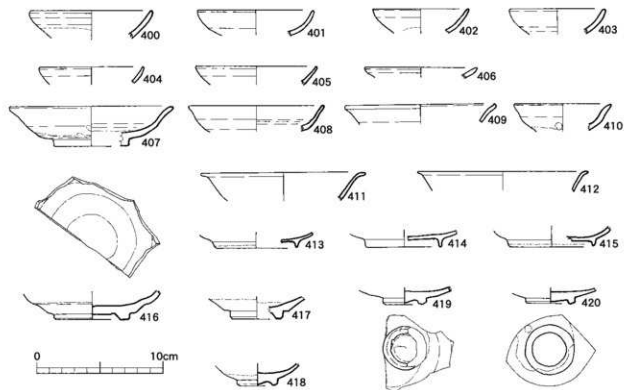
小破片ではあるが、見込みが浅く直口縁をなしている。磁胎も軸も白色を呈している。

皿Ⅳ類 (407~412)

口縁部が外反する。407の底部内面径は広く、体部下位は横に延び、体部中位で段を有し、口縁部は外反する。内面見込みの軸を環状に掻き取ってある。高台断面は四角形をなし、体部外面下位から高台外面には施軸されていない。407と408は似たような器形である。ただ、407は体部中位に緩やかな鈍い段を有す。また、磁胎・軸ともに黄色味を帯び、細かい貫入を有する。409の口縁部断面は四角形で口唇部に気泡が見られる。磁胎は灰白色を呈し、釉色は水色味を帯びている。410の体部は丸味を帯び、口縁部が僅かに外反する。器壁が厚く、体部外面下半から施軸されていない。

皿Ⅴ類 (411~415)

器壁が薄く、口縁部や底部の器形により同一時期の皿と考え、これらを同一類とする。いずれも釉は白色に近く、磁胎は精良緻密である。411は体部に丸みを持ち、口縁部付近で屈折し、上端部は水平をなす。磁胎に黒色の微粒子を含み、体部の内外面に多く見られる。412の口縁部は411と似ているが、体部が直状に斜上方に延びている。413~415の底部は、直立か内傾気味の細く立つ高台を有する。3点とも畳付部分のみが露胎である。



第61図 白磁(2)

皿Ⅵ類 (416~420)

皿の底部である。417の高台部外面は直に、内面は斜めに削ってある。高台のすぐ横から屈曲し、直状に斜めに立ち上がる。体部外面下半には施釉されていないが、内面見込み部分は環状に釉が掻き取ってある。高台内部の削りが浅く、底部の器壁も厚い。418・419は底部内面に抉り込みが入られている。いずれも体部外面下半以下、底部には施釉されていない。418の高台畳付には目痕が見られる。419の磁胎は粗く、黄色味を帯び、小さく空洞をつくり、やや粗雑である。420の内面には大きな貫入があり、円状の篋削り痕が見受けられる。

(6) 青花

碗 (421・422)

421・422は景德鎮系の碗である。421は腰部を屈曲させ、側面は外開きとなる。口縁部は欠損しているが、端反りを呈するものと思われる。やや脚長の内傾した高台をもち、畳付は釉剥ぎされるが、他は光沢の強い透明釉がかかる。体部外面と内面見込みには唐草文を描く。422は口径約9cmで、直状に立ち上がる碗である。外面には判然としないが文様が描かれている。

坏 (423)

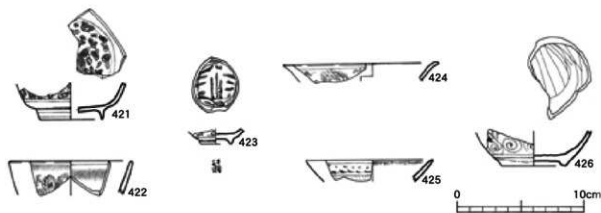
小坏である。底径2.6cmで畳付は釉剥ぎされる。磁胎は乳白色を呈し、光沢のある青白色味を帯びた透明釉がかかる。内面見込みには中国の伝説上の神山といわれる「蓬莱山」が描かれている。高台内面には「福」の字が記されている。

皿 (424・425)

424は端反りの皿である。復元口径12.2cmで磁胎は黄味を帯び、軟質である。外面には牡丹唐草文が描かれ、透明釉には貫入が入る。425は底部が欠損しているが、碁笥底を呈すると思われる皿である。16世紀前半から中葉のものと思われる。釉は光沢のある青白色味がかった透明釉である。外面口縁部下位に波濤文を描く。

壺 (426)

16世紀頃のもので壺としたが器形は袋物の類であろう。外面には唐草文と思われる文様が描かれる。透明釉が内外面ともかかるが、高台及び高台内面は露胎である。体部下位には胴継ぎの痕跡が看取される。



第62図 青花

第18表 白磁・青花観察表

神宮 番号	番号	種別	器種	出土区	層	胎土	色 調		施 軸		法量 (cm)			備 考
							外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	
60	386	白磁	碗	4トレンチ	—	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	—	—	—	口縁子 内外面貫入有り
	387	白磁	碗	H6	I c	灰	灰	灰	○	○	15.2	—	—	
	388	白磁	碗	—	表土	灰白 <small>(胎土・胎質)</small>	灰白	灰白	○	○	10.5	—	—	
	389	白磁	碗	F 3	I a	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	12.9	—	—	
	390	白磁	碗	FG 3	—	灰白	灰白	灰白	○	○	—	—	—	
	391	白磁	坏	I 5	I b	灰白	灰白	灰白	○	○	9.7	—	—	黒い微粒子 内外面貫入有り
	392	白磁	皿	H 3	I b	灰白	灰白	灰白	○	○	11.2	—	—	
	393	白磁	皿	G 3	II	灰白	灰白	灰白	○	○	9.8	—	—	黒い微粒子
	394	白磁	皿	G 4	I b	灰白	灰白	灰白	○ (薄い)	○ (薄い)	9.1	—	—	
	395	白磁	皿	G 4	I b	灰白	灰白	灰白	○	○	9.4	—	—	内面貫入有り
	396	白磁	皿	5トレンチ	I	灰白	灰白	灰白	○	○	11.1	—	—	内外面貫入有り
	397	白磁	皿	G 3	III	灰白	灰白	灰白	○	○ (薄い)	9.5	—	—	内面貫入有り
	398	白磁	皿	I 6	I c	灰白	灰白	灰白	○	○	8.0	—	—	
	399	白磁	皿	G 3	I	灰白	灰白	灰白	○	○	10.2	—	—	内外面貫入有り
61	400	白磁	皿	G 3	I	灰白	灰白	灰白	○	○	9.6	—	—	内面貫入有り 茶のくぼみ有り
	401	白磁	皿	I 6	I c	灰白	灰白	灰白	○	○	9.1	—	—	内外面貫入有り
	402	白磁	皿	H 3	I b	灰白	灰白	灰白	○	○	7.5	—	—	
	403	白磁	皿	I 5	I a	灰白	灰白	灰白	○	○	7.4	—	—	内外面貫入有り
	404	白磁	皿	L 4	II	灰白	灰白	灰白	○	○	8.2	—	—	内外面小さくぼみ
	405	白磁	皿	H 4	I c	灰白 <small>(胎土・胎質)</small>	灰白	灰白	○	○	9.5	—	—	内外面貫入有り
	406	白磁	皿	H 3	I a	灰白	灰白	灰白	○	○	8.8	—	—	
	407	白磁	皿	H 4・6	I b・III	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	12.8	5.9	3.2	外面に輪たまり
	408	白磁	皿	H 4	I b	灰白	灰白	灰白	○	○	10.5	—	—	内外面貫入有り
	409	白磁	皿	H 4	—	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	11.8	—	—	内外面貫入有り
	410	白磁	皿	H 5	I b	灰白	灰白	灰白	○	○	7.5	—	—	内外面貫入有り 目痕有り
	411	白磁	皿	H 4	I	灰白 <small>(胎土・胎質)</small>	灰白	灰白	○	○	12.8	—	—	
	412	白磁	皿	G 4	I	灰白	灰白	灰白	○	○	13.2	—	—	
	413	白磁	皿	H10	表土	灰白	灰白	灰白	○	○	—	6.4	—	
	414	白磁	皿	H 4	I c	灰白	灰白	灰白	○	○	—	5.6	—	
	415	白磁	皿	5トレンチ	I	灰白	灰白	灰白	○	○	—	6.5	—	
416	白磁	皿	G 3	I 下	灰白	明オリーブ灰	明オリーブ灰	○	○	—	5.8	—	内面貫入有り	
417	白磁	皿	G 5	I b	灰白	灰白	明緑灰	○	○	—	3.9	—		
418	白磁	皿	L 4	II	灰白	灰白	灰白	○	○	—	2.8	—	目痕有り	
419	白磁	皿	—	表土	灰白 <small>(胎土・胎質)</small>	灰白	灰白	○	○	—	2.8	—	内面貫入有り	
420	白磁	皿	G 4	I a	灰白	灰白	灰白	○	○	—	3.0	—	内面貫入有り 目痕有り	
62	421	青花	碗	G 5	I a	—	—	—	○	○	—	4.8	—	
	422	青花	碗	—	表土	—	—	—	○	○	—	9.5	—	
	423	青花	坏	H10	表土	—	—	—	○	○	—	2.4	—	
	424	青花	皿	H 4・5	—	—	—	—	○ (薄い)	○ (薄い)	12.0	—	—	
	425	青花	皿	H 5	II	—	—	—	○	○	—	9.7	—	
	426	青花	壺	—	表土	—	—	—	○	○	—	5.1	—	

(7) 転用品 (427~432)

427~432は底部の破損部分を転用し、円盤形に仕上げたものである。427~430は青磁、431・432は白磁の底部を転用している。また、427と428は底部の高台部分を残してはいないが、429~431は高台部分を残す。427は青磁の高台部分を削ぎ取り、雑ではあるが、円盤状に整えてある。429は小破片ではあるが、きれいな円盤状に加工されている。内面には草花文スタンプを残す。430は、内外面とも中心部のみを残し、軸を環状に挿き取った底部を転用したものである。

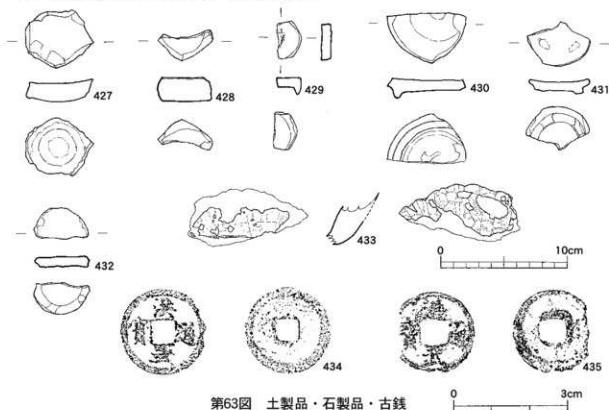
431・432は高台に弧状の挟り込みを入れてある白磁の底部を転用している。

(8) 石製品 (433)

丸味を帯びた滑石製石鍋の胴部片である。器面には縦位に幅約1cmのノミ痕が観察される。

(9) 古銭 (434・435)

434・435は明の洪武通寶である。背文字はない。



第63図 土製品・石製品・古銭

第19表 土製品・石製品・古銭観察表

神田 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	外面色調	内面色調	施 軸		法量 (cm)	備 考
							外面	内面		
63	427	円盤状土製品	C 6	I	にぶい赤褐	オリーブ灰	○	○	厚さ1.4 長さ5.4	青磁の破損部
	428	円盤状土製品	H 5	I a	にぶい赤褐	オリーブ灰	○	○	厚さ1.9	青磁の破損部
	429	円盤状土製品	G 4	I b	灰白	オリーブ灰	×	○	厚さ0.7	青磁の破損部
	430	円盤状土製品	H 3	I 上	黄灰	オリーブ灰	○	×	厚さ0.8	青磁の破損部
	431	円盤状土製品	G 4	I a	灰黄	灰白	×	○	厚さ0.7	白磁の破損部
	432	円盤状土製品	H 5	I a	浅黄	灰白	×	○	厚さ0.9	白磁の破損部
	433	滑石製石鍋	H 3	I 上	にぶい赤褐	にぶい赤褐	—	—	—	—
	434	古銭	H 4	I b	—	—	—	—	径2.3 孔径0.6 重さ2.47g	洪武通寶
	435	古銭	—	—	—	—	—	—	径2.2 孔径0.7 重さ1.3g	洪武通寶

第8節 近世の調査

近世の遺構として検出されたものは調査区北部、中央部、南部に見られた。調査区西側尾根部と東側斜面は造成による削平で包含層の残存状況がよくなかったため、近世の遺構は見られなかった。

遺物は陶器が主だったが、いずれも細片が多く、図化できたのは僅かであった。

1 遺構

遺構として軽石集積1基、土坑1基、溝状遺構3条が検出された。軽石集積と土坑は調査区北部、溝状遺構は調査区中央部と南部での検出だった。遺物を伴っているのは溝状遺構8だけである。

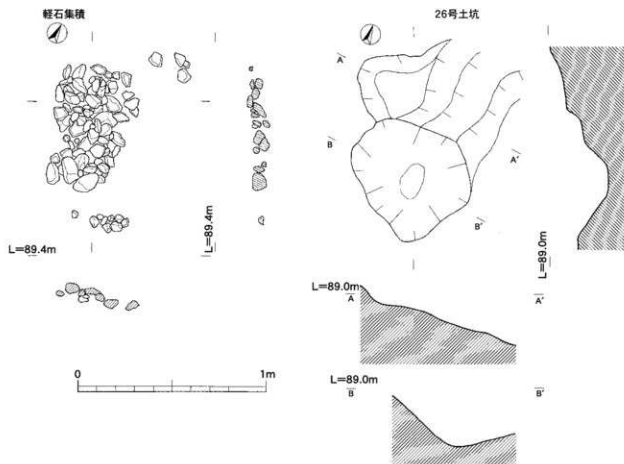
(1) 軽石集積

F-3区において長径90cm、短径45cmの軽石集積を検出した。軽石だけで構成されており、親指大のものから人頭大のものまで99個を確認した。検出面は表土下で軽石の下には砂質土が堆積している。集密度は高く、人為的に集め置いたものの可能性が高い。周辺にはこのような軽石の集中、散布は見られなかった。

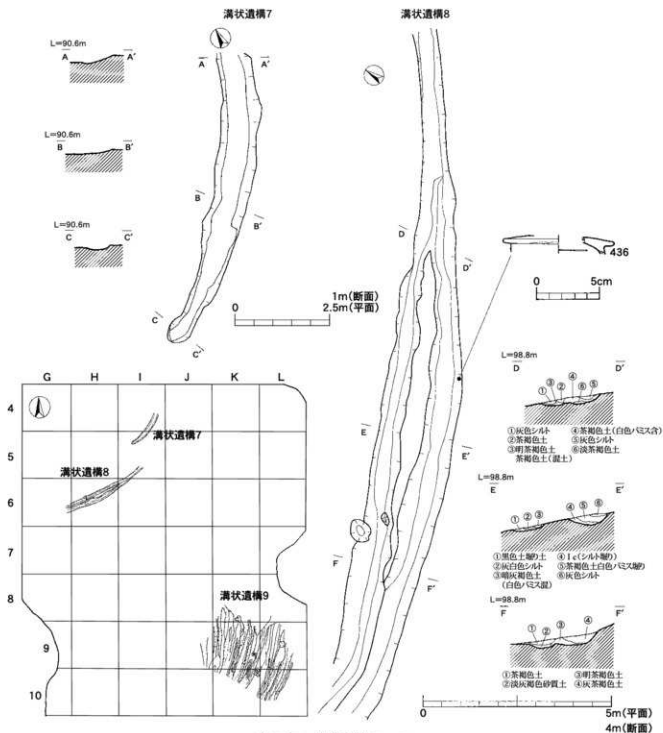
(2) 土坑

26号土坑

F-3区の軽石集積と同じ場所で土坑を検出した。軽石を伴う土坑、あるいは軽石集積の掘り込みとも考えられる。しかし、土坑の埋土上に軽石集積が位置したり、掘り込みと考えると軽石との位置がずれたりするため、2つの遺構には時期差があるものと思われる。西から東へ下る斜面にお



第64図 近世遺構



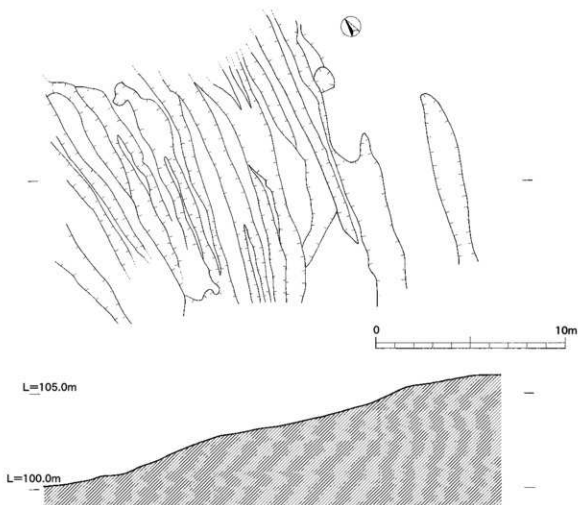
第65図 溝状遺構7・8

いて検出されており、長径65cm、短径55cm、深さ26cmの略円形を呈する。

(3) 溝状遺構

溝状遺構7

北東から南西に走る長さ約10mの溝状遺構がI-4・5区で検出された。北側の先端部は消失しており、その先は不明である。中世の溝状遺構2を切っており、それより新しく位置づけられる。埋土はI b層に似た茶褐色土で浅く、遺構内からの出土遺物はなかった。



第66図 溝状遺構 9

溝状遺構 8

南東から北西に下る傾斜地を溝状遺構 7 と平行に走り、長さ約15mである。溝の両端は消失しているが、北部の1条の溝が溝中央部付近で南西に向けて二股になる。深さは約20cmで、埋土は場所によって違いはあるものの時間をかけて埋まったことが分かる。I c 層上面での検出で、陶器を伴う。また、中世の溝状遺構 4 を切っていたため、時期を近世と判断した。出土遺物は総数19点で須恵器・白磁・陶器・その他は土師器であった。図化できたのは陶器 1 点のみである。436は最大径 4.5cmの土瓶の蓋である。蓋外面のみ軸がかかる。

溝状遺構 9

調査区南側の東から西へ下る傾斜面において検出された。北部と南部の先は地形のため、消失している。J～L-8～10区に跨り、南北方向に幾条もの溝が走る。長さは10m～20mで長い。中世の溝状遺構 6 の南東端部上より検出されたため、遺物は伴わないものの時期を近世と判断した。

2 遺物

近世の遺物として出土したもののほとんどは小破片であり、図化できたのは15点であった。出土遺物は大きく土師器・陶器・土製品・石製品・古銭に分けられる。調査区中央から多く出土しているが、近くから建物らしい遺構は検出されておらず、流れ込みの可能性が高い。

(1) 土師器

437は加熱具として使われる焙烙の柄の部分である。赤色の顔料が塗布しており、指で調整した痕跡を残す。

(2) 陶磁器

碗 (438・439)

438は外面に一重網目文を施す染付碗である。胎土は緻密で灰白色を呈す。釉は緑味がかり、高台畳付部分のみ釉を剥ぐ。439は豎野系白薩摩の碗である。胎土は黄色味を帯びた陶土でややバサついた感じを受ける。釉は透明釉が畳付以外総釉でかかり、細かい貫入が入る。

碗蓋 (440)

440は染付の蓋である。器壁は薄く、口縁部内面には二重圏線が施される。外面には呉須でつる草文のような文様が描かれるが、灰色味があった発色を呈す。

坏 (441)

441は龍門寺焼の小坏である。口径6cm、高台径3.3cmである。灰色の胎土に内面全体と外面体部中位まで白化粘土を掛け、その上から高台内面と畳付を除き、透明釉を薄くかける。また、内面には、蛇ノ目釉剥ぎが看取される。

土瓶 (442)

442は豎野系白薩摩の土瓶の底部である。丸味を帯びるが、上部は欠失しており、器形は不明である。外面底部には施釉されず、釉境に長さ約1cm弱の円錐状の脚が付く。脚は三足付くものと思われる。また、外底面には煤が薄く付着する。

蓋 (443~445)

443~445は貯蔵具等の蓋である。443は径約13.5cmに復元される。胎土に砂粒を含み、茶褐色を呈す。内外面とも無釉である。欠損しているため、形状は不明であるが、外面中央につまみが付く。444・445は苗代川焼の蓋である。444は口縁部を内側に折り曲げて肥厚させ、さらに外方に折り返す。両者とも口唇部は平坦につくられ、貝目が残る。釉は黒褐色に発する鉄釉がかかり、口唇部は掻き取られる。

壺 (446)

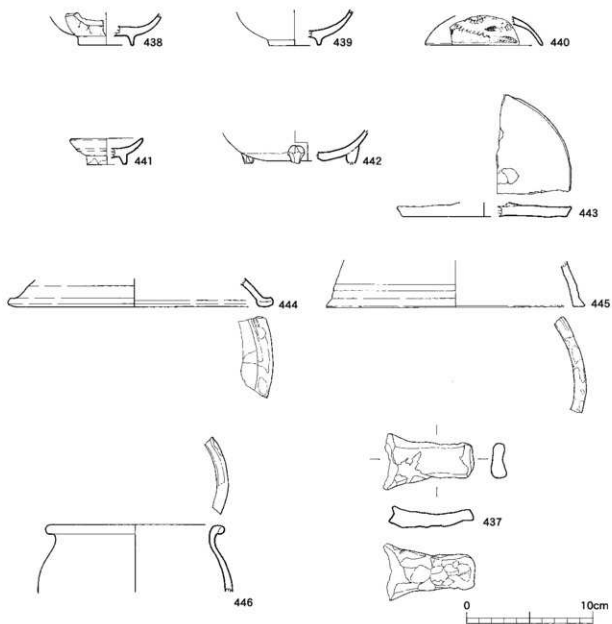
446は苗代川焼の壺の口縁部である。口縁部は外側に折り返して丸くつくる。口唇部の釉は掻き取られる。

(3) 転用品 (447)

447は外面のみ施釉された陶器の破損部を円盤状に整形したものである。径4cm、厚さ0.6cmである。

(4) 羽口 (448)

448は甕の羽口である。長さ6cmで円柱状を呈す。残存部が少ないが、直径4cm、孔径1.3cm程度



第67図 近世 土師器・陶器

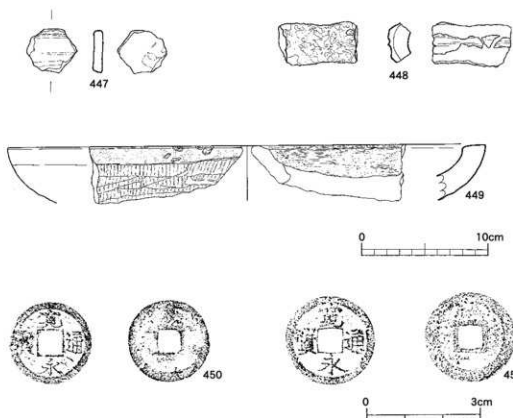
であると考えられる。鉄分が表面に固着し、厚さ2～3mmを測る。

(5) 石製品 (449)

449は口縁部が平坦をなし、浅鍋状を呈す砂岩製の石製品である。外面下半には粗い削り痕が確認できる。外面口縁部下約1cmまでの部分と内面には削った後の丁寧な研磨がうかがえる。復元径は38cmとかなりの大きさのものである。外面に煤が付着していることから、煮炊具としての機能を持つものと考えられる。

(6) 古銭 (450・451)

450・451は寛永通寶である。いずれも背文字はない。「通」の「マ」部分は両方とも同じ「コ」ではあるが、「寶」の「貝」部分には「ハ」、「ス」の違いが見られる。また、450は451に対して小さくなる。



第68図 土製品・石製品・古銭

第20表 近世遺物観察表

種別 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	層	色調		施軸		法量 (cm)			備考
						外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	
67	437	土師器	焙烙	I5	Ia	橙	橙	×	×	—	—	—	柄部 赤色顔料塗布
	438	陶器	碗	FG-3	東西T	灰白	灰白	○	○	—	4.3	—	底部
	439	陶器	碗	I12	表土	浅黄	浅黄	○	○	—	3.9	—	底部・白薩摩
	440	陶器	碗蓋	4トレンチ	I	灰白	灰白	○	○	9.1	—	—	
	441	陶器	坏	4トレンチ	—	灰白	灰白	○	○	5.7	3.2	2.1	口縁部~底部龍門可焼
	442	陶器	土瓶	—	表土	灰	灰白	○ ×	○	—	8.6	—	底部・白薩摩
	443	陶器	蓋	—	表土	にぶい褐	暗赤褐	×	×	13.0	—	—	貯蔵用
	444	陶器	蓋	H5	Ia	オリーブ黒	暗オリーブ褐	○	×	19.9	—	—	貯蔵用 苗代川焼
	445	陶器	蓋	G5	Ia	オリーブ黒	黒	×	×	18.9	—	—	貯蔵用 苗代川焼
	446	陶器	壺	—	表土	オリーブ黒	オリーブ黒	○	○	13.1	—	—	貯蔵用 苗代川焼
68	447	石製品	—	4トレンチ	I	黒	黒褐	○	×	—	—	—	
	448	羽口	—	H5	Ib	にぶい黄褐	灰黄	×	×	—	—	—	
	449	石製品	煮炊具	H2	I	黒褐	黄褐	×	×	37.7	—	重さ131.23g	口縁部・煤付着
	450	古銭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	径2.2cm孔径0.6cm重さ1.48g 寛永通寶
	451	古銭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	径2.4cm孔径0.6cm重さ2.93g 寛永通寶

第9節 時期不詳遺物

表土一括のものや時期が特定できなかったものを時期不詳遺物として一括する。時期不詳の遺物として、石製品と金属器がある。

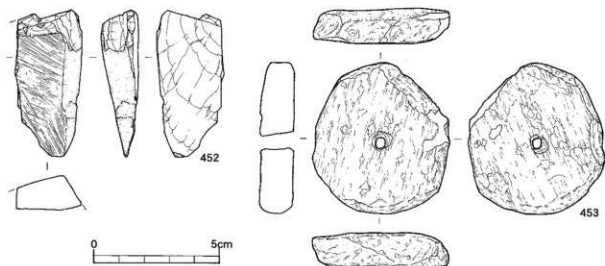
1 遺物

(1) 石製品 (452・453)

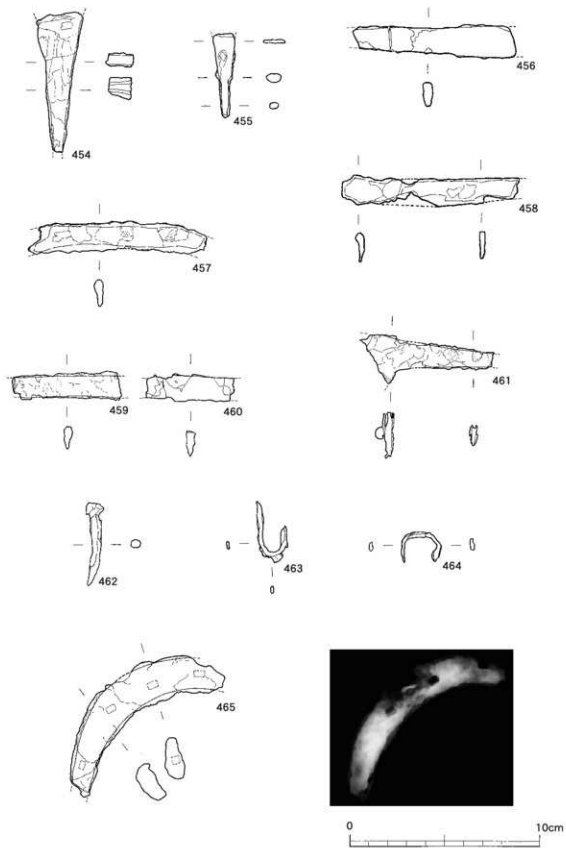
砥石と軽石製品である。本遺跡から出土した砥石は1点である。452は原材料の石を概ね直方体の形状と使い勝手のよい適当な大きさへと切断加工されているが、本遺跡出土の砥石は、直方体の角の部分のみが残る長さ6cm程の破片である。手持ち砥か置き砥かは不明である。石材は頁岩であり、使用痕が確認できる。453は穿孔のある軽石製品である。長径6cm、短径5cmの楕円形状に加工されている。中央部に径約6mmの穿孔を持つ。穿孔は内側が狭くなっていることから、両面から内側に向かって穿孔したと考えられる。

(2) 金属器 (454~470)

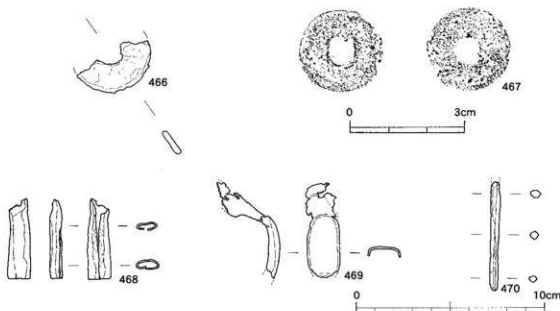
出土数は明確ではないが、大半は性格不明で、比較的形をとどめていたものを保存処理した。454~466は鉄製品、467~470は銅製品である。454・455は鉄鍔である。454は厚い錆に覆われ、形状は不明である。ただ、大型のものであると考えられる。455は身部下半から茎部にかけての部位で、茎部は断面四角形を呈す。茎部長2cm、最大幅0.5cm、最大厚0.5cmである。456~461は形状をとどめておらず、錆に厚く覆われているが、刀子の可能性が高い。456~460は身の片側が細くなっていることから刀部だと考えられる。461は刀子の身部と茎部の境部分である。462は長さ4cmの釘である。断面は方形で、頂部は平坦を呈す。463・464は「コ」の字状を呈する金具である。性格は不明ではあるが、同一個体の可能性も考えられる。465は欠損しているが、U字形を呈す馬用の蹄鉄と思われる。エックス線写真では5mm×2mmの長方形の孔を4か所確認することができる。466は三分の一しか残存していないが、径2cmの鉄銭である。孔の一边は約5mmで四角形を呈す。



第69図 時期不詳遺物 石製品



第70図 時期不詳遺物 金属器(1)



第71図 時期不詳遺物 金属器(2)

467～470は銅製品である。古銭も含めて4点図示する。467は径2.3cm、孔の一辺0.7cmを呈す古銭である。錆による劣化が著しく、文字の判別が不能であるが、無文銭の可能性もある。468は煙管の雁首である。火皿接合部で欠損しているものと思われる。雁首から火皿にかけて緩やかに上がり、一枚作りであることから比較的新しいものと判断できる。469は刀の柄頭につく兜金の可能性が高い。柄頭部は長楕円形を呈し、長さ3.3cm、短径1.7cmである。470は用途不明の銅製品である。棒状を呈し、長さ5.8cm、最大厚0.75cm、最小厚0.6cmである。

第21表 時期不詳遺物観察表

種別 番号	番号	区	層	種別	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
60	452	16	1c	石製品	砥石	頁岩	6	2.6	1.6	24.11	
	453	G 3	1	石製品	穿孔のある軽石製品	軽石	5.5	6	1.25	15.58	
	454	—	—	金属器	鉄鏝	鉄	—	2.3	0.6	19.77	
	455	—	—	金属器	鉄鏝	鉄	—	1.2	0.45	3.39	
	456	3トレンチ	—	金属器	刀子	鉄	—	1	0.5	16.45	
	457	H 4	1上	金属器	刀子	鉄	—	1.4	0.5	14.18	
	458	—	—	金属器	刀子	鉄	—	1.5	0.3	9.2	
70	459	—	—	金属器	刀子	鉄	—	0.9	0.4	6.76	
	460	—	—	金属器	刀子	鉄	—	1.3	0.45	5.65	
	461	—	—	金属器	刀子	鉄	—	2.3	0.9	10.45	
	462	—	—	金属器	釘	鉄	—	0.9	0.45	3.29	
	463	—	—	金属器	金具	鉄	—	—	0.2	1.46	
	464	—	—	金属器	金具	鉄	—	—	0.2	2.19	
	465	—	—	金属器	蹄鉄	鉄	—	1.1	1	35.17	孔4カ所有
	466	—	—	金属器	鉄銭	鉄	—	径2cm	孔0.5cm	0.69	
71	467	—	—	金属器	古銭	銅	—	径2.2cm	孔0.5cm	2.09	
	468	—	—	金属器	キセル	銅	—	1.2	0.08	3.09	
	469	—	—	金属器	兜金	銅	—	—	0.1	5.43	
	470	—	—	金属器	不明	銅	—	0.4	0.5	4.76	

第V章 発掘調査のまとめ

1 遺跡の立地

鹿児島県の地形のほとんどはシラス台地が占めることから、各時期の遺跡の多くはこの台地上に立地していることが多い。特に古墳時代までは、いくつかの低地を占地する遺跡を除き台地上に立地する。ところが古代になると、低地、すなわち扇状地、微高地といった低い場所に居を構えることも増えてき、現在の多くの集落はそうした場所に位置する。

柳原遺跡の立地をみると、周辺を標高120mの台地に囲まれ、その台地の傾斜地から谷部に開析された遺跡である。こうした地に営まれた本遺跡からは、溝状遺構や焼土を伴う遺構が検出され、縄文時代、弥生から古墳時代、古代、中世、近世の遺物が出土している。また、出土遺物の約8割が土師器である。ただ、破片が多く、図示できたのは、ほんの一部にすぎない。

2 古代の出土品の特徴

古代の土器には土師器・黒色土器A類・赤色土器・墨書土器・刻書土器・須恵器がある。

黒色土器A類や内側のみベンガラが塗布される赤色土器は、破片資料が多く、図化できたのは10点前後であったが、全体の出土量に占める割合は高い。本遺跡の南東に位置する近隣の下永泊A遺跡でも多量の黒色土器・赤色土器・墨書土器の出土が報告されている。特に赤色土器の出土は多く、東市来町犬ヶ原遺跡や吹上町笑童子遺跡など日置郡各地でもみられ、この地域の特徴と考えられる。

また、本遺跡で出土した刻書土器境の外底面には指頭による調整と思われる痕跡が確認できる。「指頭調整痕」を施すものとして、県内では曾於郡輝北町の鳥居ヶ段遺跡での出土が報告されている。鳥居ヶ段遺跡出土の境は2点とも黒色土器A類で高台外底面に指頭と思われる放射状の調整痕を残す。また、宮崎県内では宮崎市西ノ原地区遺跡、宮崎学園都市遺跡群の小山尻東遺跡、高岡町蔵野遺跡からの出土が報告されている。これらは9世紀後半から10世紀前半に位置付けられるようである。日向で多く見られる「指頭調整痕」に似た技法を用いた土器が、薩摩に位置する本遺跡で出土したということ注目される。

須恵器は坏・壺・皿等の食膳具の出土が見られず、貯蔵具として使われていたであろう甕・壺類がほとんどを占めている。これらは、色調、形態、タタキ・当て具から金峰町中岳山麓古窯跡群で焼かれたものと思われるものが多く、貯蔵具だけがみられることなどから9世紀後半～10世紀前半に位置付けられる(中村 1994)。

3 中世の出土品の特徴

中世の出土品は土師器・瓦器・輸入陶磁器・国内産陶器などがある。土師器では底部に糸切り痕を残す耳皿や三足坏のような特殊な遺物が出土している。

中世の土師器坏は口径と底径の差があまりない箱形を呈するものが多くを占める。それらを底径に対する口径の比で表すと、坏は1:1.4と1:1.6の2種類に分かれる。さらに、底径に対する器高を比で表したところ、1:0.4に集中する傾向にあった。同じように皿でも試したところ、底径に対する口径の比は、1:1.4と1:1.6の2種類に集中した。また、底径に対する器高の比は、1:0.3に集中した。つまり、坏と皿の傾き(比率)は2種類あり、底径に対する器高もある程度決まっていることが分かる。ただ、坏においても皿においても口径の大きいものと小さいものとの2種類に集中することから、これらの土師器は2時期に分けることができる。

耳皿は伊藤正人氏によると神儀祭祀の一部の膳にのみ用いられ、その使用対象は、神聖な者、高貴な者、ハレの場にふさわしい者に限られているようである(伊藤2000)。県内では、鹿児島市鹿

児島城本丸跡や串木野市椿城跡等から出土している。椿城跡から出土した耳皿は、現地説明会時に3点実見した。長径約8.5cm、短径6cm、器高2.8cmの大振りのもので黒色土器A類の折り曲げ部分と長径6.2cm、短径3.8cm、器高3.5cmの充実高台風の底部を持つものである。充実高台風の高台は外上方に立ち上がろうとする部分が見受けられ、その中に耳皿がのる異風の形態のものである。これらと本遺跡出土の耳皿を比較すると、本遺跡出土のものはやや小さく、伊藤氏の分類によると4-c類くらいにあたると思われる、12~13世紀に位置付けられるようである。

三足環は仏具と考えられ、県内では鹿児島市加栗山遺跡・串木野市弥勒院跡・串木野市椿城跡等での出土が見られる。椿城跡から出土した三足環は2点あり、1点は中世墓からの出土である（現地説明会実見による）。前に述べた遺跡から出土した三足環は本遺跡出土の遺物の約2倍の大きさである。三足環の出土例は少なく、年代の位置付けは難しい。

青磁は蓮蓮弁文を有するものや線描き蓮弁文のものなど多種にわたり出土していることから、13世紀から16世紀まで各時期に跨った遺跡であると思われる。多くの盤や1点ではあるが壺の頸部が出土していることも本遺跡の特徴と言える。

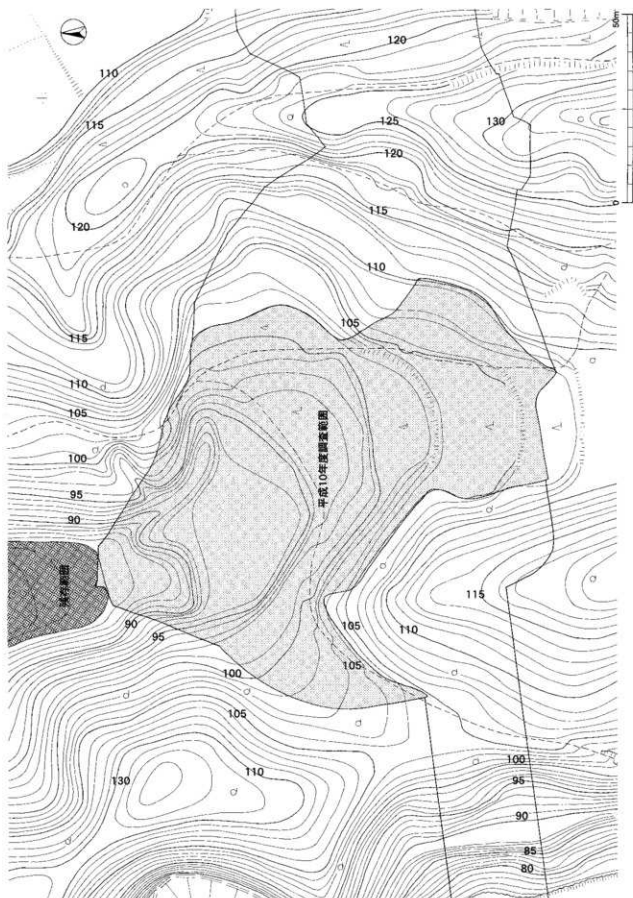
4 古代・中世の遺物からみた遺跡の性格と課題

今回の調査は道路幅だけという限定された範囲の調査だったにも関わらず、少量ではあるが、貴重な資料が出土している。住居跡や建物跡などの生活の根拠を裏付けするような遺構は検出されなかったが、多くの破片資料が出土した。これらは流れ込みによるもの、あるいは廃棄されたものとも考えることもできる。しかしながら、北向き谷頭という一般の居住地としては不適当な立地条件や一般の集落遺跡には例の少ない耳皿・三足環や灯明器として使われた皿・環などの出土遺物から、山岳寺院とまでは言えないものの山寺の存在をすることも不可能ではないように思う。ただ、古代の遺構として焼土を伴う土坑群や中近世の溝状遺構が検出されたが、どのような性質のもので、どのように使われていたのか課題が残る。

遺跡の残存範囲はさらに北へ広がっている可能性が高いので、今後、また、調査が行われる機会があれば、さらに大きな成果が得られるだろう。そして、周辺遺跡や他の類似遺跡との比較・検討を行いながら、柳原遺跡周辺の性格を考えていく必要があると考える。

参考文献

- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
大口市教育委員会 1982 『平泉城跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
鹿児島県教育委員会 1983 『成岡・西ノ平遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)
中村和美 1994 『鹿児島県(薩摩・大隅国)における平安時代の土器』『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会
中村和美 1997 『鹿児島県における古代の在り土器』『鹿児島考古31』鹿児島考古学会
財団法人横浜ふるさと歴史財団横浜市教育委員会 1997 『西ノ谷遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告(23)
柳北町教育委員会 1998 『前床遺跡・鳥居ヶ段遺跡』柳北町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
伊藤正人 2000 『耳皿ノート』『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会
太宰府教育委員会 2000 『太宰府家坊跡XV-陶磁器分類編一』
伊集院町誌編さん委員会編 2002 『伊集院町史』
鹿児島県埋蔵文化財センター 2002 『計志加里遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(38)
鹿児島県埋蔵文化財センター 2004 『下永迫A遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(72)



第72図 遺跡周辺残存範囲図

写 真 图 版



調査前風景



調査区の土層



2号集石



3号集石



4号集石



軽石集積



石皿



作業風景

図版 4



1号土坑



1号土坑ビット断ち切り



1号土坑底面



1号土坑底面ビット断面



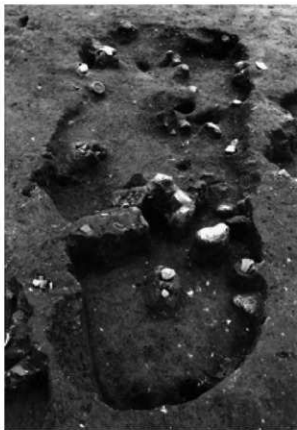
L-6区 烧土域



烧土域断面



23号土坑



16号土坑



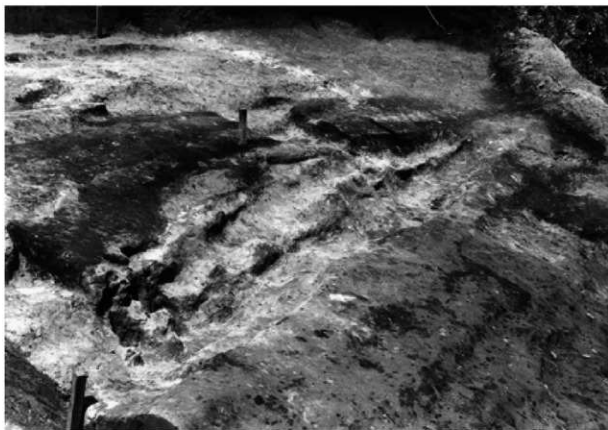
土坑完掘



遺物出土状況



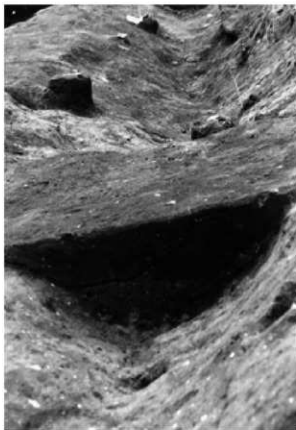
溝状遺構 1 検出状況



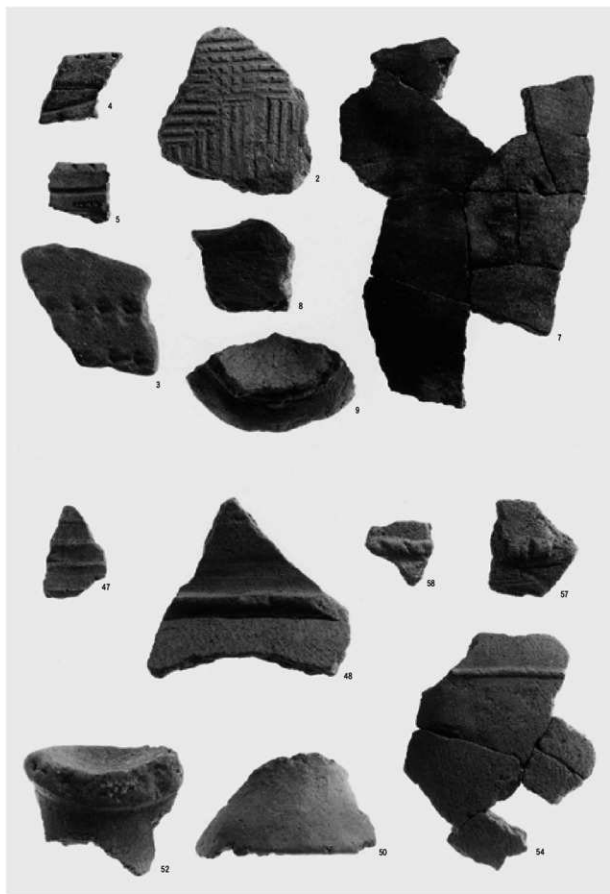
溝状遺構 1 完掘状況



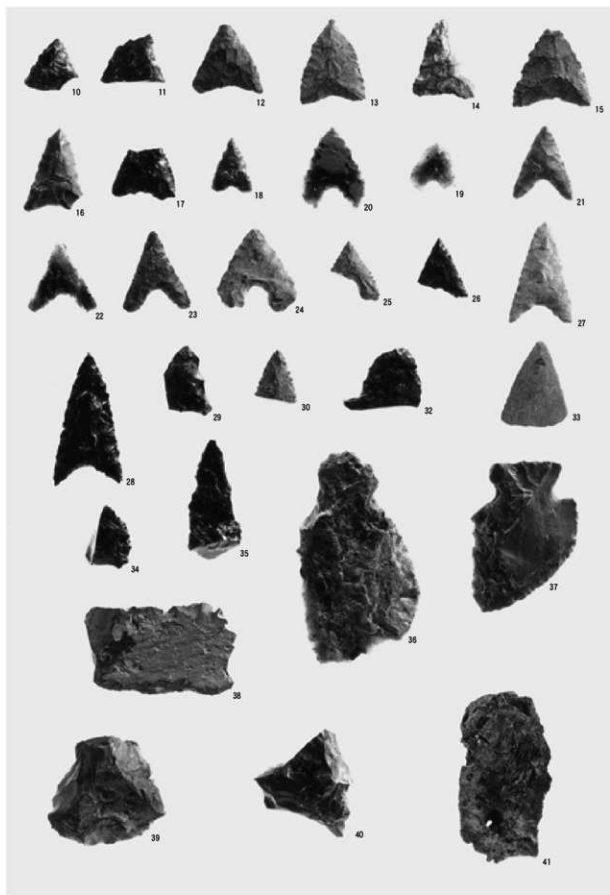
溝状遺構 2 検出状況



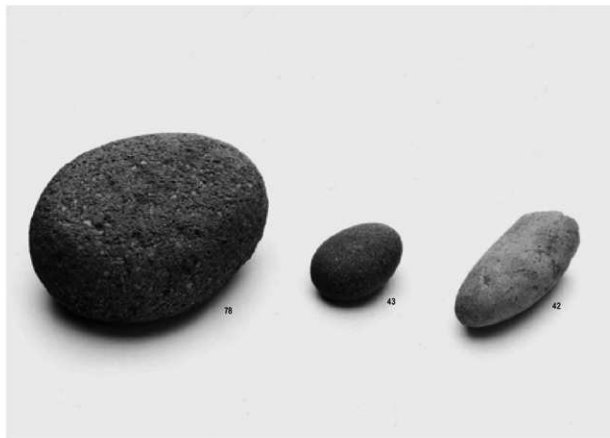
溝状遺構 2 断面



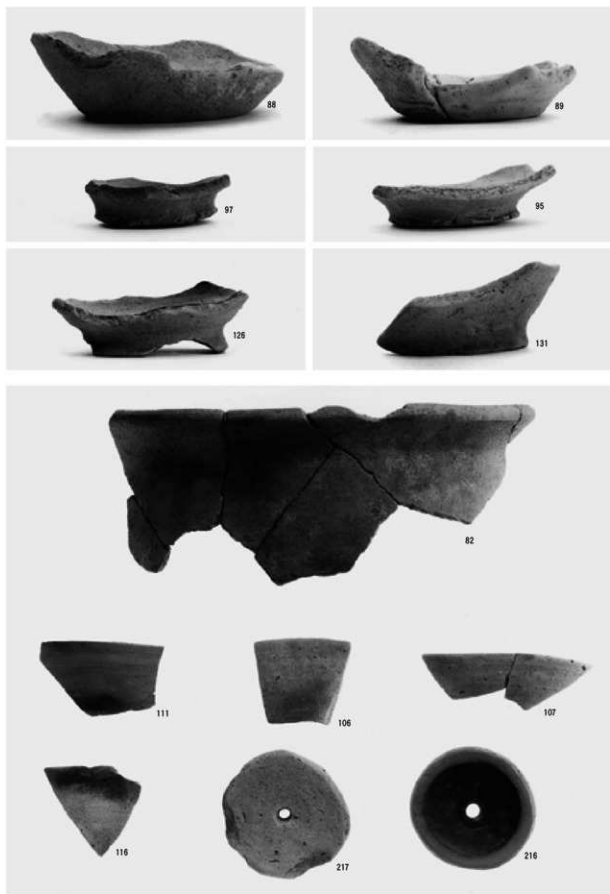
縄文・弥生・古墳時代の出土遺物



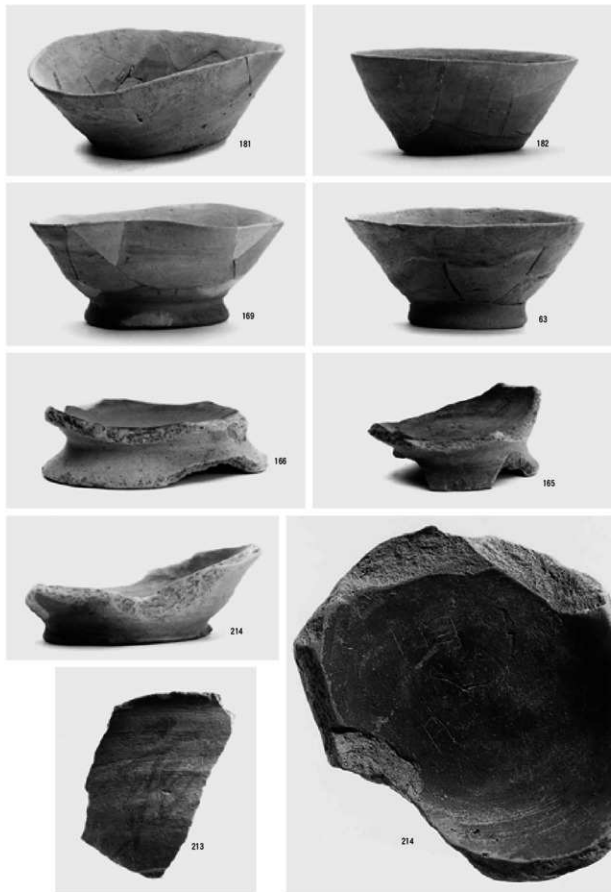
縄文石器(1)



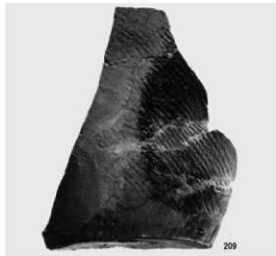
縄文石器(2)



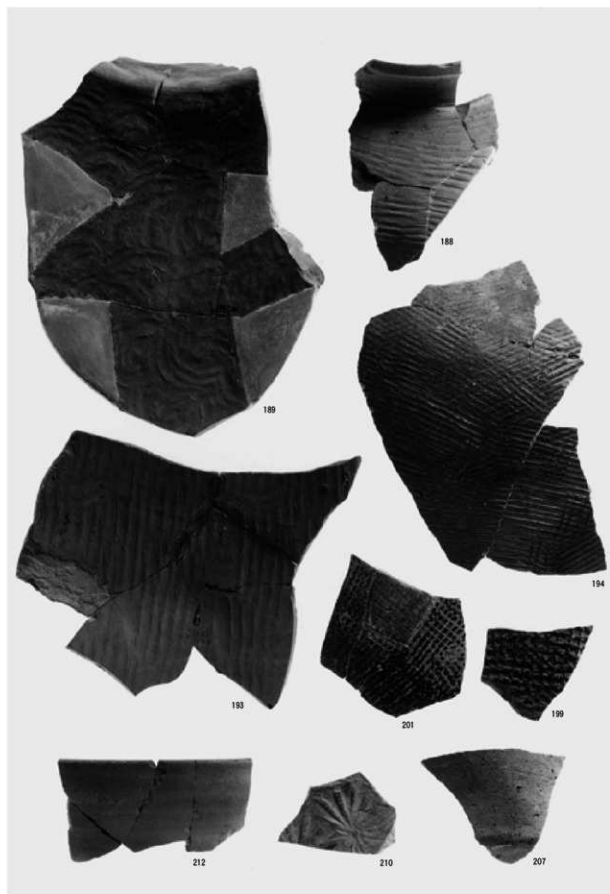
古代の出土遺物(1)



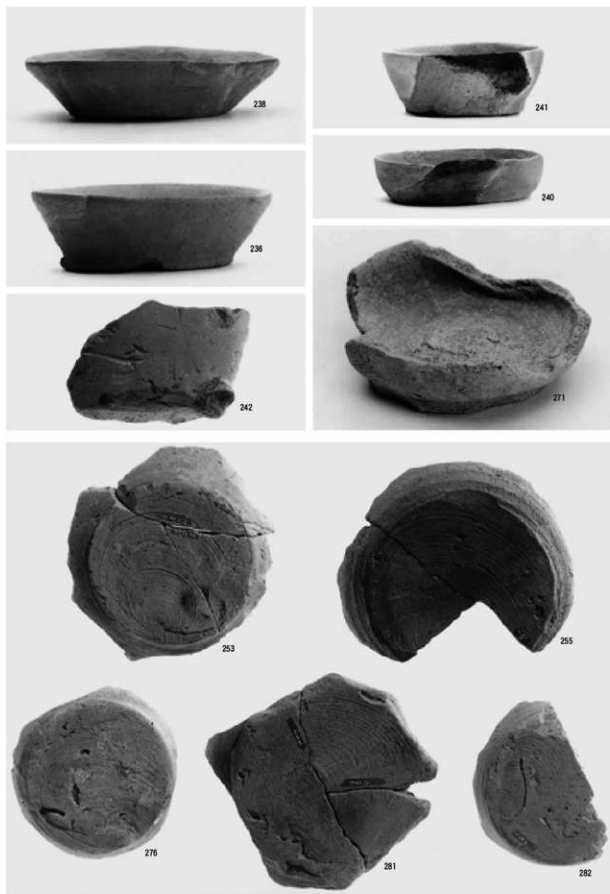
古代の出土遺物(2)



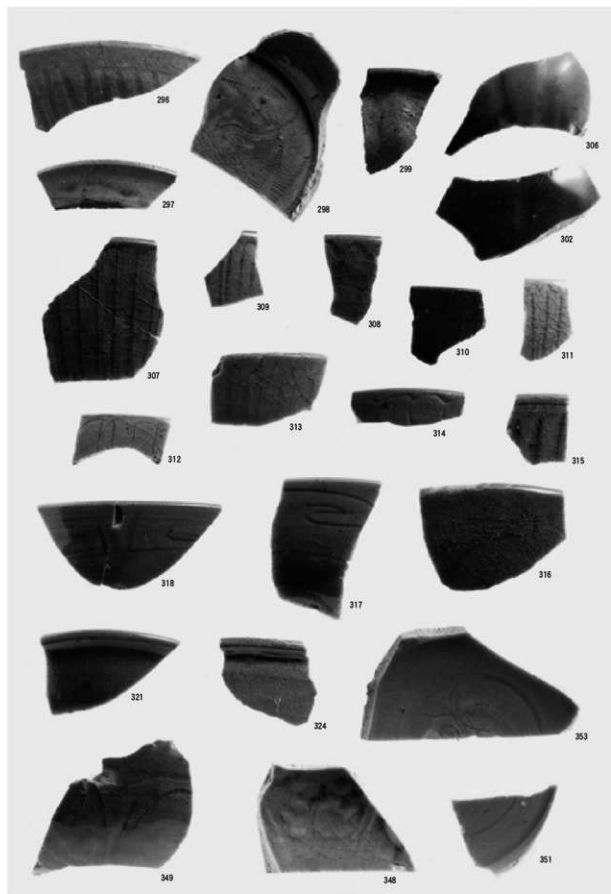
古代の出土遺物(3)



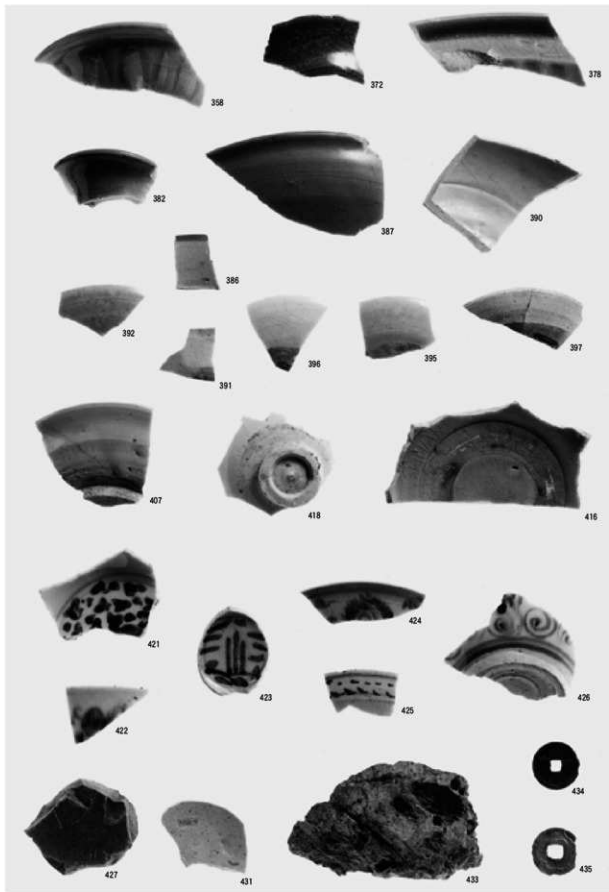
古代の出土遺物(4)



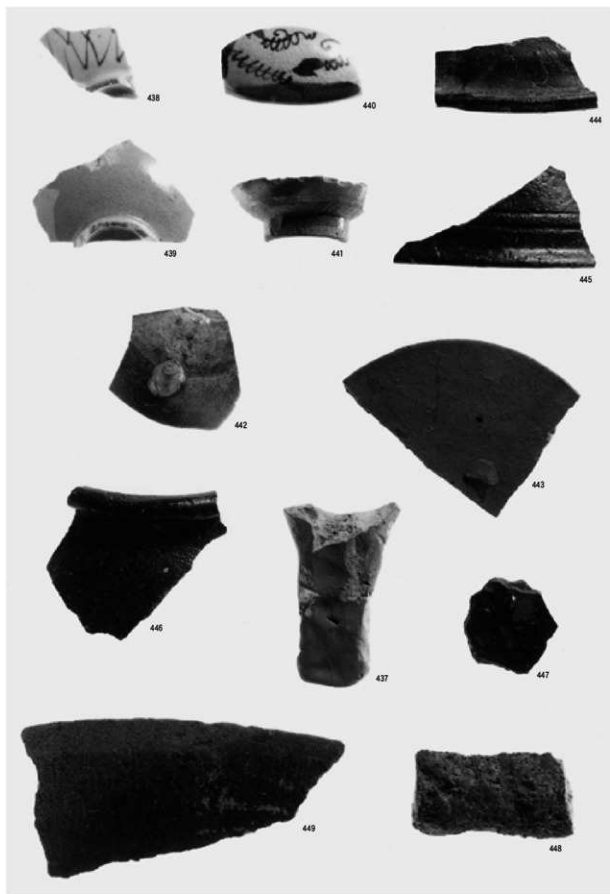
中世の出土遺物(1)



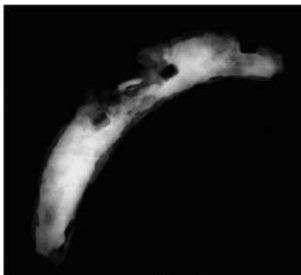
中世の出土遺物(2)



中世の出土遺物(3)



近世の出土遺物



エックス線写真



時期不詳遺物



古銭

あ と が き

標高90～100mの山間の谷間、急な傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部での調査が4か月間行われた。覆い茂る竹を切り倒し、雨のたびに流入する土砂を防ぎ、悪条件での作業を余儀なくされた様子が調査日誌からうかがえた。大変な発掘調査であったと思う。

整理作業は、発掘担当者と違ったため、現場の様子が分らず戸惑いが多かった。要領を得ない面もあり、多くの方にたくさんの迷惑をかけた。しかし、発掘担当者をはじめ、周囲の職員のアドバイスや作業員さんの尽力により無事刊行することができた。特に縄文土器については東和幸氏、石器については宮田栄二氏、土師器や輸入陶磁器については池畑耕一氏、中村和美氏にご教示いただいた。

多大な御協力をいただいた地元の方々はじめ、伊集院町教育委員会ならびに整理作業に従事して下さった方々に心より感謝申し上げます。(最上)

整理作業員

有川ひとみ・土橋 文子・西村 律子・春山まり子・日高千津子
藤本 恵子・三谷加代子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(94)

柳原遺跡

発行日 2005年3月

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
T E L (0995) 48-5811

印刷所 株式会社あすなろ印刷
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36
T E L (099) 250-7033